る中にも無政府黨は屢〻農民を煽動して富豪や貴族を襲はせて居る。地方の小都會では暴徒が大手を揮つて大道を濶歩して居る。巴里では莫大の金を投じて貧民を救助し、暴徒を鎮めることに盡力したが、而も到底支へ切れぬといふので國立工場中の遊食の徒を解傭する事になつた。所が之に對して非常に激昂したのは巴里の無頼漢と其親方どもであつた。

第九二節　外敵將に襲來せむとす

眼を轉じて外國の有樣を見れば歐洲列國は佛國王族が危險の地位にある事に深く注目して居る。彼等は佛國亡命者の口から革命黨暴行の有樣を聞いたのである。これ等の亡命者は獨逸の片邊に根據を据え、各國王宮を訪ふて大に革命運動の復讐をなすべきことを勸めた。各國の君主等は元來斯かる運動を蛇蝎の如く嫌ふて居るのであるから、如何にもして革命黨を壓伏せむものと遙に佛蘭西の天を睨んで居る。そこで巴里を始め佛蘭西全國は何時同盟軍の恐しい攻擊を受けるかも知れぬといふので、非常な心配である。若しさういふ事が起つて來れば折角の革命運動は逆戻りするばかりでなく、之が主唱者は屹度嚴罰に處せられるに違ない。だから主唱者等は列國が戰備を調へつゝあるを聞く毎にたゞ戰慄して居たのである。又革命黨が沒收した土地を買取つた人には、其土地を返さねばならぬ日が來はせぬかと心配して居た。又革命のお蔭で折角重き負擔を免れた人々は再び苛稅に苦む日が來はせぬかと思ひ、枕を高うして眠ることが出來なかつたのである。

第九三節　憲法違反者の跋扈

路易十六世が脫走を試みて以來、この種の不安は一變して王室に對する强き猜疑心となつた。一七九一年九月國王が新憲法を承認した時は恰も普墺二國の君主がピルニックに會合して佛國革命黨を壓迫しやうといふ話が纏つたと聞いて國民が外國襲來を怖れ、王室に對する疑心の愈〻深くなつた時期であつた。その實ピルニッツ會議なるものは極めて穩かな會議で、佛國王と國民議會との間を調停しやうといふ位のことに過ぎなかつたのである。又當時の眞面目な佛國人は早

や政治騷ぎに倦み果てたものだから、政治上の事は何うでも善い、たゞ自分の現在の境遇で滿足しやういふ樣な心になつて來た市民が政治の事に非常に冷淡になつた事は新撰擧の場合に愈〻明瞭となつた。

然るに他方には時を得顏に跋扈して居る少數の冒險政治家があつた。彼等は甘言威嚇等凡ゆる手段によつて成功を博しつゝあつた。國民の多數は漸く鎭つて、今は新憲法の爲めに時と力とを費すのが惜いと思つて居る時、少數の政治家ばかりが益〻盛に活動したのである。かれ等は革命を進めて大騷亂となし、混雜に乘じて政權を掌握するつもりであつた。勃々たる野心家、又は功名心を抱ける者等は好機失ふべからずといふので、澤山の倶樂部を組織するやら、市井浮浪者を集めるやらして、政治的權力を振り舞はしたのである。所がこの政略は最初から成功であつた。新議會の中には穩和黨が多數を占めて居るに係らず、是等少數の煽動者に對し斷乎たる反對をすることが出來なかつたのである。その上新政府は出來てもまだ政府の權限が定まつて居ない。即ち革命の條件が定まつて居ない。そこを利用して過激黨の政治家は自分勝手な條件を宣言して益〻權力を揮ふたのである。而して今や國王の言ふところは少しも當にならぬ財政の窮乏は殆ど極度に達して居る。穩和な手段は最早國事を解決する途でないやうになつた。宗教上の爭は熱狂的となつて居る。その上に外敵襲來の恐があつて國民は最早靜思熟慮する餘暇がない。是等の事情は何れも國家の擾亂を增す所以であつたが就中最も人心をして恟々たらしめたものは外敵襲來の一件であつた。

第九四節　ヂロンド黨、ヂャコビン黨に應援す

憲法の蹂躙者たる過激黨の政治家等は妙に戰爭を懼れたのである。其譯は若し戰爭でもあれば一切の政權は一人の武斷的主權者の手に落ち、自分はたゞ頭を屈して之に從はねばならぬやうになるからである。それにも係らず、單に目前の利益だけから言へば矢張り戰爭のある方が善かつたつである。そこで彼等の中に主戰論者が現はれた。彼等は陳腐な役に立たぬ憲法を修正するよりは、寧ろ根本的に改造した方が善いと考へたのである。彼等は戰爭を以て第一の手段と考へた。此黨派が所謂ヂロンド黨でヂャコビン黨と殆ど同一の主義を有する團體で

あつた。然しジロンド黨はたゞ立憲君主政體を少し共和政體的にしたいと思つた丈で、それより以上の事を望んだものと見ることは出來ぬ。この黨派から出した代議士の中には雄辯家や手腕家が多く、之が聲援者の中にも大い知識を持つて居る者もあつたので、ジロンド黨は忽ち議會でも優勢を占めることになり、大に破壞的運動を始めたのである。其處へ例の暴民等は外から之に應じ、盛に怒鳴り立てゝ討論の邪魔をし議員等を威嚇するといふ始末である。是に至つて議會の自尊心は全く地に落ち、其威嚴は暴民等の野卑な行動の爲めに汚された。今や革命の渦卷が漸く急調となるに連れて、之まで社會の底に沈澱して居た滓が舞ひ上つたのである。元來ジロンド黨員は暴民の代表者等と親交を結び、又は暴民等に媚びる程に品位の低い人々ではなかつたのであるが、たゞ大望心や嫉妬心に驅られて終に茲に到つたのである。斯ういふ事から段々進んで終に議會も倒れる樣になり、一天萬乘の國王が斷頭臺上の最期を遂ぐる事となり、軈てジロンド黨夫自身の滅亡となり、巴里人の專權となり、有名なる九月の虐殺となり、恐怖時代となり、終には二十年の間歐洲を鮮血の巷と化するに至つたのである。

第九五節　革命戰爭の破裂

對外戰爭の序幕は佛獨間の葛藤であつたが、此葛藤は重要なる結果を生じたのである。かのラファエットがブルボン家の白色旗に赤青二色を添へて三色旗を造り、此旗が世界の津々浦々に飜へる時が來るであらうと揚言した日から、革命的精神は大に世に歡迎されるやうになつた。歐洲の諸君主が革命運動を惡んだのも、革命黨が俄に君主政體を攻擊し始めたのも一は斯かる事情があつたからである。今や列國の君主等は佛國革命を罵倒して佛國人を激昂させ又恐怖させて居る。獨逸は佛國王黨の亡命者を保護して革命政府の敵に加擔して居る。獨逸皇帝は平和的解決を希望して居りながら、飽くまで傲然たる態度を取つて居る。斯かる有樣であつたから佛國民は人權の爲め自由の爲め劍を執つて起つことを辭しなかつたのである。拔目なき列國政府は流石に國際法を重んじ、佛國の亡命者を諸方に散在させて居る。そして自分等は少しも戰爭の準備などして居ないと宣言した。それにも係らず佛國の主戰論者は容易に宣戰の口實を見出したので

あると言ふのは佛國がアビニョンとベネーサンの地を併呑した爲めに羅馬法王に損害を與へた事に對し、又佛國がアルサスに於ける封建的權利を剝奪した爲めに獨逸の或諸侯が迷惑を被つた事に對し、墺帝レオポルド二世は法王及び是等の諸侯の爲めに喧しく損害賠償を請求した。且つ皇帝は佛國民に向つて列國君王の安靜を傷けない樣な政府を組織する事を逼つた。そこでジロンド黨は墺國の罪狀を數へ、國王に逼つて正式に宣戰の布告をさせたのである。

第九六節　革命政府の暴政

佛國民は自分等の苦痛には頓着なく、只管他の諸國民にのみ革命の恩惠を施しつゝ奔馬に鞭つて猛進したのである。之が爲めに革命の潮流は鮮血の巷と化したる佛國を去つて歐洲の全土を一掃する勢で進行した。而して佛國民自らは極惡なる寡人政府の下に苦んだのである。彼等は民主政府といふ名義の下に野蠻的なる過激黨內閣から散々な目に遭はされたのである。實に歷史あつてより以來之ほど惡い政府の出來たことはあるまいと思はれる程であつた。素より斯かる無法な政府が長續きをする筈はない。必ず早晩內部から崩れて來るに極つて居る。けれども國民が一足飛びにこの苦境を脫し得るものではない。社會的反動として起つた殘忍なる情も、無政府的害惡も一時に消失するものではない。佛蘭西が全くこの苦境を脫して社會の秩序を回復するまでには、先づ武斷的專制政治といふ難關を通り拔けなくてはならぬ。亂暴なる寡人政府の難を免れる爲めには先づ一人の簒奪者に屈從せねばならなかつたのである。

第九七節　革命軍の勝利

愈、佛蘭西が開戰を布告した時から、ナポレオン・ボナパートが文武の大權を掌握するに至るまでの出來事を、一々記載することは本書の目的でないから省略するが、實にこの間に於ては驚天動地の大事件が數多起つたのである。佛蘭西は內は殺戮、强奪を以て滿ちながら、外には全歐洲を對手に戰端を開いたのである。此戰爭は初は主義の爲めの戰爭であつたが、後には征服を目的とする戰爭となつた。佛蘭西は列國の君主等が小田原評定をして居る間に、盛に壯丁を徵發して巨

大なる國民軍を造り、嚴格に之を訓練して天晴れの軍隊としたのである。斯くて佛蘭西が戰爭の初から終まで「强者は弱者を掠める權利を有し、勝者は敗者に對して違約の權利と勝手に分捕する權利とを有する」ものなるが如く振舞つた有樣は、全く野蠻時代の擧動であつた。佛蘭西は今や極惡なる民主政府時代に入つたのである。之に較れば前の壓制君主の罪も大に恕すべきものと言はねばならぬ。その他波蘭分割事件といひ、某國が佛蘭西共和國と秘密談判をした事といひ、何れも歐洲の國家組織が腐敗の極に達して居る事を示すものであつた。而して君主專制主義の運命は早や旦夕に逼つて居る。少しの瑕瑾でもあれば忽ち顚覆するのであつた。此時に當つて佛國は歐洲諸國家の救濟者であるといふ體に見せかけて、諸國を攻擊して其政府を倒し、革命政府を之に代へたばかりでなく、是等の諸國に內亂を起させて過激黨に權力を得させ、斯くして是等諸國の生命財產を自分の手で自由に使用し得る樣に努めたのである。

第九八節　ボナパートの專制主義

然るに是等の事情は次の十年間に全く一變して仕舞つた。革命戰爭や大混亂の眞只中から、多くの善良なる果實が得られる事になつた。然し其果實も先づ專制政府といふ鎔鑛爐の中で精錬されるまでは、永久確實なものとなる譯に行かなかつた。實にボナパートが獨裁主權者となるまでは、革命が人類に與ふる永遠の賜であつた正義と統一といふ觀念を深く人民の腦裡に刻むことが出來なかつたのである。ボナパートの野蠻的功名心が舊歐洲の勢力と衝突して之に大打擊を與へ、舊制度の最惡なる弊害を粉碎したまでは、近世的政府の基礎はまだ確立することが出來なかつたのである。そこで本書に於ては折衷的方法を取り、第一期革命戰爭中の出來事を省略する代りに、ボナパートの統領時代並に其帝政時代に於ける出來事を順次に述べる事にした。

第四章　歐洲の瓦解

寡人政體は民主政體を出だし、民主政體は專制君主政體を出だす。

……プラトーン……

昔は人の心も教科書的にて一定し居りしが、今や極めて亂雜なるものとなり、鬼神と雖之を識別する能はざるに至れり。……見よ國王は舊衣を脱し、新式の制服を纒ひて現はれ、新王國は麵麭と同じく續々製造發賣せらるゝにあらずや。然るに數多の諸侯は憐れにも其邸宅より驅逐せられ、己が麵麭を得る爲めに他に途を講ぜざるを得ざるなり。

……ハイネ……

無政府てふ多頭の怪物を制御し、諸國民間の爭鬪を治め得る其手は、大理石の如く優しき手なるか、若しくは強大なる力を有する手なるか、二者その一に居るべし。

……ハイネ……

第九九節　一七九九年ブルメーアの月十八日の政變

三級會が革命の聲を揚げてから十一年ばかり經過した頃佛蘭西全國は一個の人傑によつて支配されて居た。この人傑は大騷亂の中から生れ出で、大騷亂を鎮定し得る手腕をもつて居た。殊にロベスピーアが戰爭を恐れて居たのも今となつて見れば無理ではなかつことが解る。ラファエットやツモリエが心配して居たことは、今ナポレオン・ボナパートなる人物によつて愈〻實現したのである。ボナパートは意氣揚々として國家の運轉手となつた。第八年目の憲法はボナパートが事實上佛國の獨裁主權者たる事を承認したのである。

然るに此事たるや全く人の意外とする所であつた。ボナパートはカムホフォルミオ條約によつて佛國空前の大膨脹をさせて置いて、自分は漂然として埃及遠征の途に上つたのであるから、最早ボナパートの計畫に就て猜疑の念を抱く者はなかつたのである。彼の不在中は督政官等の腐敗や失敗の爲めに佛蘭西の軍隊が敗北ばかりして居るので、人民は第三年の憲法を改正したいと思ふやうになつた。そこで高僧シーエは過去の失敗に鑑みて稍〻完全な新憲法を案出した。而して國民は唯この新憲法を實施し得る有力なる人の出るのを待つのみであつた。其處へボナパートが突然埃及から歸つて來た。ボナパートと言へば誰一人その人傑たる事を知らぬ者はない。又何れの黨派中にも彼を敵とする者は一人も居ない。彼が埃及で失敗した事は宜い加減に詐かしてある。今や彼の信用は無限で

ある。そこでボナパートは一も二もなく政權を托せられる事となつた。彼は一應辭退して見たが、遂にシーエと共に國事を見る事に決した。そしてブルメーアの月の十八日(即ち十一月九日)には武斷政策によつて政權を自分の手に收めたのである。

第一〇〇節　ラスタット會議(一七九八年——一七九九年)

ボナパートが埃及へ向つて出帆した頃は丁度ラスタット會議の最中で、同會議ではカムポフォルミオ條約中、殊に佛蘭西と獨逸との平和條件に關する項目の實行問題を討議して居たのである。又この時は佛國革命に對する第一同盟戰爭も已に終結を告げて居たのである。普魯西は一七九五年のバーゼル會議で佛國と和を結び、西班牙は更に一歩を進め、一七九六年セント・イルデフォンゾーの會議で佛國と同盟を締結した。又タスカニーの如きは佛國に對して全然屈從の態度を取つたのである。此時に當つて獨り武器を捨てなかつた者は英國である。獨逸皇帝は匈牙利及びボヘミアの王といふ資格で佛國と平和を結んで、ロムバルヂー並

にネーデルランドにある埃國の領地を佛國に割讓し、又イオニア群島並にアヂージェ河の以西にあるヴェニスの領地を殘らず佛國に與へる事に同意した。而して皇帝自らはヴェニス及び其以東にある諸州を合併したのである。斯くの如く敗者の地位に立つた埃國でさへ無害なる隣國に對して多年の欲望を達したのであるから、況てや勝者たる佛國が弱い國々の權利を無視して、自分の腹を肥したことは怪むべき事でない。埃帝は帝國保全の爲めに平和を議するのであるといふて、獨逸人を平和會議に招いたのであるが、裏面には佛國と密約して普魯西所屬の地を除くの外、ライン河の左岸にある諸州を悉く佛國に合併する事、又合併の爲めに迷惑を受けた者は獨逸の方で賠償して貰ふ樣にする事、又たとひ戰爭が長引いても皇帝は自分が必要と認めるより以上の助力をしないといふ事に同意した。然るに此密約はボナパートがまだ出帆しない内に威嚇によつて平和會議から撤回させられたのである。斯くて賠償問題の討議に移つた時、佛國の代表者から法外の要求が提出されたので談判中止となつたのである。

第一〇一節　第二同盟戰爭（一七九九年）

さうして居る内に第二の同盟戰爭の機が漸く熟して來た。といふのは露國皇帝パウル一世は豫ねて佛國の革命運動を喜ばなかつたのである。そこへ同皇帝の保護の下にあつたマルタ島がボナパートに占領されたといふ報知が來た。其上佛國は兵力に訴へて瑞西共和國を建設し、剩へ羅馬法王を流竄して羅馬共和國を建設したのである。そこでパウル一世も最早之までと思ひ、從來の自重的態度を一變して英國と同盟を結ぶことになつた。土耳其はその領地たる埃及がボナパートに攻擊されたので、已むを得ず多年の怨を捨てゝ露國と同盟したのである。墺國は佛國がカムポフォルミオ條約に對して正當な償を拂ふべき筈であるのに、少しもその意のなきを見て再び兵を擧げる決心をした。又ネープルスは一には羅馬共和國が教會の神聖を瀆すを憤り、一には佛國の侵略主義に驚いて、同じく同盟に加入した。所がネープルス王は同盟軍の應援を待たずに早まつて兵火を開いた。初の間は多少旗色が善かつたが間もなく佛軍に破られて、終にネープルス共和國と成り果てたのである。墺國はネープルスの愚を學ばず、靜に露軍の到着を待つて居た。斯くて一七九九年の初め愈、同盟軍が打ち揃ふて佛軍と開戰することになつた。同盟軍の方ではカール大侯爵及び露國のスワロフなどいふ名將を戴いて居たが、佛軍の方には此時カルノーの如き智謀家もなければ、ボナパートの如き名將もなかつたので、同盟軍の爲めに散々に破られたのである。所が戰爭が漸く終りかけた頃、墺國政府の我慾の爲めに露國の軍隊は窮境に陷つた。さなきだに日頃墺國の處置を面白からず思ふて居た露國皇帝は此事を聞て非常に憤慨して終に軍隊を引揚げて仕舞つた。之は佛國の爲めには誠に有り難い事であつた。といふのはボナパートが第一統領となつた頃の佛國は軍備がまだ薄弱であつた。そこへ優勢なる同盟軍が組織されたのであるから、若し露軍が再び出て來るか、又は普魯西が同盟軍に加入したならば、佛蘭西は到底同盟軍に當ることは出來なかつたであらう。實に此時の佛國の有樣は頗る振はなかつたのである。各地に散在して居た佛國の軍隊は危險な地位にあつた上に糧食が缺乏して居た。佛國が建設したネープルス共和國は王政に復古して、共和黨員等

は相率ゐて大僧正ルッフォーを主領に戴ける「信仰隊」に降參した。その外羅馬共和國も倒れ、チサルピナ共和國も倒れて仕舞つた。墺國の軍隊が攻め寄せるといふのでラスタット會議までが散會となつた。佛國の密使は墺國の騎兵の爲めに殺害されたのである。

第一〇二節　ボナパートの統一政策

此危機に際して佛蘭西を救ふた者はボナパートである。佛國民は其不幸より救はれむが爲めに大英斷を以て一切を此一人の人傑に委せた。佛國は今や革命の第二期に入つたのである。喧囂を極めた革命時代は過ぎ去つて、統一的革命時代が到着したのである。而して之が統一者ボナパートは曾て政界にゐつた人でもなく、又政黨員でもなかつた。唯自己の安全の爲めに一時ジャコビン黨に屬した事があるだけである。然しボナパートには其生涯を一貫せる一の目的があつた。其目的とは外ではない、唯その大望心を滿足さす事であつた。實にボナパートの大望心はすでに抽象的となつて居た。否殆ど非人格的となつて居たのである。この

欲望を滿足さす爲めには彼は如何なる機會をも外さず之を執へたのである。彼の眼中には此目的を達する事より外には何物もなかつた。斯くて彼は十八世紀に於ける第一の好運兒、又最大なる好運兒となつたのである。烱々たる彼の眼光は明かに革命の前途を豫想することが出來たと見え、既に一七九七年に於て彼は或倶樂部に向つて「三百代言等が軍人を斷頭臺に登らせる時機は早や過ぎ去つた」と言ふた事がある。又其前年ネープルス王の使者に向つて「諸君の目には余輩が三百代言等の爲めに戰爭して居ると見えるか」と尋ねた事があるが、思ふに彼は此時から早くも革命運動と舊制度との中保者を以て自任して居たのである。そこで彼は國家大騷亂の跡へ少し手加減を加へた舊制度を立てゝ、自ら最上權を握らむとしたのである。換言すれば彼は佛蘭西を全く自分に服從させることによつて、國の平穩を保たうとしたのである。

だからボナパートは第一統領となつた時でも、自分が愛國的熱情を持つて居ることを荐りに吹聽し、同時に國内の騷亂は早や鎮定したのであると口を極めて公言した。又四民皆平等であるといふこと、並に佛國には實力の有無によつて定

まる階級の外に一切階級なるものはないといふことを宣言し、又ボナパートの命令に對しては決して異議を申立てぬといふ條件で、新に一般市民權を承認した。そして前に革命黨が作つた四民平等主義の法律の大部分を削除して、新に折衷的法律を編成した。但しブレターン州の如き內亂を起した地方に對しては、ボナパートは嚴刻な處置を取り、ブリューンの如き過激黨員に之が所罰を命じた。又彼は一方には有力な將校等が彼の權勢を嫉む餘り反抗するやうな事はあるまいかと心配して、成るべく彼等の機嫌を取ることに努め、他方には共和的精神の盛な軍隊は遠くサント・ドミンゴ島に送つて靜に餘生を送らせたのである。そして凡ゆる手段を盡して、佛蘭西は今回の改革によつて損することろなきのみならず、却つて完全强固なる政體を有するに至つたことを全國民に信せさす事を努めた。而して政府は非常の精勵と手腕とを以て事に當り、財政の基礎を固め、行政を統一し、立法部も公平な精神を以て熱心に其職に從事したのである。

第一〇三節　ボナパートの侵略主義

斯くの如くしてボナパートは自分が遂に一個の獨裁主權者となつたといふ事實を蔽ふ積りであつたが、如何せむ獨裁政治の通弊の現はれるのを止める事が出來なかつたのである。彼は戰爭をする事に就ては素より國民の同意を得た。又此ボナパートなる人物は戰爭以外に權力の基礎を求める樣な人物ではなかつた。彼は單に戰勝の餘威によつて始めて國民を長く服從さすことが出來ると考へたばかりでなく、性來の傾向が侵略的好戰的であつたのである。其證據には既に一七九六年に彼は其士卒に向つて、將來自分が沃饒なる伊太利の平原や大都會を征服して、赫々たる功名を輝かす日が來るであらうと告げた事がある。成る程一方を見れば彼は己が保護の下に數多の共和國を建設して居る。けれども他方を見れば彼は是等共和國の富を奪ひ、其權利を蹂躙して居る。表面には平和的宣言によつて疲弊せる諸國を慰めながら、裏面では絕えず戰爭繼續の準備をして居たのである。

ボナパートは用心の爲めに先づ普魯西に中立的態度を執らせた。次に露國皇帝が其同盟國なる墺地利に對して激昂して居る事と、佛蘭西の革命運動が早や鎭

歴された樣に見える事とを利用して、同帝の好情を得る事が出來た。彼は更に一歩を進めて自分が平和主義である事を示す爲めに、墺國皇帝と英國王とに書面を送つて、切に和睦を求めた。所が此書面は兩國何れに於ても嘲笑を以て迎へられたので、ボナパートは大願成就、今や侵略者としての譏を受くることなく戰端を開くことが出來た。

第一〇四節　リュネヴィールの平和條約

愈、戰爭の幕開きとなつて見れば、佛蘭西は大成功であつた。ボナパートはモロー將軍を遣はして獨逸に攻め入らせ、自分は急にアルプスの天險を踰えて、墺地利の軍勢とマレンゴの平原に戰ふて大勝利を得た。そこで墺軍は士氣全く沮喪したのであるが、豫て英國との約束があるから、媾和談判を開くことを差控へたのである。その後休戰は又しては開戰と變じ、戰爭は次第に長引き、終にモロー將軍がホーヘンリンデンの激戰に花々しき勝利を得て、墺都攻撃の門を開くまでに至つた。そこでリュネヴィールの平和が結ばれて、墺帝フランシス二世はラスタット條

約に基いて、帝國を擔保にして佛國と條約を結んだ。其上墺國はカムポフォルミオ條約に從て伊太利のアヂージェ河を以て國境となし、佛國は白耳義とライン河の左岸を取る事になつた。而して此割讓の爲めに土地を失ふた諸侯は代償として獨逸帝國内の土地を受ける事になつた。又佛國はタスカニーの地を得て之を西班牙に賣り、其價としてパルマ、ルイジアナの兩地、並に軍艦六艘、金若干を得た。其後間もなくネープルスとも平易な條件を以て平和を結ぶことが出來た。

第一〇五節　北歐諸國の武裝的中立

然るに戰勝の光榮は二の意外の事件の爲めに霞をかけられたので、佛蘭西はまだ全世界と平和を保つて居ると宣言することが出來なかつたといふのは之までゞさへ英國が海上に雄飛して傍若無人の擧動をなした事は、長く諸國間不平の種であつたのが、今英國が佛國革命軍と戰端を開いてから此不平は絶頂に達したのである。兩交戰國が勝手氣儘の行動をなした爲め、中立國の迷惑は非常なものであつた。そこで瑞典と丁抹とは貿易保護の目的で同盟を造り、露西亞と普

魯亞との二國をも之に加入させ、斯く四國が互に協議して、一七八〇年に出來た北歐諸國の武裝的中立を復活さすことに決した。所が英國政府は之を以て戰爭の布告と見做し、同盟國の軍隊がまだ集らぬ内に早くも戰備を整へたのである。一八〇一年ネルソンの率ゐた艦隊は海上の危險を冒してコッペンハーゲンを砲擊した。そして丁抹の砲臺と艦隊を對手に激戰の結果、終に丁抹の軍を破ることが出來た。ネルソンは艦首を轉じて瑞典を攻擊する積りであつたが、同盟國中の最强國なる露國の皇帝が俄に薨去したので攻擊を見合はすことにした。露國皇帝パウル一世は性質が狂暴で、極めて氣儘な人であつた所から、周圍の人々も持て餘して居たのであるが、終に宮廷内の陰謀によつて暗殺に遇ふたのである。其子アレキサンドル一世は朝野歡呼の裡に帝位に即いた。新帝は斯かる事情で帝位に即いたのであるから、出來るだけ宮廷内の感情を害はぬ樣に氣を附けた。そして外は、英國に對して平和を申込んだのである。何故平和を申込んだかと言へば英國の商業發達は露國に取つても大なる利益であつて、之によつて英國海軍の横暴より受くる損害を償ふて餘あることを看破したからである。そこで他の

同盟國も已むを得ず平和的態度を取ることに同意した。其後ペテルスブルグ會議に於て、國旗は海上で貨物を保護するものでないと云ふ事、又軍艦は義勇艦隊を除くの外、一切の運送船を檢査する權利を持つて居るといふ事に對し露國は同意を表したのである。之に對して英國の方では書面上の封鎖を取消し、自今唯直接戰爭に使用し得べき物品の外は戰時禁制品と見ないといふ事を承認した。丁度其頃埃及にある佛軍は大將が歸國してから後、兎角勢が振はなかつたのであるが、終に英軍に降服して仕舞つた。但し降服の條件としてツーロン港まで自由に歸航することを許された。折しも英國では内閣の更迭があつて、歐洲の平和的終局に向つて一歩を進めることが出來た。

第一〇六節　英國と愛蘭との合併（一八〇〇年）

愛蘭は一七八二年以來立法權と司法權とに於て既に獨立して居たのであるが、國内に反旗を飜へす者があり、それには義勇軍の應援もありそうであつたから、英國政府は是非なく愛蘭との關係一切斷ち切つて仕舞つた。そこで兩國の關係

はたゞ英國王が憲法上に於て愛蘭の君主たる資格をもつて居るといふだけになつた。然るに獨立後の愛蘭政府は失政と腐敗とに滿ち、一七九八年には一揆が起り、次で國王が病氣の爲め國事を見ることが出來ぬ樣になつた時、攝政者問題に關して兩國の意見が衝突するといふ有樣であつたから、之を見た英國は愛蘭合併を目今の急務と感じ、巨額の賄賂を遣つて、愛蘭政府をして他年占有して居た權利を捨てゝ愛蘭合併案に同意させた。而して其條件として愛蘭は英國の國會に相當數の代議士を出すことになつた。

第一〇七節　アミアン條約(一八〇二年)

愛蘭の合併に就て加特力教徒が異議を唱へなかつたのは、必竟ピット內閣が彼等に自由を與へるに違ないと信じたからである。實際此信仰は誤つて居なかつたのである。所が國王ジョージ三世は加特力教徒が英國の市民權を得ることを何うしても承知しない。承知しない理由は、若し少しでも加特力教徒に讓步すれば、國教會の國教會たる所以を失ひ、隨て即位の時の宣誓にも背く事になるだらうといふ子供らしい信仰をもつて居たからである。そこでピットは已むを得ず辭表を呈出した。之が爲めに佛國の侵略主義を喰ひ止めむとする政策も終を告げることになつた。

ピット內閣に代つて現はれたアヂントン內閣は直ちに媾和問題に着手した。新內閣が斯かる弱味を現はした事は、又一方から見れば無理もない事情もあつた。と言ふのは佛國革命の潮流は英國の力で早や喰ひ止められ、其上ボナパートの獨裁政治の下に永久に鎭壓された樣に見えたからである。又ボナパートの大望心も終に滿足を得たのであるといふ事はピットでさへ信じて居た位であり、又英國政府が負ふて居た六億の負債も國民の奮勵や、外國へ卸した資金などの爲めに、早や三分の一を償却するといふ運になつたからである。そこでアミアンの平和條約が成立つた。此條約によつて英國は第一に、和蘭から取つたセーロン島と西班牙から取つたツリニダッドとを除くの外侵略したる殖民地を殘らず還附すること、第二、マルタ島をセント・ジョージの騎士に還附すること、第三、英國が占領した地中海の港灣と島嶼とを放棄することなどを契約した。之に對し佛國は南部伊

はたゞ英國王が憲法上に於て愛蘭の君主たる資格をもつて居るといふだけになつた。然るに獨立後の愛蘭政府は失政と腐敗とに滿ち、一七九八年には一揆が起り、次で國王が病氣の爲め國事を見ることが出來ぬ樣になつた時、攝政者問題に關して兩國の意見が衝突するといふ有樣であつたから、之を見た英國は愛蘭合併を目今の急務と感じ、巨額の賄賂を遣つて、愛蘭政府をして他年占有して居た權利を捨てゝ愛蘭合併案に同意させた。而して其條件として愛蘭は英國の國會に相當數の代議士を出すことになつた。

第一〇七節　アミアン條約(一八〇二年)

愛蘭の合併に就て加特力教徒が異議を唱へなかつたのは、必竟ピット內閣が彼等に自由を與へるに違ないと信じたからである。實際此信仰は誤つて居なかつたのである。所が國王ジョージ三世は加特力教徒が英國の市民權を得ることを何うしても承知しない。承知しない理由は、若し少しでも加特力教徒に讓步すれば、國教會の國教會たる所以を失ひ、隨て即位の時の宣誓にも背く事になるだらうと

いふ子供らしい信仰をもつて居たからである。そこでピットは已むを得ず辭表を呈出した。之が爲めに佛國の侵略主義を喰ひ止めむとする政策も終を告げることになつた。

ピット內閣に代つて現はれたアヂントン內閣は直ちに媾和問題に着手した。新內閣が斯かる弱味を現はした事は、又一方から見れば無理もない事情もあつた。と言ふのは佛國革命の潮流は英國の力で早や喰ひ止められ、其上ボナパートの獨裁政治の下に永久に鎭壓された樣に見えたからである。又ボナパートの大望心も終に滿足を得たのであるといふ事はピットでさへ信じて居た位であり、又英國政府が負ふて居た六億の負債も國民の奮勵や、外國へ卸した資金などの爲めに、早や三分の一を償却するといふ運になつたからである。そこでアミアンの平和條約が成立つた。此條約によつて英國は第一に、和蘭から取つたセーロン島と西班牙から取つたツリニダッドとを除くの外侵略したる殖民地を殘らず還附すること、第二、マルタ島をセント・ジョージの騎士に還附すること、第三、英國が占領した地中海の港灣と島嶼とを放棄することなどを契約した。之に對し佛國は南部伊

太利を放棄することを約束した。

然るに今回の平和は全く一時の元氣疲勞から起つたのであるから、血氣に逸る人々はこの條約に對して一向滿足しない樣子であつた。隨つて有識の士は此平和が一時の休戰に過ぎないことを信じて居た。

第一〇八節　レーゲンスブルグに於ける獨逸國會

（一八〇二年——一八〇三年）

今や革命が神聖羅馬帝國に最後の打擊を與ふべき時となつた。といふのは獨逸國會はリュネヴィール條約に基いてレーゲンスブルグに開かれ、リュネヴィール條約の爲めに土地を失ふた諸侯に對する賠償問題に就て討議する事になつた。レーゲンスブルグの國會は第二のラスタット會議とも言ふべきもので、議題の如きも殆ど彼と同一のものであつた。強いて二者の相違を擧ぐれば、レーゲンスブルグ國會の討議法はラスタット會議の討議法よりも亂暴であつたといふだけである。扨て色々と議論の沸騰した揚句八名の委員を擧げ、リュネヴィール會議の時、特別協議

に附する爲めに殘してあつた細目に就て佛國政府と協議さす事にした。所が此委員の仕事はラスタット會議の仕事よりも尙更形式的のものであつた。

神聖羅馬帝國の分裂瓦解は既にラスタット會議の時から現はれて居た。宗教改革の爭も徒に帝國內の諸侯を互に反目させて、帝國の結合を緩める所以であつた。爾來諸侯は各〻獨立の君主政體を組織せむとする野心を抱き始めたのである。又新進の普魯西と舊い墺地利の帝室とが互に中の惡かつたことや、數多の小諸侯がこの二强國の爲めに犧牲となりはせぬかと心配した事なども、帝國の結合力を弱める原因となつた。だから皇帝がカムポフォルミオ會議の時、非愛國的行動をなしたこと（即ち皇帝が豫て帝國の保全を保證して置きながら、ライン左岸の地を殆ど殘らず外國人の手に渡したこと）がラスタット會議で端なくも暴露した時には、諸侯は今度新に分配さるべき土地を少しでも多く取らむと我を勝ちに競爭を始めたのである。そこで徒に喧々囂々と下らぬ議論をするものがあり、或は卑劣極まる姦策を繞らすものがあつた。何か問着の起つた時に之を判決する權を持て居たのは佛蘭西の統領であつたから、統領の機嫌を取る爲めには諸侯は

如何なる卑劣手段をも厭はなかつたのである。

第一〇九節　獨逸諸侯の競爭

リュネヴィールの平和が結ばれた時にも同樣の卑劣手段が繰返された。そして表面上ではレーゲンスブルグが爭論の場所であつたが、實際の競爭場は巴里であつた。是等の諸侯はボナパートの連戰連勝の有樣を見ても、まだ愛國心を覺醒することが出來ぬのみならず、寧ろボナパートのやうな人傑の下に附いた方が却つて利益であると考へて益〻卑劣手段を弄したのである。所が斯ういふ非愛國的な考を抱いたものは諸侯ばかりでなく、一般人民も殆ど同樣の希望を持つて居た。即ち上下共にボナパートのやうな一世の偉人に媚びるのが上策と考へたのである。英雄崇拜も茲に至つて其最暗黑面を現はしたのである。實に英雄崇拜の爲めに利己心は更に進むで卑劣なる依賴心と化し、國民の自尊心は全く消滅したのである。ボナパートはフォン・トライチュケの所謂「惡魔の半面眞理」を用ふるに妙を得た人であつたから、獨逸の人民等は其手に憑つて、諸侯等の無分別な處置に贊

成したのである。

第一一〇節　獨逸に對するボナパートの處置(一八〇三年)

ボナパートは獨逸に對しては古今絕倫の手腕と兩舌主義とを以て佛國の宿志を貫いた。即ち一方には飽くまで公明正大な態度を示し、自分は眞心から獨逸の一致と平和幸福とを希望して居ると宣言しながら、他方にはボナパートに頭を下げて來る諸侯に對して別々の條約を結び、又諸侯の封土組織を一變して、ボナパートに據らなければ權力も權力でない樣な權力を諸侯に與へ、又ボナパートに依賴しなければ滿足することの出來ぬ樣な大望心を諸侯の心に起させた。詰りボナパートは獨逸の諸侯を自分に從順なる臣下としたのである。彼は又一方には年少の露帝アレキサンドル一世――露帝は多くの獨逸諸侯と姻戚の關係がある所から、ボナパートは容易に之と親交を結ぶことが出來たのである――とも表面上の相談をした上で、諸侯の土地賠償問題に關する原案を草して、之を獨逸の國會に提出した。所が旣從的なる獨逸國會はボナパートと露帝とに關す

る項目に就ては悉く同意を表した。其結果として普墺の二國は前よりも一層勢力の平均を保つ樣になつた。即ち墺地利は西部獨逸に於ける勢力を失ふ事となり、普魯西はライン地方の領土を讓つた代に充分の賠償を得て滿足した。而してバヴァリア、バーデン、ウルテンベルグ等の諸國は却つて廣大なる土地を加へられたのである。

第一一一節　加特力敎國の征服

素よりボナパートは一方から言へば獨逸の政治組織を益〻攪亂したに相違ないが、他方から言へば少くとも獨逸に於ける舊弊中の最惡なるものを取り除けたことは事實である。即ち彼が獨逸を分裂さす爲めに取つた政策は、同時に加特力敎會の主權者、及び殆ど凡ての自由都市なるものを廢滅に歸せしめたのである。素より是等のものは早晩野心ある隣國から攻擊される日が來るであらうといふことは遠き以前から解つて居た。又斯かる攻擊を受けることは實際獨逸の公共的生活を活潑ならしめ、又之を發達さす所以であつたのである。何うしても加特力敎の世俗的權力が破壞されぬ間は、新敎徒が獨逸帝國の政務に關係して文明的勢力を振ふことは出來なかつたのである。弊害多き僧侶政治が倒れて、國家的政府が起るまでは、獨逸は近世的改革の恩惠に與ることは出來なかつたのである。高僧や自由都市が近世的政體に興味を持つ樣になり、之が爲めには自分等の獨立を犧牲にすることを厭はぬ樣になるまでは、中流階級の中に眞の國家的精神を振起し、又市民權といふ高尚な考を起すことは出來なかつたのである。

第一一二節　和蘭と佛國革命

然るにボナパートが和蘭、伊太利、瑞西等に自分の勢力を張る爲めに取つた手段は、實に是等諸國民の權利を侮辱するの甚しきものであつた。今や和蘭はバタヴィア共和國といふ名の下に佛蘭西の屬國となつたのである。元來此國は長く歐洲大陸中の自由鄉であつたが、革命運動の起る前に內亂があつて、國力も疲勞した爲めに、容易に無政府的ジャコビン黨の餌となつたのである。そして愈〻佛國革命が始まつた時に、國內の不平黨は色々の事情から佛國に親む樣になつた。行政長官(スタットホールダー)

と商人貴族とが衝突した時、後者は進歩的傾向を有して佛國の思想及び趣味を歡迎し、前者は保守的で英國風に傾いて居た。所が政府黨は次第に勢力が衰へ、オレンヂ家は益〻人望を失ふに反し、共和黨は愈〻一般人民の同情を得る事となつた。其處へ英國が商業上の覇權を和蘭の手から奪ふたといふので、英國を惡み、行政長官を惡むの念は益〻強くなり、之に反して佛國に近かむとする情は益〻切となつた。其位であつたからオレンヂ公に對する叛逆が起つて、普魯西王が仲裁を試みた時でも、和蘭國民は佛國に向つて助を乞ふたのである。所がこの時佛蘭西共和國は王政時代の佛蘭西が擲つた政策と同一の政策を執る必要を感じて居た。何故かといへば佛國革命の初めの時に和蘭や伯耳義からの逃亡者等は佛國無政黨の爲めには少からぬ働をしたので、重立つた佛國人は其恩に報ふる考であつたのである。其上財政の窮乏を感じて居た巴里の當局者は和蘭の富を見て垂涎三尺といふ有樣であつた。又和蘭の位置は佛蘭西が歐洲を對手に戰爭するには屈强の位置であつた。そこで佛蘭西は和蘭から同盟軍を驅逐し、行政長官を逐ひ掃つて、後へバタヴィア共和國を建設したのである。而して此バタヴィア共和國は佛

蘭西共和國の組織を眞似たものであるのみならず、佛蘭西の軍隊に守られ、ジャコビン黨内閣の苛稅に苦められたのである。堂々たる歷史を有する和蘭も今は憐れ佛蘭西の一屬國と化したのである。隨つて佛蘭西政府に移動のある度ごとに、和蘭の行政も亦之と共に浮沈したのである。而してボナパートは和蘭の民主的憲法を變更して、自分勝手な憲法に改めて仕舞つた。

第一一三節　伯耳義の革命

前にも述べた通り伯耳義は直接に佛蘭西に合併されたのである。所が元來伯耳義なる國は墺地利の領地で頗る舊弊な所であつたが、それが今先例を破つて佛蘭西共和國に合體したといふ事は、注意すべき面白い現象である。墺帝ヨセフ二世がその全領土を統一し、その制度を一にせむと試みたとき、舊制度を最も完全に固守して墺帝の改革に應じなかつた所は實に伯耳義であつた。加之民主黨までが保守黨と心を合せて墺帝の改革事業に反對したのである。全體伯耳義に民主黨が起つたのは隣の佛蘭西の影響である。同黨は熱心に當時の政府を攻擊し

たのであるが、恰も善し、法王黨がヨセフ二世の改革に不滿を抱いて謀反したので機逸すべからずとなし、直ちに反旗を飜した。斯くて伯耳義に於ける墺國政府が倒るゝや否や、法王黨と民主黨とは忽ち衝突した。そこで機敏なる墺地利の新帝レオポルドはこの機に乘じて再び伯耳義にその權力を確立する事が出來た。けれども改革的君主なるヨセフ二世と法王黨とが互に確執して居た當時から、その主義を宣言して居た民主的感情は中々一朝一夕に消滅すべきものではなかつた。其處へ隣のリエージュの敎管地にも一揆が起つたので、民主黨の勢力は益加はり、最早侮るべからざるものとなつて居ることが解つた。斯かる事情であつたから、長く兵馬に蹂躙せられた伯耳義が、今一度戰亂の巷となつた時は、國內に熱心な親佛黨があつて、佛蘭西共和國の軍隊を歡迎したのである。

然るに伯耳義の救濟者と思つた佛國の軍隊は實は掠奪者であつたといふ事が知れた時には、流石の親佛黨も大に後悔したのである。けれども佛國の議會が伯耳義とリエージュとが佛國に合併されたのは、是等國民の合意の上の事であると宣言した事は全く眞理のない事ではなかつた。

第一一四節　伊太利に於けるボナパートの權政

和蘭や伯耳義の變動は素より外部の强迫によつて起つた所もあらうが、大部分は內から起つたものである、之に反して伊太利共和國が佛國共和政府の屬國となつたのは、全く佛國の仕業否ボナパート一人の仕業である。成程巴里でも伊太利を獨立させなければならぬといふ話は隨分盛んであつた。そしてボナパートがアルプスを踰えるよりもずつと以前から、伊太利人は自由民たる資格を備へて居た事も知れて居た。然るにこの半島政府を新に組織すべき時機が來た時には、佛國政府は毫も伊太利の利益を謀ることなく、たゞ之によつて自分の野心を滿たす事ばかりを考へて居た。而してボナパートが伊太利を佛蘭西の配下にある共和國となすには隨分思ひ切つた强硬政策を執る必要があつた。ボナパートは伊太利こそ自分の名聲に對して耻しからぬ一國家を造るべき所であることを看破した。そして彼は此半島の財源が其政府の自由になる樣な國家を造つて、乃公自ら斯かる國家の建設者たり、保護者たる名譽を荷はむ事を欲したのである。

曾てピードモンテや、ゼノア、ナサルピナ等の地で、愛國者等が騷ぎ立てた時、ボナパートは却つて之を是認して、之によつて自分が伊太利を横奪したといふ事實を掩はむとしたのであるが、今度第一統領となるや否や直ちに假面を脱して伊太利獨立の希望を水烟と化し去らしめたのである。是に於てチサルピナ共和國は全く佛蘭西の屬國となつて仕舞つた。抑〻チサルピナ共和國は一七九六年にモデナ侯國と法王管轄地の一部とを合してチスパダン共和國を造つたのが始まりで、其後カムポフォルミオ條約で墺地利の一部とヴェネシアとを加へて、愈〻チサルピナ共和國となつたのである。

一八〇二年佛國政府の招に應じて、チサルピナ共和國から多數の代表者が巴里に出懸けて行つた。之は該共和國の新憲法に關してボナパートと協議する爲めであつた。所が此代表者等が巴里に行つて見れば、憲法の草案は早や出來上つて居たので、彼等はたゞ之に同意さへすれば善かつたのである。其時からチサルピナ共和國は伊太利共和國と改稱せられ、ボナパート自ら之が首領となつたのである。其後間もなくピードモンテも正式に佛蘭西に合併せれ、パルマも事實上同

樣の運命に陷つた。タスカニーは表面上はパルマ公の配下にあつたが、事實に於てはボナパートの所有であつた。

第一一五節　瑞西と佛國革命

本と自由平等主義を標榜して起つた佛國革命政府が、和蘭共和國をも倒して其自由を奪つたとすれば、所謂自由平等主義なるものも當てにならぬ事が解かる。又瑞西聯邦が崩れた事も同樣の事を證明して居る。元來瑞西といふ國は昔から自治制に慣れ、自由の空氣を呼吸して居たので、外から壓制を加へむとする者でもあれば猛烈な抵抗をするといふ國柄であつた。さういふ國を佛蘭西が今手に入れむとするには、たゞ國内に非常なる惡弊を釀して社會の秩序を攪亂するより外に途はなかつたのである。然るに瑞西で天賦人權論が盛んに唱へられた頃は、人民を窮境から救ひ出し得るといふ希望が漸く熟した時であつた。それ迄は民主黨政治家の下民に對する態度が頗る冷刻であつて、何れの州を見ても民主黨が專横を極めて居り、且つ近世的社會の附物となつて居る樣々の制限や獨占

などが行はれて居たので、是非とも自由平等主義に基いて一切の制度を革新しなければならぬといふ考が都鄙人士の間に大に動いて居たのである。十八世紀中殆ど絶え間なく行はれて居たジェネバの内訌は實に人民が斯かる希望をもつて居た事を示すものである。蓋しジェネバでは人民の知識と富とが發達して居たから、最早少數政治家の專權に委かすことが出來なかつたのである。其處へ佛蘭西の實例が出たので愈〻ジェネバは騷ぎ出したのである。

然し斯かる騷擾は最早ジェネバのみでなく、多くの都市村落も同樣の苦情を申し立て、終に瑞西全國の騷亂となつたのである。而して此騷亂を煽動し、又色々の姦計を繞らして自分の味方を造らむとしたのは佛國である。佛國は暴力と詐僞とを以て終に瑞西の聯邦組織を破壞し、其跡にヘルベチア共和國を建設した。然るに此革命を喜ぶものは唯都會にある政黨や徒黨ばかりで、其他は凡て從前の地方自治制に謳歌したのである。

斯くの如くして瑞西には意見の根本的衝突によつて內亂が起り、全國四分五裂の有樣となつた。そこで誘惑者なる佛蘭西は得たり賢しで瑞西の血と富と自由

とを吸收して仕舞つた。ボナパートは機を失せず瑞西の紛擾を口實に干涉を始めたけれども彼が瑞西に於ける軋轢の調停者として立つた時には、たゞこの國の主權を掌握するだけで滿足したのである。そして彼は舊制度の主張者等と妥協を遂げて、共和國の平和を恢復した。又瑞西がボナパートの軍事上の要求に應じた代りに、ボナパートは其後中部歐洲が戰爭の巷と化した時に瑞西を保護して、色々の困難から救ふてやつたのである。

第一一六節　法王パイアス七世とボナパートとの契約

ボナパートは佛蘭西に於ても例の敏活と根氣とを以て凡ての政令を自分の意志のまゝになさむ事を勉めた。そして善く彼の命に從つて勤勉に働く者には「名譽隊」(レジヨン、オノツ)なる勳章を與へた。而してボナパートの阿諛者等は彼の統領職を終身職となすことに決した。その上憲法も修正せられて統領の權は愈〻無限絶對のものとなつた。だからボナパートは今や事實上に於ては一個の帝王となつたので、たゞ缺げて居るのは戴冠式が濟まないだけの事である。

さてボナパートが佛蘭西でなした最も大切な事業は何かといへば、宗教上の軋轢を解決した事である。當時宗教上の軋轢は革命運動と同じく餘程下火となつて居たのである。ボナパートは加特力教の地位を回復して國教會となし、之を宗門制度に組織した。此宗門制度はボナパートの嚴重なる管轄の下にあると同時に、羅馬教會としての勢力を遠慮なく振ふことの出來るものであつた。幸にも新法王パイアス七世の性質はボナパートが此種の政策を實行する上に大なる便宜を與へたのである。前法王パイアス六世は佛蘭西共和國に迫害せられ、終には流竄の身となつて死んだ位であるが、之に反しパイアス七世は革命運動に對しては非常に寛大な態度を執つたのである。所が今や革命運動も一先づ終局を告げむとして居るのを見て、パイアス七世は何とかして法王權を此新事情に調和させたいものだと苦心したのである。そこでボナパートは法王と協議して一の契約を造つた。此契約の結果として佛蘭西の自由教會は壓伏せられ、法王は絶對權を有する事となり、ボナパートは國内に於ける高僧を指定する權を有し、羅馬法王から來る一切の教書は佛國政府の檢閲を要する事となつた。

第一一七節　ボナパート佛國の教會を奴隷視す

ボナパートと法王との契約は「加特力教は佛蘭西國民の大多數が信奉せる宗教なり」との命題を基礎として出來たものである。そこで佛蘭西の新教徒は少數であるから、折角得た所の宗教上の自由も奪はるゝ事であらうと心配して居たのであるが、幸にもボナパートは彼等に向つて好意を表し、憲法を以て彼等に滿足なる權利を確定した。それ故ボナパートが統治して居る間は各宗派の間に暖い感情があつた。ボナパートは又獨逸に於ても萊因同盟の法令を以て、新舊二教は政治上同等の取扱を受くべきものであると宣言して、宗教的寛容の精神を奬勵した。

斯くの如くボナパートの政策は一方に一時的救濟を與へたのであるが、之と同時に他方には永續的弊害を殘した事を忘れてはならぬ。即ちボナパートの爲めに宗教は政治の一機關と化し去り、國家は宗教が政治上の訓練を助けるといふ點に於てのみ宗教存在の必要を認めたのである。そこでボナパートは法王との

契約を出來得る限り政治上の目的に利用することを努めた。そして機會あれば僧侶等を專制政府の使徒として用ひむとしたのである。又彼は「虛言でも善いから兎に角一の神を信ずるといふ事は社會に必要である」と考へたばかりなく、「簒奪者の權力を保護するには僧侶を使用するに限る」と考へたのである。又ボナパートに旨從して居る僧侶等は破廉耻にもボナパートの使命は神聖なものであると公言し、又ボナパートが造つた滑稽じみた教理問答に同意したのみならず、ボナパートの課稅や徵兵令に服從することは人間最大の義務であるとまで教へたのである。

第一一八節　近世の法王至上權主義

然るに羅馬法王に取つてはボナパートとの契約は現在の所では却つて困難と心配とを造るばかりであつたが、時勢が變つて法王至上權主義が勃興すると共に法王の權力は大に膨脹して來た。抑〻法王至上權主義は一は佛蘭西に於ける僧侶の屈從の反動として、一は獨逸に於ける教會的基礎の消滅を憤慨して起つたものである。ボナパートがパイアス七世に讓步した事は、此時になつて始めて法王權を伸長する原因となつたのである。但しボナパートがまだ契約の履行を自分で監督して居る間は、法王が如何程手を盡して彼を宥めしむとしても唯冷遇と苦き失望とを與へられるのみであつた。

第一一九節　「ナポレオン法典」の出版

題目が少し變つて之から法典の事を述べる。ボナパートが自ら立法者として廣く世に知られる事は自分の權勢を維持する所以であると考へたことは疑ない。又彼が隨分マキアベリー流の政略を使用した事も明かであるけれども獨り法典の編纂に當つては彼の態度は頗る公明正大で、毫もマキアベリー流の筆法を用ひなかつたのである。又此法典はボナパートの自己膨脹に都合の善い樣に作つたものでもなかつたけれども彼が此法典を作るに至つた動機を尋ぬれば何も變つたものではない。當時の佛蘭西の法律は頗る亂雜であつたから、一般人民は一定の統一的法律を得んことを望んだのである。そこでボナパートは此要求

を早く滿足さすれば、定めし自分に對する信任と尊敬とが增すであらうと考へたのである。實に當時の佛蘭西はヴォルテールが言ふた樣に「佛蘭西を旅行する者は驛馬を變へる每に異つた法律に出遇ふ」といふ有樣であつた。そこで已に三級會も、國民議會も、督政官も、交るゞ〳〵法典の編纂に着手したのである。今ボナパートは識見に富める法律家を編纂委員に撰定し、當時內閣會議や立法議會などで討議されて居た種々の項目を整理して、玆に始めて法典編纂の大業を完成することが出來た。ボナパートも編纂委員の一人として熱心に批評と修正とを加へ、又國家の首長として新法典を出版した。けれどもボナパートは斯かる結構な法典を國民に與へたといふ名譽を決して他人に分つことをしなかつた。而して他日彼が皇帝となつて他の編纂委員が何等の要求をもなすことが出來ぬ樣になつた時、「ナポレオン法典」といふ名前で自分の造つた法典として、之を世に發布したのである。此手段で彼が後世の人々に記憶せられむとした事は幸に其目的を達したのである。後世の人々は假令ボナパートの宣言が誇大であつた事に氣が附ていも、尙此一軍人に立法者としての名譽を與へることに同意し、今も尙「ナポ

レオン法典」といふ名稱を保存して居る。

此法典の內容は一部は羅馬法により、一部は慣例により、一部は歷代諸王の敕令により、一部は革命時代の法律によつたものである。然るに何分にも速成であつた上に委員等の學識の不足であつた爲めに、折角の法典の効果も幾分か割引をされたのである。術語に定義を與へてない事、物の區別が善く附いて居ないこと、細目の根本たる大原則を示さぬこと等は多くの誤解を生ずる所以であつた。又裁判法の規定がないので、此法典も人々の要求に適合することが出來なかつたのである。斯くの如く色々の缺點があつたにも係らず、新法典が人民に取つて非常に有り難いものであつた事は疑ふことが出來ぬ。又法典編纂の事を研究する人の爲めには頗る敎訓的な實例であつた事も疑ない。殊に普通歷史の立場から見れば、此法典編纂は更に一層重大なる事件であつた。何故なれば此法典は「人は凡て法律の前には同等である」といふ主義……即ち革命運動によつて唱道された大眞理……の上に立つて居るからである。

佛蘭西の軍隊が進む所には此法典も亦進んで行つたのであるが、軍隊が擊退さ

れた後でも法典だけは其處へ留る場合が多かつたのである。實に公明正大なる此法典は最も有力なる革命宣傳者であつたと同時に、佛蘭西が其配下にある諸國民に與へた最も永久的なる恩惠であつた。

第一二〇節　英佛間の外交破裂(一八〇三年)

然し平和の狀態は長續きはしなかつた。アミアンの平和條約もまだ締結されて居らぬ內、ボナパートの大膽なる擧動は大に英國人を激昂させたのである。アヂントン內閣(英國)は之までは出來得る限り平和政策を執る積りであつたが、此度佛蘭西がピードモンテを合併し、瑞西を攻擊するのを見て、驟然として從來の政策を更め、恐喝的態度を執る事になつた。丁度其處へ埃及に關する佛國貿易報告書が出版されたのであるが、之を見れば東部に於ける英國貿易は大に佛蘭西の爲めに壓せられつゝある事が明かになつた。斯かる危機に接して佛國が英吉利との契約を破棄するに至つた事は敢て咎むべきではない。英國は先づマルタ島を放棄することを拒絕した。所が茲に英國に取つて不幸であつた事は前の平和

條約が佛蘭西の蠶食政策に對して英國の方から餘り抗議をなすことの出來ぬ樣に出來て居たことである。だから英國の執るべき途は戰爭の外にはなかつたのである。即ち名は正しくないが、兎に角開戰するより外に途はなかつたのである。そこで英國政府は此前の平和條約に矛盾せる最後の通牒を佛國に送つた。而して愈、開戰の布告があつた時には、佛國內に居た幾千の英國人は早くも捕縛されて獄中に呻吟して居たのである。

第一二一節　ボナパート將に英國を襲はむとす

初めの樣子では此度の戰爭は非常な意氣込みで、何方か一方が倒れるまでは戰爭が繼續されさうであつた。ボナパートは彼頑强なる敵を襲擊せむが爲めに驚くばかりの機敏と活潑とを以て大々的準備をした。先づ英國の對岸に軍隊を集めて盛に操練をしたのであるが、その成績たるや現今如何なる軍隊の操練にも劣るべきものではなかつたに相違ない。ボナパートは長期に亘るべき大戰爭の爲めに凡ゆる手段を盡したのである。英國の方でも早や軍隊が肅々として繰出

されて居るのを見て、英人の愛國心は盛に燃え上つた。國民は心を一にして敵軍來らば來れと待ち構へて居る。ボナパートは英國攻擊には海陸共少からぬ危險のあることを知つて居るから、準備が充分に整ふまでは攻擊を見合せたのである。此間に彼はハノーヴァーを襲ふて之を占領した。其口實はハノーヴァーは英王ジョージ三世を選擧侯に戴いて居るから、英國の領地と見做すべきものであるといふ事であつた。彼は一方ネープルスにも軍隊を進めた。又和蘭をも戰爭の渦中に捲き込むで、同國内にある英國人を悉く捕縛すべきことを命じた。又エルベ河口を封鎖して、英獨間の通商を切斷した。英國も亦之に對し復讐的封鎖をしてエルベ河とウェーゼル河とによる歐洲貿易を妨げたのであるが、ボナパートは之に屈せず、西班牙と葡萄牙から大に軍費を徵集し、尙其不足を補ふ爲め西班牙との約束に背いてルイジァナを米國に賣却した。

第一二二節　ボナパート終に皇帝となる（一八〇四年）

ボナパートは作戰の計畫が海陸の敗戰によつて畫餅に歸するに先つて皇帝の

位に即いた。今事の次第を述ぶれば、丁度其頃ブルボン家が陰謀を企てたので、ボナパートの傀儡たる元老院は之を口實として、將來佛蘭西に政治上の危險がない樣にするには統領政治を更めて、世襲的君主政體となす必要があると提議した。然るに當時ボナパートは既に憲法上の諸團體や諸官吏の上に絕對權を有して居たことではあり、又和戰何れに處しても、其手際の目醒しい爲めに非常な人望があり、又彼が佛國に大なる光榮と富强とを加へたことに就ては佛國人中之を信せぬ者はないといふ有樣であつたから、ボナパートは此上僭位までして人の憎みを受ける必要はないと感じたのである。そこで彼はたゞ胸中にある計畫を人に暗示するだけで滿足して、之を發議することはフーシェの如き人々に委かせ、又最後の決斷はボナパートの屬僚が佛國民の代表者と認め得る人々に委かせた。而も彼は何處までも獨裁政治といふ事には重きを置いたのである。

だから彼がナポレオン皇帝として愈、戴冠式を擧げた時には、彼は此日を以て一人の皇帝が即位したのであるといふ事を世界の人々の心に深く刻まむとしたのである。

是に至つて民主的政府は愈〻消滅した。而して共和暦は廢せられ、再び貴族なるものを生ずるに至り、複雜なる宮廷の儀式の制定となり、出版物の自由は剝奪せられ、一私人は國家の事を論ずるを許されず、社交場に於ても、學校に於ても、普通教育の粹ともいふべき學課を教ふることは出來ぬ事となつた。

第一二三節　第三同盟(一八〇五年)

王黨が陰謀を企てた當時、之に對するナポレオンの行動は頗る人の信用を害したのであるが、就中バーデン州のアンギアン侯を執へて銃殺した事は其最たるものであつた。ナポレオンが此罪なきアンギアン侯を殺したのは、王黨の陰謀者等を英國から誘ひ出すことが出來なかつたから、其代りとしてブルボン王族の一人たる侯を犧牲に供したのである。是は實に國際法を蹂躙した行動と言ふべきものであつた。所が露國皇帝は豫ねてナポレオンがリュネヴィール條約に違反したことに對し異議を申込んだ時、ナポレオンが一向應じなかつたので、少々感情を害して居た所へ、丁度今回の國際法蹂躙事件が起つたので、大に激昂してナポ

レオンに對し詰問に及んだのである。そこでナポレオンは露帝自らが即位の時にも同樣の事をしたではないかと答へた。最早談判は破裂するより外に途はなかつたのである。折しも英國の方ではピットが弱腰のアヂントン内閣に代つて軍事上の權力を取つて仕舞つた。流石に列國間に厚き信用のあるピットのことであるから、直ちに露西亞、瑞典、墺地利の諸國と攻擊同盟を結ぶことが出來た。獨り普魯西だけは頑として局外中立を守つたのである。

斯くてナポレオンは一八〇五年歐洲の大半を敵として戰ふたのであるが、飛ぶ鳥も落つる程であつたナポレオンの權力も此時から漸く傾きかけたのである。

第一二四節　プレスブルグの平和條約(一八〇五年十二月)

同盟諸國は成るべく秘密の内に運動をして居たのであるが、豈に圖らむや、英國攻擊の目的でブーロン(ドーヴァー海峽附近にある)に集められた佛蘭西の軍隊が俄に引き上げられ、鋒を轉じて眞向に獨逸を目指して急行軍をやつて居るのを見た時の同盟諸國の狼狽は非常であつた。斯くの如くナポレオンは當初の作戰

計畫を機敏に變更することは出來たが、艦隊だけは依然として今にも英國攻擊を實行し得る樣な位置にあつた。これ實に艦隊に取つては非常に危險な事であつた。トラファルガーの一戰はナポレオンの艦隊を全滅させたのである。爾來英國は最早佛蘭西から直接の攻擊を受ける氣遣ひはなくなつたのである。然し陸戰の方ではナポレオンは中部歐洲に威を振ふことが出來た。彼はウルムの戰に墺軍を破つてこれを降し、維納を占領し、更にオースターリッツの戰に最も巧妙なる手腕を以て墺露の優勢なる軍隊を擊破することが出來た。此オースターリッツの戰は實に最後の決戰であつた。同盟軍は最早南下しつゝある新手の佛軍と戰ふの勇氣がなくなつて仕舞つた。墺國と露國とは最早斯かる不運な戰爭から手を引きたいと思つて居る。露帝アレキサンデルは默つて先づ國に歸つた。ナポレオンは强ひて之を追擊し樣ともしなかつた。そこで墺帝フランシスは已むを得ずプレスブルグの平和條約を結び、之によつて墺地利はヴェネシア聯邦、ヂロール及び西部獨逸に於ける領地を失ふ事となつた。普魯西王は若し自分の仲裁が成立た以時は大軍を率ゐて同盟軍に加はる積りであつたが、今は却つてナポレオンと同盟するに至つた。して見ればナポレオンが得たる戰勝の結果は先づ其勞苦に價するものであつたといふ事が出來る。素よりプレスブルグ條約によつて佛蘭西帝國の面積が膨脹した譯ではないが、然し其附屬國なるバヴァリア、ウュルテムベルグ、バーデン等は非常に其領土を擴張することが出來たのみならず、其中のバヴァリアとウュルテムベルグの二國は王國の資格を有する事となつた。又ナポレオンが造つた伊太利王國も新にヴェネシア聯邦を加へて益〻膨脹したのである。

第一二五節　萊因同盟（ラインブンド）

然し歐洲諸國が全くナポレオンに屈服したのは其後の二年間であつた。一八〇六年バヴァリア王、ウュルテムベルグ王、バーデン選擧侯を初めとし、其他十三の小諸侯は同盟決議書に調印し、何れも佛蘭西皇帝の保護の下に團結することを約束した。之が即ち世に所謂萊因同盟なるものである。抑〻この同盟の目的は一は外國の侵略に備ふる爲め、一は自國に於て完全なる自治制を實施する爲めであつた。而して第一の目的はナポレオンとの同盟によつて達せられたので、此利益に酬

ゆる爲めに同盟諸侯はナポレオンの必要に應じて軍隊を供給することを誓約した。第二の目的は一は神聖羅馬帝國から分離することにより、一は同帝國内にあつた數多の小侯國を合併することにより達せられたのである。

神聖羅馬帝國の君主であつた墺帝は既にリュヴィール條約の結果、自分は露佛の皇帝と同等の資格を有するに過ぎざることを承認した。而して萊因同盟がまだ世に發表されない時から、墺帝は正式に神聖羅馬帝國の皇帝たる地位を捨て、同帝國内の諸州及び諸侯は最早同帝に對する服從の義務がないといふことを承認した。ナポレオンの對獨政策は茲に全き成功を告げたのである。

第一二六節　露佛同盟

中部歐洲に於て獨りナポレオンに對抗することの出來る者は普魯西であつたが、其普魯西が今はナポレオンの爲めに散々な目に遇ふたのである。抑、佛將ベルナドットがアンスパハの中立權を侵害したことは、ナポレオンが普魯西を無視したことを示すものであつたから、普魯西は斷然局外中立の態度を棄てゝ、戰爭の

準備に取り懸かつた。そして十一月早々普王フレデリック・ウィリアムはポッダム條約によつて同盟軍に加はることを約束した。但しこの約束の條件は普王がナポレオンに最後の勸告書を送つて、第一、ナポレオンが伊太利の王位を讓ること、第二、ナポレオンがピードモンテ、瑞西、和蘭等の諸國を明け渡すことを要求して見て、若しナポレオンが此要求に應じなかつたならば、普王は同盟に加入するといふ事であつた。然るに此勸告書を齎らして佛軍に使したハウグウィッツは當時の普魯西の諸官吏中最も愚味で果斷に乏い人間であつたから、其使命を果す爲めに、自ら佛軍の陣營まで行つた。そこでナポレオンはオースターリッツの戰が終るまでハウグヴィッツとの會見を避けたのである。其間に同盟軍は大敗北をした。それを聞いてハウグウィッツは非常に狼狽して、自分の使命も忘れ、又ベルリンに於て非常の心配があるだらうといふ事をも思はず、直にナポレオンに向つて戰勝の祝辭を述べ、且つ普魯西は佛蘭西と同盟を結ぶ事を希望するものであると告げ、終に同盟を結んで仕舞つた。ナポレオンはハウグウィッツの最初の使命が何であつたといふ事は能く察して居た。又彼の祝辭が眞意から出たものでない事も能

く知つたけれどもナポレオンは兎に角普魯西の友情的申込を受けて之と同盟することは自分の爲めに都合の善い事であると感じたのである。又ベルリン政府の方では最初の計畫が俄に變つたので非常に驚愕したのであるが、何分にも形勢が頗る危險であつたから、是非なくハウグウィッツが結んだ條約を批准する事にした。

第一二七節　普魯西の敗北(一八〇六年十月)

斯くの如くして佛國と同盟した普魯西は先づ英國と瑞典とを相手にして戰はなければならなかつた。而して戰の結果、普魯西の商船は殆ど破壞されて仕舞つた。之は普魯西の不德義に對する最初の罰で、最大の不幸は之に引續いて起つたのである、と言ふのは、英國宰相ピットは多年の勞苦に頗る健康を害して居た所へ、恰もオースターリッツの敗戰の報知が來たので病勢頓に更まり死期を早める事となつた。そこで各政黨は國家の危急を救はんが爲めに何れも同一の步調を取り、協力して新內閣を組織した。之が世に所謂人才政治(Talents Administration)で、その

時外務卿になつたのがフォックスである。ナポレオンはフォックスが革命に對し寬大な意見を持つて居ることを知つて居たから、英國の新內閣は直ちに佛蘭西と平和談判を開くだらうと信じた。又實際此信仰は全くの誤でもなかつた。けれどもナポレオンはフォックスの心が何の位まで撓み得るかを計算し損つたのである。そこで英佛平和談判は佛國側の外交が振ひ過ぎた爲めに全く無効に歸しかけたのであるが、然し長い談判の結果、佛蘭西が前に横奪したハノーヴァーの地をジョージ三世に返すといふ條件で双方の折合が附いた。

所が偶然にも巴里駐在の普魯西全權大使が早くも此事を嗅ぎ付けたのである。今や普魯西は佛蘭西と同盟を結んだ事を後悔して居る。そこで主戰論者が勢力を得て、直ちに軍隊の動員を命ずる事となつた。所がナポレオンは普魯西大使の密簡を手に入れ、事の容易ならざるを悟つたから、宣戰のあり次第何時でも出兵し得る準備をした。憐むべき普魯西は前には單獨で佛蘭西に屈從したのであるが、今は又單獨で佛蘭西と戰はなければならぬのである。其上普魯西の軍隊は當時平和的方針の上に置かれたのであるから、到底フレデリッキ大王時代の軍隊に

比すべきものではなかつた。だから今回の戰爭は普魯西に取つては最惡の時機を撰んだものであつた。斯くて普魯西は自分が軍隊を繰り出しつゝあることを佛蘭西はまだ知らずに居ると思つて、數週間戰備に忙しかつたのである。愈〻戰備が整ふた時最後の通牒を佛國に發した。

普魯西は之と同時に瑞典及び英國と和を結び、又露帝の應援を得る積りであつたが何れも失敗であつた。漸くサクソニー侯の援兵だけ得たる時に、早や佛蘭西の大軍は疾風の如くに襲ふて來た。六十五年前には普魯西の軍隊はモルウィッツの戰に其射擊の猛烈なる事と其訓練の嚴正なる事とを以て名を轟かしたのであるが、今は其組織から見ても、武器の精鋭といふ點から見ても、或は將校の技倆といふ點から見ても、到底往時の比でないことは明かである。それにも係らず普魯西軍隊といへば世人は矢張り模範軍隊と信じて居たのである。だから愈〻開戰の曉、普魯西軍が軍隊操縱の點に於て到底ナポレオンの敵でないことが解り、且つイェナの戰にも、オーエルスタットの戰にも、普魯西軍が全敗したのを見た時の世人の驚きは非常なものであつた。

第一二八節　普魯西の恐慌

普魯西の勢力は全く失墜して仕舞つた。普魯西に於ける政治的腐敗の弊害は軍隊間のみならず廣く國民の間に感染して居る樣であつた。全體普魯西は階級制度の嚴しい國で、貴族と軍人とが傲慢であり且つ不品行であつたから、一般人民は日頃頗る憤慨して居た。其位であるから今回自國の軍隊が大敗北をしても人民は平然として意に介しないのみならず、寧ろナポレオンの行政に謳歌したのである。又普魯西將校の特色は老年と無能と憶病とであつた。だから數個の城砦は露國から援兵の來るまで敵を支へることが出來たにも係らず、先を爭ふて佛蘭西の軍門に降參したのである。

然るに此暗黑なる國情の中にも一條の光明が輝いて居た事は歐洲の前途の爲めに賀すべき事であつた、と言ふのは外でない。第一、王后ルイゼ―獨逸人は今に至るまで特別に此王后を尊敬して居る―が狂氣じみた普魯西の屈從に對し健氣にも自ら卒先して反抗の態度を執つた事、第二、若い軍人等が上官等の卑怯な

事と賣國的行動をなした事とを憤慨して斷乎たる抗議をなした事、第三、ブリュッヘルやグナイゼナウの如き愛國的名將、或はスタインの如き賢明な政治家、或はフィヒテの如き堅實な思想家のあつたことである。斯かる人物の輩出したことは、大選擧候が建設し、フレデリッヒ大王が擴張した國家の中には流石に侮るべからざる一種の精神が彷彿として殘つて居ることを感せしむるものである。

第一二九節　露國皇帝の屈從

勝ち誇れるナポレオンは遂に普魯西に對し、同國の存在を危くする樣な條件を持ち出した。そこで普王フレデリック・ウィリアムも今は之までと思ひ、露國の軍隊の力によつて僅に殘れる領土を防禦せむと決心した。幸にも普魯西領の波蘭は氣候も道路もナポレオンの神速なる行動を許さなかつたので、ナポレオンはアイラウの戰に露軍から擊退され、爾來一八〇七年六月に於けるフリードランドの戰まではこの戰敗を償ふことが出來なかつたのである。フリードランドの戰に露軍は全敗して休戰を申込み、更に進むで平和條約を締結した。此條約は露國に

取つては戰爭に次ぐ程な損害であつた。

露帝アレキサンドルは戰敗後未だ二週間も經たぬ內に普王に對する義務を忘れて仕舞つた。そして自分が之まで他人の喧嘩に手を出して、オースターリッツやフリードランドの不幸を招いた事を後悔したのみならず、却つてナポレオンなる人物に心を奪はれて、普魯西の事は自然の成行に委せたのである。斯くてアレキサンドルはナポレオンとメーメル河の中流に懸かれる筏の上に二回の會見を遂げたのであるが、ナポレオンの甘言に載せられて、自今佛蘭西に反對して列國に加擔せぬこと、及びナポレオンの歐洲征服策に援助を與ふることを約束した。其次に兩帝は更にチルシット(メーメル河畔にある)に會合して正式に平和條約を結んだ。此條約は全然メーメル河上の密約に基いたものである。

第一三〇節　チルシット條約(一八〇七年七月)

斯くの如くナポレオンは已に露帝を味方に取り込んだから、最早歐洲大陸に於ける凡ての抵抗は取除かれた樣であるが、實を言へばチルシット條約はナポレオ

ンに取つては最も緣起の惡い成功であつた。此條約によつて彼は一層其權力を擴張したといふよりは、寧ろ之によつて功名心の危機に乘り込んだものと見るべきである。實に此時まではナポレオンは功名心に驅られると同時に、何事をなすにも空想を避け、實際的に行動し、極めて綿密なる計算によつて方針を立てたのである。又此時まではナポレオンが對手にした君主は比較的に薄弱な無見識な人々であつたから、彼は此等の君主から非常な怒を招き、又は頑强なる抵抗を受くる樣な事はなかつた。又何れの國民からも謀反される樣な事はなかつたのである。然るに今、歐洲列國はナポレオンの前に屈伏して不名譽なる條約を結び、殊に最も蠻勇的なる露國ですら彼が計畫の援助者となつたといふ有樣であるから、ナポレオンは空想の駒に鞭つて、將に一大巨人の如く歐洲大陸を眼下に見下ろさんとしたのである。彼は最早その配下にある諸君主や諸國民の間に何等の區別をも立てず、皆これを武斷的帝國の下に不名譽なる屈伏をさせた。彼は又僅に數年前まで理性の王國を形造つて居た國民がなす所の抵抗は實に懼るべきものであるといふことを知らなかつた。彼は羅馬皇帝の世を再現する積りで

あつたが、今と昔とは世の事情が一變して居る事に氣附かなかつたのである。

初めナポレオンは普魯西を全く佛蘭西に合併するつもりであつたが、唯露帝アレキサンドルに對する好意上それを見合せて、纔に地を削るだけにした。即ちチルシット條約の第四條に「これ露國皇帝に對する好意より出でたるものにして、露佛兩國が變らざる友情と信任とを以て互に團結せむことを誠實に希望せる證據となすべきものなり」とある。そこでナポレオンは普王にその邦土の半を還附した。そしてエルベ、ライン兩河の間にある普魯西の領土と、ブルンスイックの領土と、ヘッセー・カッセルの領土とを以て、ウェストファリア王國を建設し、之を弟ジェロームに與へた。また普魯西領波蘭の一小部分を露國に與へ、殘部をサクソニーの撰擧侯に與へてワルソー大侯國を建てさせた。同撰擧侯は普魯西が最初に敗北した當時から萊因同盟に加はつて居たのであるが、今より王の稱號を用ふることを許されたのである。またチルシット條約によりジョーセフ・ボナパートはネープルス王となり、ルイ・ナポレオンは和蘭國王となつた。最後に露佛密約によつて、露國が一朝英國と兵を構ふるの日には、芬蘭及び土耳其領のダニューブ沿岸の地を橫奪す

るといふことに就てナポレオンの承諾を得た。

第一三一節　大陸制度(一八〇六年―一八一三年)

然るに此秘密條約は忽ち歐洲に幾多の災害を流す事となつた。ナポレオンは早や自分が獨逸と伊太利の主權者となつた事を頼みとして、早くも歐洲大陸を一團として英國に當らむとした。此目的を遂行する爲めには彼は依然として諸國家の權利を蹂躙して居る。彼は個人の財産と自由を侵害し、幾萬の生靈を貧窮と戰禍とに泣かしめたのである。

當時英國は佛蘭西に對し非常に大仕懸けな封鎖をして居た。然し之は佛領の海岸に向つて航行する船舶は捕獲しても善いといふ事を承認した丈の事である。此封鎖に報ふる爲めにナポレオンは伯林から有名な救令を發し、英國が最早歐洲大陸と一切交通が出來ない樣にした。そこで人間と貨物との別なく苟くも英國に關係あるものは假令大陸商人の所有物でも容赦なく沒收される事となつた。中立國の商船でも一度英國の港に立寄つたものは決して大陸の諸港内に入る事を許されなかつた。之が即ち大陸制度と稱するものである。斯くの如くしてナポレオンは英國の紙面封鎖に報ふるに又一の紙面封鎖を以てした。そこで英國のグレンビル内閣は復讐に對する復讐を企て、爾來如何なる船舶でも佛蘭西及び其同盟國に向つて航行するものは凡て之を捕獲すること、但し是等の船舶にても英國の港灣に來つて相當の手續を經た者は此限でないといふ事を宣言した。

第一番に大陸制度を勵行すべきことを決議したのは普露兩國である、一八〇八年には埃地利も同樣の決心をした。而して此制度はナポレオンの領土の膨脹するに隨つて益々その範圍を擴め、終に一八一〇年十月に發布されたフォンテンブローの敕令を以てその絶頂に達した。此敕令により、佛、獨、伊、西等其他苟くも佛軍の駐屯する地方に發見さるべき英國製の物品は殘らず燒却する事となつた。全體ナポレオンが斯くの如き制度を組織するに至つたのは、英國の道德的特性と物質的財源とを全く見損つたからである。彼は大陸制度が終に勝利を得べき事は火を見るよりも明かであると考へた。然るに實際大陸制度の爲めに損害を受く

ることの最も少かつたものは英國であつた。英國は流石に海上の王だけあつて、世界の他の方面に新市場を求めることが出來たのみならず、舊市場に向つて密輸入をする事も出來た。之に反し大陸ではナポレオンの封鎖の爲めに何れの地方にも需要品の缺乏を感じた。成程ナポレオンは特許權を發賣し、この權を有する者だけは大陸制度の制限を免れることが出來るやうにした。又密輸入も盛に行はれて居た。それにも係らず、日用品の價格は著しく騰貴して、大多數の人は殆ど之を購買することが出來なかつたのである。そこで極めて粗惡なる代用品を以て用を辨ずることゝなり、非常の苦心を以て近世的生活の需要品を佛蘭西帝國内で造り出さむとした。而もその結果は僅に「ビート」(甜菜の類)の根から砂糖を製することの發明と、有害なる產業を勃興させたこと位で、其外には輸入杜絶の爲めに受くる所の缺乏を補ふ途が開けなかつたのである。

第一三二節　佛蘭西の狀態

ナポレオン自らも大陸制度の裏面には大なる犧牲があることを知つて居た。彼

が元老院に伯林敕令を送つた時の書面にも次の如き文字があつた。「既に多年文明生活を送り來りし今日に於て、再び往時の野蠻的生活に立ち歸る事は大なる苦痛たるや疑なしと雖、吾人の共同の敵が吾人を苦めむが爲めに使用せるものと同一の武器を以て敵に當るは實に已むを得ざることなり」。然るに佛蘭西は寧ろナポレオンの產業政策を歡迎する方に傾いて居た。如何にも工業社會だけは大陸制度の惡影響を著しく感じたに相違ないので、それは南部地方がブルボン王族を歡迎したことを見ても明かである。けれども佛蘭西全體の上から言へば、國民は昔から國敵と戰爭する場合には斯かる手段によるものだといふ事を國王や國民議會から敎へられて居たから、今ナポレオンの政略に對しても其弊害の方面を見るよりは寧ろ之によつて發明や製造業の奬勵されたことを有難く思ふて居た。實にナポレオンの治世は國民が新勢力を以て近世的の富を造るに最も善き機會を與ふるものであつた。而して封鎖、重役、徵兵制度の妨がありたにも係らず、佛蘭西の富は駸々として發達した。だから人民は假令政治に容喙することが出來なくつても別に不滿を懷かなかつたのである。中流階級が如何に滿

足の狀態にあつたかといふことは政府の統計表によつて伺ふことが出來る。この統計表によれば一七九八年に於ける所得金額二千五百十一萬一千七百八十五法(フラン)に對する株主の數は二萬四千七百九十一人であつた。又一八一〇年に於ける所得金額五千六百七十三萬〇五百八十三法に對する株主は十四萬五千六百十三人であつた。然るに一八二〇年には一億七千二百七十八萬四千八百三十八法といふ巨大な所得金額に對して、株主の數は僅に十九萬九千六百九十七人であつた。又一八三〇年には二億〇四百六十九萬六千四百五十九法の所得金額に對する株主の數は十九萬五千三百七十人だけであつた。

勞動者の階級は素より中流階級ほど目出たい狀態ではなかつた。けれども彼等はナポレオンの帝國主義は民主的のものであるといふ事を幾分か信じて居た少くともナポレオンは彼等が穀物の自由貿易を排斥せむとする希望を容れて呉れるに相違ないと確信して居たのである。

第一三三節　コッペンハーゲンの砲擊(一八〇七年)

英吉利と佛蘭西とが互に無法な戰をした爲めに一番迷惑を受けたのは丁抹である。當時ナポレオンが丁抹を自分の味方に引入れむとする意向を持つて居るといふことに就ては殆ど疑ふものはなかつた。此時英國政府の許へ一片の秘密の通知が來た。此通知に據れば、ナルシット會議に於て露、佛兩帝は丁抹を大陸制度に贊同さす事と、丁抹の艦隊を佛蘭西に借入れる事とに就て協約したといふ事である。此通知に接したる英國のポートランド內閣は中立國たる丁抹に向つて、英佛戰爭の已むまで丁抹の艦隊を嚴重に保管すべきことを要求した。すると丁抹は其無禮を怒り英國の要求を拒絕した。そこで英國艦隊は直ちにコッペンハーゲンを砲擊して其市街を破壞し、遂に丁抹を降伏させ、其艦隊と多くの貨物とを運び去つたのである。全體丁抹の艦隊が無事に佛國の海岸に回航することが出來ぬ樣にする爲めには、英國が必ずしも斯かる國際法違反の行動を執る必要はなかつたといふ事は確かである。而して英國が斯かる處置を執らねばならぬほど實際危險の地位にあつたかといふ事は少くとも一の疑問である。

丁抹と同じく瑞典も此事件に關係して不幸な目に遇つたのである。露帝はナルシット條約に從ひ、先づ英國に向つて英佛間の葛藤を調停せむ事を申込んだ。然るに英國が之を拒絶した爲め、露帝は又同條約に從ひ英國に對して開戰を布告した。然し實際軍事的行動を執るには至らなかつたが、露帝は大陸制度の爲めに受けた損害を償ふ爲め、ナルシット條約によつて許された掠奪に取懸つた。即ち瑞典が英國との同盟を已めなかつたといふので、開戰の布告もせずして俄に軍隊を芬蘭に派遣した。其復讐としてストックホルム駐在の露國大使は瑞典政府によつて捕縛された。其時同大使は露國政府の行動を辯解し、露國が此度芬蘭を取つたのは瑞典が國際法に違反したからであると言ふた。瑞典王グスターフ四世は到底露兵の進擊を喰ひ止めることが出來なかつたから、當時丁抹領であつた那威を攻擊して之に報ひんとした。然るに彼は之を實行するに至らずして其官吏の爲めに王位を廢されて仕舞つた。畢竟彼が無能にして徒らに戰亂を好んだ結果

第一三四節　グスターフ四世の廢位(一八〇九年)

である。

次で王となつたのが其叔父カロロ侯であつた。新王は露國が芬蘭を取つた事を是認して露國と和を結び、又英國との同盟を破り、大陸制度に加はることによつて佛蘭西と和睦した。そして芬蘭を失つた事と對英貿易を已めた事との爲めに被る損害の賠償として、曾て失つたポメラニアの地を回復する事が出來た。

第一三五節　ナポレオンの葡萄牙攻擊(一八〇七年)

既にナルシット條約を結んだ後、意氣揚々として佛蘭西に歸つたナポレオンは、國民から大なる賞讃を以て迎へられた。飽くことを知らぬナポレオンの功名心が、終に佛蘭西に大不幸を來すべきことを豫想した者は、少數なる有識者と成功せる政治家と將校だけであつて、國民の大多數はナポレオンの戰捷の光榮に心眩み、彼は將來に於ても決して敗るゝことはあるまいと信じたのである。此機に乘じナポレオンは保民官なるものを廢して仕舞つた。保民官は之までも別に之といふ權力があつた譯ではないが、たゞ名義上自由討議をなすの權があ

つたので、人民の目には多少の價値あるものであつた。ナポレオンは又立法議會議員の年齢を四十歳以上と制限して大に同議會の勢力を殺いだ。而してナポレオンが最大の絶對權を振はしむとした所はアイベリアン半島である。葡萄牙は丁抹と同じく露佛兩帝に強ひられて、自國の平和と繁榮とを犧牲にして、英國征伐の十字軍に加はる事となつた。ナポレオンは葡萄牙に命じ英國に向つて開戰の宣告をなさしめ、又國内にある英國人を悉く捕縛し、合せて其財産を沒收すべきことを命令した。葡萄牙の攝政者は英國政府の忠告により、外觀上如何にも英國と戰端を開いた樣に見せかけた。但しナポレオンの命令に隨つて在留英國人の生命財産を無法に侵害することを拒絶した。そこでナポレオンは葡萄牙を攻擊すべき理由は既に充分であるといふので、之を機として全半島に對する政略の實行に着手した。

第一三六節　西班牙の宰相ゴドイの失敗

西班牙は一七九六年以後、佛蘭西に仕へ來つたのであるが、一八〇〇年からはナ

ポレオンに仕へたのである。西班牙國王はあれどもなきが如き有樣で、宮廷は王后と其子アスツリアス公との不和の爲めに分裂し、政權はマヌエル・ゴドイの掌中にあつた。ゴドイは王后の情夫であり、又國王の寵臣であつた。而して彼の唯一の政策はナポレオンの助によつて自分の勢力を張る事であつた。だからゴドイに取つてはナポレオンの意を迎へる爲めに、西班牙の國家を犧牲にする事は何でもなかつたのである。そこで西班牙はルイジアナの地を放棄して、ナポレオンが之を北米合衆國に賣却するに任せたのみならず、ナポレオンに年貢を納め、また船艦と人とを供給したのである。憐むべき西班牙は貿易衰へ、艦隊は消滅し、殖民地は失はれ、財政は混亂の極に達し、而して行政に至つては殆ど人の想像も付かぬほど腐敗して居た。そこへ穀物が非常に不作であつた。斯かる事情であつたから人民は窮乏の極終に政府を怨むに至つたのである。

所が一八〇六年になつて始めてゴドイが目を醒ました。彼は之まで無益な事の爲めに西班牙を佛蘭西の奴隷として居たといふ事に氣が附いた。そこで彼は直ちに心を飜へして佛蘭西の敵に同盟せむとした。のみならず普佛兩國が戰端を

開いた時、敵をも定めずして早くも軍隊を召集した。然るにイェナの戰に普軍が敗北したといふ報知に接した時、大に其輕舉を悔ゐ、ナポレオンの復讐を免れむ爲め詐りの辯解をした。幸にもナポレオンは西班牙攻擊を延期したいと思つて居た事であるから、ゴドイの辯解を陽に承認した。そして此度西班牙が召集した軍隊をナポレオンの用に供せむことを要求した。豈に圖らんや、西班牙のブルボン王朝を顚覆する準備は早やチルシット會議の時に出來て居たのである。

第一三七節　ナポレオン西班牙を襲ふ(一八〇八年)

ナポレオンの西班牙攻擊は彼の無法なる詐僞的政略中の最たるものであつた。彼は西班牙政府を欺き且つ之を威嚇して葡萄牙攻擊に參加させた。然るに西班牙は葡萄牙攻擊に參加することは取りも直さず自國の攻擊に助勢する樣なものであることが解らなかつた。ナポレオンはゴドイに向つて葡萄牙を西佛兩國で分割すべき事を約束し、又佛軍が西班牙を通過する事と、西班牙軍隊の助力を得る事とに就て西班牙政府の承諾を得た。所が葡萄牙のブラガンザ王族は早くも南

米ブラジルに逃れたから、ナポレオンは直ちに葡萄牙の全國を自分の保護の下に置いた。

折しも西班牙では首府マドリッドの宮廷に於て王族間の軋轢が起り、アスツリアス公フェルヂナンドは密かにナポレオンの應援を求めた。此陰謀が露顯した時、王は皇太子を廢する積りであつたが、ナポレオンの怒に觸れることを恐れて、形式上親子間の和睦を見ることゝなつた。皇太子西班牙の人民は深くゴドイを惡んで居たから、何れもフェルヂナンドの味方であつた。所がフェルヂナンドは性質野卑にして怯懦、到底長く人望を繫ぐに足るべき人物ではなかつた。然るに人民は之を知らず、唯政府の行動の矛盾せる所から推斷して、皇太子は宮廷内の陰謀の爲めに犧牲となつたのであると信じた。彼等は又ナポレオンが皇太子の友であることを信じて居た。だから佛軍が西班牙の北部を占領した時の如き、佛軍が自分等は皇太子を助ける爲めに來たのであると宣言した爲めに、恟々たる人心も靜まつた位である。ナポレオンは巧に斯かる事情を利用して、西班牙國民の同意を得て一萬の軍隊を西班牙の境内に入れることが出來た。

第一三八節　バヨンの悲劇(一八〇八年五月)

西班牙王室の不調和からナポレオンが得た利益は唯それば、かりではない。西班牙政府が愈〻混亂の度を加へたると同時に、同國に駐在せる佛國將校の擧動が頗る怪しくなつて來た時、ゴドィに對する國民の憤憤は一時に破裂して、猛然として當るべからざるものとなつた。暴徒等は進んで王の寵臣を除き、國王を威嚇して其位をフェルヂナンドに讓らせたのであるのであるが、新王の世となつても政府は依然としてナポレオンの勢力の下にあつた。ナポレオンはサバリー將軍をマドリッドに遣はし、フェルヂナンドを誘出してバヨンに送り、次にブルゴス、其次はビトリア、而して最後にはピリニースの山を踰えさせたのである。フェルヂナンドはバヨンに來て始めて自分は幽囚の身であることを覺り、間もなく西班牙王としての實權も消滅したことを知つた。前王カロロ四世及び前王后は之を見て讓位を早まつたことを後悔し、ナポレオンに請ふて再びフェルヂナンドに王權を回復させた。ナポレオンが之に應じたのは、斯くして舊王と新王とを互に爭はせむ

が爲めであつた。斯くて兩者互に爭つて居る間にナポレオンは恰も局外に立てるが如く見せかけて、實は爭鬪の楫を執つて居た。爭鬪の結果果してフェルヂナンドの頑固なる性質も大に折れて來た。そこへナポレオンの強い威嚇が來たので彼は遂に王位を捨てゝ仕舞つた。カロロ四世も斯かる事情の下に再び王位に即いた所で仕方がないといふので、其希望を捨てゝ、其代りに一の邸宅(シャト)と養老銀とを得ることを以て滿足した。

斯くの如くしてナポレオンは西班牙に於ても勝手に王位を處分する事が出來る樣になつた。少くとも彼自身はさう考へたのである。そこで彼は此地位を兄ジョーセフ・ボナパートに與へ、而してジョーセフ・ボナパートが之まで治めて居たネープルス王國を義弟ジョアキム・ミュラーに與へた。所が實際の事情はナポレオンが考へた程には進んで居なかつた。バヨンの條約はたゞ彼が西班牙を取る事の第一歩に過ぎなかつた。其事に就てはナポレオンも追々に氣が附いのである。

第一三九節　西班牙の一揆

西班牙人には西班牙魂がある。此西班牙魂はナポレオンが之まで征服した他の大陸諸國民の魂とは餘程異つた所がある。其事に就てはナポレオンも多少警戒して居た。既に彼はフェルヂナンドを威嚇した時に起つた出來事を見て居るから、西班牙を全く服從さすには、場合によつては手應へのある戰爭をする樣になるかも知れぬといふ事は解つて居た。彼はマドリッドの市民が佛將ミュラーの率ゐたる兵士を幾百人となく殺害したことを聞いて、此殺人罪を幽囚者たるフェルヂナンドに負はせた。素より佛蘭西の軍隊は流石に訓練が行き屆いて居るから、一時は驚愕狼狽する樣な事があつても、心が落付いて來た時には直ちに暴徒を鎮定することが出來た。然しナポレオンが西班牙人に對し何程殘刻な復讐をしても、西班牙人の猛烈なる進擊的性質を全く滅却することは出來ない。西班牙人が佛國人に對して進擊的態度を執るに至つた熱狂的動機は根底から取り去ることが出來るものではない。而してナポレオンが愈〻西班牙の王位を簒奪したことが明かになつたとき、西班牙人は愈〻その本色を發揮した。反旗は忽ち西班牙全國に飜つたのである。けれども西班牙人が反旗を飜へしたのは必ずしも佛蘭西の支配

を受けることを好まなかつたからではない。何故なれば西班牙人は佛蘭西が此度西班牙を支配する樣になつたのは、本とブルボン王朝の施政が惡かつたからと信じて居たからである。而も國民はこの事に關してブルボン王家を咎めずして只管宰相ゴドイのみを怨んだ。國民の大多數は決して國王に對する忠義の念を棄つることなく、再びフェルヂナンド王に戴かむことを希望して居た。其譯はフェルヂナンドはゴドイの敵である上に、王たるべき正當の資格を有し、而して前王カロロはゴドイの傀儡に過ぎないからである。全體此度西班牙人が一揆を起すに至つた眞の動機は第一は外國人に對する惡感情、第二は國民の祭壇を汚したる者に對する宗教上の激昂、第三は猛烈なる愛國心であつた。實に西班牙の國體は一種特別なもので、かの多數の小邦に分裂せる獨逸や、又幼稚なる伊太利と同一視すべきものではない。假令地方的感情が強いにもせよ、西班牙人は能く團結せる國民であつて、彼等の歴史が殊に彼等の愛國心を強めたのである。今や此國民は自由の爲め、又國家保全の爲め死を決して戰はむとして居る。而して彼等の無知、粗暴、頑迷なることは却つて彼等の決心を固くしたのである。即ち此場合に

於ては國民の缺點が其德義心と相和して、ナポレオンの專制政治を顚覆せむとしたのである。

第一四〇節　英西同盟

けれどもそんな事はナポレオンに取つては全く豫想外の事であつた。彼の冷靜なる計算的思想には人間の感情といふものが計算に入れてなかつた。だから彼が西班牙を鎭定する爲めに將校を遣した時でも、その仕事を警察事務位にしか思はなかつたのである。彼は何時まで經つても西班牙の內亂は已まないであらうといふことに氣が附かなかつた。否一週間も經たぬ內に西班牙全國中ナポレオンの軍隊の居ない所には悉く一揆が起るかも知れぬといふことに氣が附かなかつたのである。所が實際モンセー將軍はヴァレンチアの地から擊退された。セビールの攻擊をしたヂューポンも退却の已むなきに至つた。サラゴサ城は佛國が全力を盡くして之を包圍したに係らず、終に之を陷落さすことが出來なかつた。獨りベシェール將軍だけが西班牙軍の一部を破つてマドリッド攻擊の途を開くことが出來た。けれども此位の勝利は彼ヂューポン將軍が二萬三千の士卒と共にベーレンに於て西班牙人の擒となつたことに較ぶれば全く話にもならぬ程である。ジョーセフ・ボナパートは終に都を捨てゝ走り、佛軍はエブロ河まで退却した。

葡萄牙にも同じく反亂が起つた。前に佛軍を助けて葡萄牙を攻めることに與つた西班牙の軍隊も、葡萄牙人に應援した。殊に面白いことは、多年西班牙の敵であつた英國が此度西班牙と同盟するに至つたことである。英西兩國は何れもナポレオンの跋扈に對して自國民の權利を保護する爲めに戰ひつゝあるのだといふ事に氣が附いたから、日頃の怨を捨てゝ相提携するに至つたのである。そこで英國からは西班牙に向つて盛に粮食、武器、金錢、軍隊などを送つた。斯かる有樣を見てナポレオンは國民と國民との同盟を離間することは、帝王と帝王との同盟を離間する樣に容易なものでないといふことを覺つた。

第一四一節　ナポレオンの西班牙征伐

是に於てナポレオンは自ら兵を率ゐて西班牙の反亂を鎭め、併せて葡萄牙から

英國人を追掃ふ積りであつたが、其前にエルフルトに於て露帝アレキサンドルと會合し、豫ねてチルシット條約で定めたことを一層確實にし、且つ露帝に中部歐洲を監視することを委托した。而して自らは一八〇八年の十一月といふに早くも約二十萬の大軍を率ゐて西班牙に侵入した。

西班牙の方では豫ねて國內諸所に起り來つた地方議會から代表者を出して、中央議會なるものを組織し、互に團結してナポレオンに當る積りであつた。所がこの中央議會なる者は軍事に關しても政治に關しても殆ど無能であつた上に、地方の人民がその命令に服從しない爲め、愈以てその力を現すことが出來なかつた。而して軍隊に對する供給は極めて不完全で、おまけに英國よりの供給は何時も盜賊や敵兵に奪ひ去られたのである。斯かる有樣であつたから佛軍を全滅せしめむとの計畫も五回の大敗北によつて書餅となり、中原の鹿空しくナポレオンの手に歸したのである。同年の終ナポレオンはエブロ河に於ける地位を攻勢に轉じ、兵をマドリッドに進めた。それから更に大軍を馳せてジョン・モーア卿の率ゐたる英軍を攻擊する積りであつたが、名にし負ふコルーニア(西班牙の地名)の追

擊がまだ終らぬ內、佛蘭西に反亂が起つたのでナポレオンは已むを得ず巴里に歸つた。

第一四二節　獨逸國民の激昂

英國や西班牙では愛國的自重心が殆ど本能的であつたが、その他の歐洲諸國ではナポレオンに反抗する事によつて始めて此德を養成したのである。而して愛國的自重心の第一に發揮された實例は一八〇九年の佛墺戰爭である。素より此戰爭は墺地利がプレスブルグ條約で失ふた所を回復するといふことが動機であつた事は疑ないが、然し之までの戰爭のやうに唯君主の出來心から起つた樣なものではなかつた。墺地利のツーグート內閣は兎角功績が揚らぬ所から不評判となり、スタヂオン伯が代つて內閣を組織する事になつた。スタヂオン伯はハープスブルグ王家の領土を無暗に擴張せむとする事より、寧ろ獨逸の獨立といふ事に重きを置いた。然るにチルシット條約以後ナポレオンの計畫は終に墺地利や普魯西の存在をも危くせむとするものである事が明かになつたので、スタヂ

オンは愛國の志士と共にナポレオンの計畫を破壞せむものと密に機を伺つて居た。所へ恰も善し西班牙の反亂が起つて、獨逸の爲めに好機會を供給したのみならず、大に同國民の心に刺激を與へた。近來災厄のみ多かつた獨逸は西班牙の實例を見て國民的奮發と愛國的團結との價値を覺つたのである。そこで獨逸國民はお互同士の日頃の怨を忘れて、共同の不幸に對して同情同感の念を起すに至つた。隨て不運なる普魯西の如きも最早他の小諸侯から怨まるゝことがなくなつたのである。また萊因同盟に加はつて居た諸國民も佛國の徵兵制度や大陸制度に苦められ、剩へナポレオンの苛政甚しく、ある時は彼が好まない書籍を販賣したといふ廉で無罪の書籍商が死刑に處せられるといふ樣な事もあつたので、何れも戰々兢々として居たから、獨逸國民は彼等に對しても同情の念を以て親近するに至つた。獨逸諸侯の威信も亦ナポレオンの爲めに蹂躙されて居た。そこで獨逸國全體は奮勵一番國民的行動によつて國家の獨立を恢復せむとして居る。だからスタヂオンの起した戰爭は能く斯かる國情に應ずるものであつた。

第一四三節　佛墺戰爭(一八〇九年)

けれども獨逸全國民が一同に兵を擧ぐべき時機はまだ熟しなかつたのである。眞先に劍を執つて起つたのは豫ねて勇敢の聞えあるチロール人であつた。次にブルンスイック人は個人として國家の爲めに勇しい戰をした。それからシル及びデルンベルゲなども猛烈なる戰爭をして、當時の國民の不平が如何に猛烈であつたかといふことを示した。然し是等は何れも獨りだつての戰爭で、之に從事した者は或は殺され、或は流竄に處せられたのである。本當の戰爭ともいふべきものは、矢張り前と同じく佛墺兩國の正式の軍隊の間に戰はれた而して正式の戰爭に於ても新に勃興し來つた愛國的熱誠が現はれて居た。今度新に組織された墺地利の軍隊は從前の軍隊と違ひ、凜乎として何となく氣强いところがあつた。由來因循を以て名ある維納の官憲も今は目を醒まして盛に活動し、その行動はナポレオンの意表に出づるものさへあつた。そこで墺地利の軍隊も一度だけはナポレオンと戰場に相見ることゝなり、又一度だけは敏活な行動をもつて佛國

に對し頗る有利なる地位を占めることが出來た。然るに情けないことには日頃の怠慢性が再び現はれ、日ならずして墺軍は勝利者たる地位をナポレオンに奪はれて仕舞つた。而して防戰頗る努めたるに係らず、終にバヴァリアの地から擊退せられ、維納をも過ぎ、更にダニューブ河を渡りて退却するの已むなきに至つた。ダニューブ河畔では墺軍は勇敢に防戰して佛軍を懊ませし、佛軍は今にも全滅するかと思はれたことが屢次であつた。けれども墺軍の將カール大侯爵は當時の名將ではあつたが、對手は何にしろ世界の豪傑ナポレオンであつたから、到底その巧妙なる作戰に敵することが出來なかつた。ワグラムの戰に奮戰頗る努めたるに係らず、終に大敗して復た起つ能はざるに至つた。その結果としてナポレオンはイリヽァ諸州に一の保護國を組織し、墺地利はバヴァリア、サクソニー、ワルソー露國等に土地を割讓し、之が爲めに殆ど四百萬の人口を失ひ、墺地利の領土は一も地中海に存せざるに至つた。

第一四四節　ナポレオン墺地利の皇女を娶る（一八一〇年）

さしも長く墺地利に君臨せしハープスブルグ家も、今は憐れナポレオンてふ一冒險家の前に膝を屈し、終に皇女までも之に捧ぐるの已むなきに至つた。ナポレオンの妻ジョセフィンは愛情濃やかなる美婦人であつて、能く忠實に其夫に仕へて之に大なる慰藉を與へたのであるが、終に子なきの故を以て離婚の不幸を見るに至つた。ナポレオンはジョセフィンを離婚した後、直ちに新皇后を迎へむとした。抑、彼が皇后を變へむとするに至つたのは男兒を擧げて帝位を世襲的となし、斯くして近世的に飾られたる帝位に前代諸帝王の有したる如き尊嚴を加へむ爲めであつた。ナポレオンは最初露國の某大侯爵の女を娶る積りであつたが、露帝が承諾しなかつた爲めに、終に墺地利の皇家に申込をすることになつた。

當時墺地利ではスタヂオン內閣は倒れ、放膽なるメッテルニヒ內閣の世となつて居た。墺帝は直ちにナポレオンの申込に關し新內閣に諮問した。所がメッテルニヒはナポレオンの希望に從ふべきことを勸めたので、墺帝の皇女マリー・ルイゼは愈〻ナポレオンに嫁する事となつた。そこで墺國は暫らく平穩の世を樂む事となり、メッテルニヒは豫期の如く國家の財政を整理すべき機會を與へられたのであ

る。墺帝フランシスはその女をナポレオンに嫁したることを悲み、一八一三年の布告に「朕は國家の爲めに不治の災厄を避け、國家將來の幸福を思ひて、我最愛の女子を與へたり」と明言した。またメッテルニヒは「當時墺國民は多年の戰爭と、果てしもなき犧牲とに疲れ、何れも平和を渇望した時であつたから、寧ろ今回の出來事を喜び、之を以て平和の好擔保と信じて居た」と言ふた。然るにこの報知に接して非常に驚いたのは他の歐洲諸國である。ウェリントン侯がクローフォードに送つた書簡中には次の如き言句がある。「今回の墺地利家の結婚は實に恐るべき一大事件に有之候。之が爲めに歐洲大陸には當分の內目醒しき運動は出來まじくと存候」けれどもナポレオンの方から云へば之によつて能く當初の目的を達することが出來たので、即ち彼は新皇后により羅馬王を生み、愈〻人をしてナポレオン王朝の基礎が出來たと思はしめたのである。

第一四五節　ナポレオン帝國の薄弱

當時佛蘭西帝國は早や膨脹の時期を經過して居た。素より佛蘭西は其頃ラバレ

ー、オルデンブルグ等を始め、北獨逸の海岸にある諸州を合併し、又羅馬諸州及び和蘭をも其範圍に入れたことは事實である。けれどもナポレオンが羅馬諸州及び和蘭を合併したのは、何も佛蘭西帝國が眞に膨脹力をもつて居たからではない。寧ろ此事は帝國の內部が虛弱であつたことを示すものである。ナポレオンが「永遠の都」なる羅馬を占領したのは、たゞ法王パイウス七世が新羅馬皇帝たるナポレオンに屈從することを拒んだからである。又和蘭を合併することが出來たのは、ナポレオンの兄弟ですら今は大陸制度の壓制に堪へずして之に抵抗するの必要を感じたからである。即ち法王はナポレオンを破門した爲め終にサボナに幽囚せられ、和蘭王ルイ・ボナパートは其國民の爲めにナポレオンの命令を拒絕したといふので王位を奪はれたのである。斯くの如く法王が羅馬敎會の名に由つてナポレオンの帝國主義に反抗した事といひ、或はルイ・ボナパートがナポレオンの壓制に苦める國民の爲めに義俠心を現した事といひ、何れもナポレオンの勢力が已に傾きつゝあつた事を示す者である。實にナポレオンの大帝國はウェリントン將軍が看破した樣に內部が空虛となりつゝあつたのみならず、他方

には文明社會の存在をも危くしたのである。而してナポレオンの勢力が西はアイベリアン半島より、東は露西亞の平原に至り、北は北海、丁抹、波羅的海より、南は地中海及びオットマン帝の領土に至るまで延長した時は、丁度ナポレオンの衰亡の時機が近いた時であつたといふことは、たゞ時の偶然的一致に外ならぬのである。ナポレオンの帝國が斯くまで擴がつたといふ事が何も帝國の衰亡の原因となつた譯ではない。素より彼をして連戰連勝せしめた所の彼の氣質は又同じく彼が征服した國民に壓制を加へる所の氣質であつたに相違ないけれどもナポレオンの帝國の廣大であつた事と、其瓦解の早かつた事との間には何等の關係もなかつたのである。ナポレオンの大帝國が俄然として崩れたのは、一は彼が人民を虐待することを何とも思はなかつたからであり、一は彼が歐洲の覇王となることに餘りに熱中したからである。

第五章　歐洲の合併

苟くも三千萬の生靈を足下に蹂躙するを敢てしたる者にして、長く其地位を保ち得る者なし。……ナポレオン・ボナパート……

然くも千年の昔から我等の祖先が領有し來りしこの邦土、如何なればこの異國の使臣等はこの地に來つて我等に壓制侮辱を加へむとはする。不屈なるこの壓制を避くべき道はあるまじきか。否々暴君の力には限がある。壓制愈〻加はりて、權利てふ權利は掠ぎ取られ、我等の忍耐の遂き果てたるその時は、麗らかなる星の如く天に輝ける勇氣と永遠の權利とは天降りて我等の衷に宿るは必定。之によつて人と人と對等の權利をもつて立つべき時は來らむ。最後の手段は劍なるぞや。

……シルレル……

第一四六節　葡萄牙に於けるウェリントン將軍

當時佛蘭西帝國の强所と弱點とに關しては世人の推測も樣々であつたらうが、然し歐洲が佛國の羈絆を脱すべき時が早や近いて居ると思ふものは一人もなかつた。此點に於ては英國人でさへ同じ考をもつて居た。即ち英國ではムーア將

軍の率ゐた軍隊がナポレオンの爲めに散々に破られて殘兵僅に本國に上陸したと思ふ間もなく、西班牙軍の大敗の報知に接したのである。そこで今度はアーサー・ウェレスレー卿が第二の遠征軍を率ゐて西班牙に向つたのであるが、非常の苦戰をしてタラヴェラの戰に勝利を獲たかと思へば、直ちに葡萄牙に退却したといふ報知が來た。それから墺地利の爲めに牽制運動をするつもりで和蘭に送つた精鋭なる英國軍隊は指揮宜しきを得なかつた爲めに見苦い退却をしたといふことが解つた。又維納條約の結果、ナポレオンは精兵を率ゐて直ちに西班牙に向ふことが出來るといふことも知れた。而して最後に歐洲中ナポレオンに對して反旗を揚げむとするものは僅に邊陬の地にある國民だけで、既に歐洲の大半を掌握せるナポレオンは此位の事に對し少しの痛痒をも感ずるものでないといふことが解つた。是等の事實が明かになつた時には流石の英國も天を仰いで長大息せざるを得なかつたのである。

此時に當つて歐洲解放の日は早や近いて居るといふ事を確信したものは唯ウェリントン將軍一人であつた。同將軍は元來西班牙の軍隊を見くびつて居たので、

西班牙の農兵が死物狂に奮鬪した所で何程の事が出來るものかと思つて居た(彼が斯く西班牙軍隊を見下げたのは英國軍人に免れ難い偏見であつた)。所がナポレオンが多數の增援軍を西班牙に送つて、一八一〇年の初に叛徒の巢窟たるアンダルシアを降し、カヂヅだけ獨り頑强に抵抗して居た時に、ウェリントン將軍は陰鬱なる英國風の氣質に反して、大膽にもパーシヴァル內閣(英國)を勵まし、斷然商業社會の非戰論的要求を拒絕させたのである。彼は自ら責任を負ふて葡萄牙に於ける英國の根據地を何處までも固守する積りであつた。彼は英國が斯くして西班牙で佛蘭西と戰爭を續けて居る間に、佛蘭西帝國の中には何か一大不幸が起つて來るであらうから、其時英國は佛蘭西に對して攻勢を取ることが出來ると確信して居た。此確信があつたからウェリントンはナポレオンに對し成るべく冒險的行動を避けたのである。冒險をやつて取り返しのつかぬ樣な敗北を招くよりは、假令折角苦戰して占領した土地を捨てゝも寧ろ退却した方が善いと考へた。そこで彼は巧妙なる退却術を以てナポレオンと戰爭したのである。而してナポレオンが勝に乘じて遂にトーレス・ヴェドラスに於けるウェリントンの堅城

鐵壁に逼つた時、ナポレオンをして飢渇の爲めに退却の已むなきに至らしめた。

第一四七節　ナポレオンと露帝との不和

斯かる內にもナポレオンは新に榮華の夢を結び始めたので、ウェリントンが待つて居た危機は早や近いて來た。ナポレオンの功名心は今や新方向に向つたのである。そこで彼は戰爭の事を將校等に委かせ、自分は巴里から彼等に命令を下した。然るに西班牙の方は兎角交通が遮斷せられ、一向樣子が解らぬ爲めに、ナポレオンは適當なる命令を下すことが出來なかつた。其上西班牙に出征せる將校が徒らに嫉妬、懶惰、掠奪等を事として居た爲めにナポレオンの計畫は畫餅に歸して仕舞つた。而して軍隊は飢餓の爲めに、或は西班牙の叛兵の爲めに頻々として倒れるのである。其處へナポレオンが益〻軍隊を徵發して之を西班牙に送つた爲めに佛軍の窮狀は却つて益〻甚しくなつた。最早やナポレオン皇帝自ら出馬するにあらずんば、西班牙征服は絕望の外なかつたのである。

然るに此時ナポレオンは近世史上に於ける最も大仕懸けの冒險的戰爭をなさ

んと盛に準備中であつた。抑〻ナポレオンが表面上だけでも兎に角對等の條件で同盟を結んだのは彼の生涯中、唯一度だけで、即ち露帝アレキサンドルとの同盟がそれである。ところがこの同盟は何も深い根據があつたのでなく、たゞ一時の功名心によつて出來たものであるから、同盟の出來上つた當時から双方互に疑心を抱いて居た。その上に勝利者たるナポレオンの露帝に對する行動が兎角圓滑を缺いで居たから、此同盟は到底長續きのするものでないといふ事は早くから解つて居た。ナポレオンは墺地利に最後の打擊を與へた後は、佛蘭西帝國を完成する上に於て最早や露帝の助を借ることを要しなかつたのである。又露西亞といふ國は之と親交を結ばねばならぬほど、恐しい國であるとも思はなかつたのである。之と同時に露佛兩帝の間には互に感情を害する樣な事件が起つて來て、終に表面上の親交さへも破れて仕舞つた。といふのはナポレオンの方では露國の皇族の中から皇后を迎へむとして拒絕されたことに就て、頗る惡感情を抱いて居る。又露帝の方では感情家だけにナポレオンが輕卒に他の方面で欲望を滿たさむとすることを面白く思はなかつたのである。露帝は又ナポレオンがワ

ルソー侯國を擴大したことを露國に對する威嚇と感じた。而してナポレオンが露帝の親族なるオルデンベルグ侯の邦土を奪ふた事を聞いた時は猛然として怒つたのである。お負けに露帝は佛墺戰爭の時佛蘭西に對し同盟國としての義務を盡すに緩慢であつたといふので、ナポレオンから苦情を言はれたのである。其位であつたから此戰爭の結果として露帝が受けたる報酬も極めて少かつたので、之も不平の一原因であつた。

第一四八節　露佛國交破裂の根本的原因

然し斯くの如き相互間の感情の衝突は來らむとする國交破裂の原因といふより寧ろ其徵候といふべきもの、即ちこの同盟が如何に變態的であつたかを示すものである。抑〻露國が愈〻ナポレオンと直接の衝突をなすに至つたのは此同盟その者の中に一大矛盾があつたからである。といふのは元來アレキサンドルがナポレオンと同盟したのは、之によつて土耳其及び瑞典に於ける自分の野心を滿足さす事が出來ると思ふたからである。然るに露國が大陸制度を採用した爲め

に受けた損害は芬蘭やダニューブ河畔の戰勝位では到底償ふことが出來なかつたのである。實に歐洲諸國中で露西亞ほど原料の自由市場を熱心に求めた國はなかつた。隨つて露國ほど大陸制度の爲めに產業を妨げられて、文明的生活をなす事の出來ない國はなかつた。だから露佛同盟は最初から已に露國の爲めには不利であつた。加ふるにナポレオンの專横は益〻加はつて來たから、最早露國がその損失を償ひ得る希望は全く消えて仕舞つた。だからアレキサンドルが終に大陸制度を捨てゝナポレオンに此以上の蠶食をさせまいとしたことは素より當然の事である。のみならず彼がおべこべに佛蘭西から輸入される物貨に對して、殆ど禁止的重稅を課し、且つ之を勵行する爲めといふ口實の下に大軍を西方の國境に集めたことも亦時局の必要に應じたものである。アレキサンドルがこの手段を執るに至つたのは一八一〇年の最終日の事で、其時から露佛兩帝は非常の熱心を以て大戰爭の準備に取り懸つたのである。

第一四九節　ナポレオンの露國征伐

抑ナポレオンの露國征伐で幕開きをした歐羅巴戰爭は實に佛蘭西帝國の鼎の輕重を示すものであつた。この戰爭の始まつた頃にはナポレオンの指揮して居た各國の軍隊は總勢五十萬を踰えて居た。蓋しナポレオンの配下にある幾多の諸國は何れも命に從つて多數の軍隊を供給したのである。埃地利は姻戚の關係があるから素より軍隊の供給に同意した。普魯西は已むを得ず軍隊の徵發に應じ、且つ莫大なる軍需品を供給した。そこでナポレオンの全軍が北方不毛の地に長途の進軍をなすも差支なき程の供給が出來たのである。

然るに他方に於てアレキサンドルはナルシット條約で獲たる土地の一部を放棄して土耳其政府と和を結び、又瑞典とも同盟して僅にナポレオンの軍隊の半數にも滿たぬ程の兵を集めることが出來た。而して是等の兵士はその武裝の點に於ても極めて不完全なものであつた。所が何ういふ譯かナポレオンは中々出て來ない。その內に氣候は益寒くなり、道路は險惡であつたので、ナポレオンの進軍は大に之によつて妨げられたのである。加ふるに露將バークレー・ド・トーリーがファビュース流の戰法で敵を惱ましたことや、或は露國人には一種猛烈なる氣質の

あつたことなども、露國の利でナポレオンの不利であつた。結局露佛兩軍の力は殆ど同等であつたといふことが出來る。而してナポレオンの大軍が露兵に破られ、敗殘の兵が再びニーメン河を渡つた時、ナポレオンの手許にあつた軍隊は、疲れ切つた露國の追擊兵と殆ど優劣はなかつたのである。

斯くの如く佛蘭西帝國の最も精銳なる軍隊はナポレオンの冒險的氣質の爲めに犧牲となつたのであるが、而も同帝國は決して無防禦の狀態に陷つたのではない。ナポレオンが險惡なる天候と戰つて非常の損害を被つたことは、丁度一世紀以前に瑞典王カロロ十二世が露國に侵入した時と同樣であつた。然しナポレオンが敗れて巴里に歸つた有樣は、決して瑞典王が土耳其へ遁げ込んだ樣なものではなかつた。素よりナポレオンがモスコー進擊によつて受けた損害は彼の運命の上には大打擊であつたに相違ないけれども彼にはまだ軍略的天才がある。加ふるに彼が動かし得る大軍はまだ國內に殘つて居る。彼は依然として歐洲に於ける最も恐るべき强敵であつた。而して彼は佛蘭西帝國の保全の爲めに再び戰場に現れむとして今や準備の最中である。

第一五〇節　獨逸に於ける反抗心の勃興

ナポレオン未だ侮るべからずといふ事は歐洲大陸の諸政治家も善く知つて居た。否ナポレオンを打破つた露帝その人でさへ佛蘭西の國境に侵擊することを躊躇したのである。而して露帝の顧問等は今虎穴に入るよりも寧ろ小さい土地を蠶食した方が善いではないかと協議して居た。だから若し獨逸の愛國者等が露帝に向つて歐洲自由の主唱者となつて兵を擧ぐべきことを勸めなかつたならば、露帝は多分歐洲諸國の釋放者として起つ樣な事はなかつたであらう。

獨逸人の中でも元氣爵勃たる志士は一八〇九年の失敗があつたにも係らず、佛蘭西に對する敵愾心が益〻增長した。斯くてナポレオンの背面には實に思ひ懸けなき叛亂が起つたのである。而してこの叛亂は英露の攻擊と相待つて終に佛蘭西帝國に致命傷を與へたものであるから、決して尋常一樣の叛亂と見るべきものではなかつた。全體ナポレオンが獨逸人を輕蔑して彼等は國民的團體をなすものでないと考へたのは穴勝ち無理でもなかつた。實際當時の獨逸人は昔―三

百諸侯の權下に束縛せられて居た時代の樣に團結力が乏しかつたのである。彼等には國民的生活といふことに對する熱情が全く缺げて居たから、一個の獨立せる國民として生存して居なかつたことは事實である。けれども氣慨ある有爲の指導者の下に訓練された人々は何れも斷乎たる決心を以て共同の苦痛を取去る爲めに團結したのである。

第一五一節　獨逸に於ける知的復興

顧みれば三十年戰爭の結果として獨逸全國が荒敗に歸したのは早や遠き昔の事で、今は一國の富も大に回復し、多數の人民には生活の餘裕が出來、面倒な生活問題以外の事に活動し得る樣になつた。彼レッシングが近世的獨逸の思想と文學との基礎を固めた時から早や半世紀以上も經つて居る。レッシングがこの基礎を置いてから獨逸には哲學上、文學上の著述が續々として現れ、之を中心として中流階級の人々が互に親交を結ぶ樣になつた。と言つても是等の著述が何も共同團結の必要を鼓吹した譯ではないが、たゞ何時とはなしに市民の自由權といふ

感じを國民の間に附植した。此感じが取りも直さず國民の一致を增進する第一歩であつた。又是等の著述によつて得られたる一層直接の利益ともいふべきは獨逸的精神の引き緊まつた事である。といふのは之までは只習慣的に外國の意見に盲從して、之が爲めに固有の才幹や元氣をも發揮することが出來なかつたのであるが、今や新思想は斯かる卑屈な弊風を打破したのである。成程獨逸人が請賣的思想を脱却するには矢張り他の國民、即ち英國人の指導を待たねばならなかつた。けれども英國人の精神と獨逸人の精神との間には互に親密な關係があつたから、此度所屬の學派を變更しても、結局自分の學派を建てたと同じ事である。獨逸人は之まで文學といへば佛蘭西でなければならぬ樣に考へ、哲學といへば佛蘭西の哲學をオーソリチーと心得て居たのであるが、今度は此信仰を一變したのである。即ち彼等は外交上、社交上から曰へば極めて不適當な言語たるを免れない獨逸語を以て、一の大國民に相應しい文學の形式と實質とを造る事が出來るといふ信仰を持つやうになつた。血氣盛なる青年文學者は在來の文學に非常の不滿足を感じ、問違つたながらも兎に角新文學を造り出さむとして非

常に奮勵したのである。之が即ち世に所謂「風雲時代」であるが、此風雲時代に於て青年文學者等が無暗に苦戰奮鬪して其勢力も漸く盡き果てむとした時、忽焉として數個の思想家が現れて社會の思潮を指導する事となつた。

カントは即ち其一人である。彼は其批判哲學によつて大に世の思想家や教師等の注意を引き、彼等に倫理的信條を與へた。此信條たるや羅馬のストイック學派の信條の如く、高尚にして且つ頗る嚴格なるものであつた。次に文學の方面では自由とか獨立とかいふことを題目とした者が熱心に歡迎された。そこで終にはアルントやリュッケルト、又はケルネルの如き勇壯なる抒情詩家を生ずるに至つた。是等の詩人が愈戰爭の始まつた場合に獨逸人を團結さすことに與つて多少の力があつたといふことはゲーテでさへ之を認めて居る。それからカント哲學の後繼者たるフィヒテや神學者のシュライエルマッヘルの如きは大に愛國的熱情を鼓吹したのである。之と同時に其頃教育社會に重んぜらるゝに至つた體操科は人間の筋肉を强むるのみならず、其品性をも强むるものであるといふので、ヤーンの如きは大に體操科を振興すべきことを絶叫したのである。

第一五二節　獨逸の德義同盟會（ツーゲンドブンド）

以上述べたる如き精神的興奮が實際獨立戰爭の上に如何なる影響を與へたかといふ事は、有名な「德義同盟會」によつて明かに知ることが出來る。素と「德義同盟會」なるものはケーニヒスブルグに組織されたのが一番初めで、或は眞面目な教育ある人々が社會を道德的に改良するといふ目的で造つた者であるが、會員國家が一大災厄に遭遇したものであるから、同會は時勢の必要上國民の幸福と名譽とを保護する爲めに、國民の團結に必要なる德義心の養成に盡力する事となつた。會員の數は實際三四百を越えなかつたのであるが、同會の眞似をして出來た秘密結社の數が澤山であつた爲めに、それが眞正の德義同盟會と混同される事が度々あつた。一八〇九年の騷動に與つたものは多くは德義同盟會員であつた。一八一三年に現れた愛國者の一群も矢張り同一の主義を有するものであつた。だから同會は素より佛蘭西人の推察したほど大組織のものではなかつたのであるが、而も個人の道德を改良する目的を以て努力したる結果、獨逸人の上に非常な影響を與へ、終に彼等をして獨立戰爭を起すに至らしめたのである。

第一五三節　獨立戰爭の主動者たる普魯西

けれども機愈熟して獨逸國民が劍を執つて起つまでにはなほ多くの歲月を要したのみならず、若し知的復興の効果が現れるのを待つて始めて國民が奮起するのであつたならば、獨逸の自由はまだ〳〵後れたに相違ない。實に獨逸の文學的修養が國民の大多數に普及するのは極めて徐々であつた。其上文學的修養夫れ自身の中には毫も政治上の意味がなかつたのである。素より人種と國語を同うする人々の間に一致の心を養成した點から見れば、政治上の意味を含んで居るといふ事が出來る。素より文學的修養なる者は國民の間に利益問題を超越せる高尚なる精神的習慣を養成する者である。けれども何か其中に現在國家の或要素が含まれて居ない以上は、材料が缺乏してあるのであるから、何うしても政治的運動となる事が出來ぬものである。凡そ樣々なる政體はその昔樣々なる事情の下に便宜上から出來たもので、それを近世の社會がそれ〴〵の必要に應じ、

又文化の程度に應じて發達させたものである。所で當時獨逸に存在して居た唯一の政體は即ち君主政體であつたから、國民は其君主政體を本として熱心に政治上の運動をなすより外に仕方がなかつたのである。而してナポレオンが最も深く獨逸國民の感情を害したのは實にこの點に關係して居る。何故なればナポレオンは唯一の例外(普魯西を指す)を除くの外は凡ての君主國を亡して仕舞つたからである。而してその所謂例外なるものも唯國家を亡ぼさなかつたといふだけで國家としての資格を出來得る限り低くしたのである。即ちナポレオンは普魯西を歐洲北東の一隅に追ひ詰めたのみならず、剩へ貧乏國の普魯西には到底も負ひ切れぬほどの過重なる償金を課したのである。彼は又佛蘭西の大軍を養ふ爲めに普魯西人の日常の食料をも强奪した。彼は普魯西が有力なる軍隊を貯ふる事を禁じた。彼は普魯西を其親交國たる露西亞と戰はせた。彼は普王フレデリック・ウィリアムをして不名譽にも內政の事は一切ナポレオンの指圖に從はせた。斯くの如く普魯西は外からはナポレオンに踏み付けられ、內部は非常の衰頽を來したのであるが、而も普魯西は流石に普魯西である。如何に衰へても一朝好機會の來つた時は、獨逸の獨立の爲めに主動者として奮鬪することの出來る潛勢力を持つて居たのである。

第一五四節　普魯西の再生

抑、普魯西が斯くの如き特權を得るに至つたのは、要するに獨逸人の中から一個の獨立なる歐洲的强國を造ることが出來たからである。此國が國勢を挽回する爲めに目醒しい活動をすることが出來たのは同國發達の歷史の然らしむる所である。即ち普魯西には代々有爲の君主が現れて國民に嚴格なる訓練を施した爲めに、大に國家の地位を高めたのであるから、國民は其信任する君主に對しては如何なる犧牲を捧ぐることをも厭はなかつたのである。其位であるから獨逸の諸方から天才が普魯西に集まつて來て、何れもホーヘンツォルレルン家の下に働くのを無上の喜としたのである。成程普魯西王國も色々の失策をして其無能を現した事もある。けれどもそれには境遇が惡かつたからで、一はフレデリック大王の建てた個人政府の組織にもよるのである。即ちフレデリック大王の樣な人傑が

その局に當つて居れば別に差支はないが、彼よりも遙に劣等な人物が從前よりも一層膨脹した國家の衝に當る時には色々な混雜が起るからである。斯かる事情であつたから、一朝災害が起つて來て絶對的君主のなす筈の仕事を無責任な大臣等に委托するのは善くないといふ事が解り、又普魯西王國の基礎を固からしめる爲めには思ひ切つた改革をなす必要があるといふ事が明かになつた曉には、普魯西の中には隨分激烈なる救濟策を執り得る人物があつたと同時に、斯かる荒療治に堪へることの出來る服從の念があつた。

そこで今度出來た內政上の改革は重に行政の統一を一層確實にする事と、土地制度を一層文明的にする事とであつた。これ迄でも有識の普魯西政治家の中には同樣の改革的意見を抱く者が少くなかつた。然し愈〻之を斷行したのは舊帝國の騎士フォン・スタインその人である、スタインの看破した所では何うしても獨逸がブランデンブルグ家の旗の下に集まらねばならぬ以上は、國民としての發達は望むべからざることであつた。時は恰も國民が戰敗の苦痛に心を奪はれて殆ど改革を苦と感じなかつた時であり、又國家には有力な人物が出て大に政務を

引緊める必要があつた時で、斯ういふ時を利用して改革を斷行することが出來たのは、全くスタインの賢明果斷の處置によるものである。のみならず今回の處置によつて普魯西人はスタインの嚴格なる品性の感化を受けることが出來た。而して恰も國民が自助自尊の必要を感じた時、スタインが自ら愛國心の好實例を示したる爲めに、多くの人々は之に倣ふことが出來た。彼は實に普魯西を再興させたる第一の功勞者として記憶さるべき人物である。然し彼は只この大業に着手した丈で、之を完成することは出來なかつたのである。彼は折角國民を導いて佛蘭西の羈絆を脫せしめる積りであつたが、不幸にも彼の書簡が橫取りされた爲めに、彼の計畫は忽ち暴露されて仕舞つた。そこで彼はナポレオンの怒に觸れ、普王フレデリック・ウィリアムが已むを得ず彼を免官するに至つたのは惜むべき限である。其後間もなくスタインは佛蘭西帝國の禁制の下に樣々の辛苦を嘗め、佛蘭西及び萊因同盟の敵として此處彼處と逃げ廻はり、終に露國皇帝に仕へてナポレオンの專制主義に反抗する事となつた。

けれどもスタインが始めた改革は決して失敗には終らなかつた。スタインの後

を承けた新内閣は國歩多難の爲め間もなく其地位を讓り、ハルデンベルヒ内閣が之に代つた。ナポレオンはハルデンベルヒが屹度普魯西を破産さすに相違ないと思つたから其就職を默許したのであるが、ハルデンベルヒは就職の後非常の精勵を以て改革に從事したので、多くの人は之を以て丸でジャコビン黨の革命の樣だと思ふ程であつた。

第一五五節　普魯西軍隊の惡弊

所が元來普魯西といふ國は武力で立つて居る國であつたから、此國から武力を取つて仕舞へば後は空虛になるより外に途はない。だからナポレオンが普魯西の常備軍を四萬二千人に限つた事は、普魯西に取つては非常な打擊である樣に見えた。其上に軍隊の服役期まで短縮させられたのであるから、普魯西は愈〻以て絶對絶命の有樣となつた。イェナの戰爭以前には普魯西の軍隊といへば機械のやうに訓練された奴隷と、暗昧にして而も傲慢なる貴族とより成立つて居た。而して將校もまた老朽、魯鈍で用に堪へざる人々であつた。のみならず是等の軍人は

法律上からも社會上からも一般の國民と區別されて居た。彼等の舉動が餘りに野卑で、普通人の生活と餘程趣を異にして居たから、普魯西の民は斯かる軍隊が一時も早く解散されることを願つて居た。而して今や軍隊は解散されて仕舞つた。そこで今度は今迄の軍隊よりも今少し國民的な軍隊を組織する必要が起つた。斯くするは取りも直さずフレデリック・ウィリアムやデッサウエルなどの着手した事業を改善する所以であつた。

第一五六節　普魯西の新軍隊制度

歷史は屢〻繰返さるゝものであるといふが、この眞理を一層完全に言ひ現せば、つまり社會は一定の法則に從ふものであるといふことになる。素より歷史は全く同一のことを繰返すものではない。前の事件が後の事件と異つて居ればこそ、之を過去の事件として追懷することが出來る。けれども社會或は國家といふものは似寄つた事情の下には矢張り似寄つた働をするものである。その樣に普魯西は現に衰微の情態にありながら、尙同國存在の原則に從つて嚴密に軍事上の改

革を斷行した爲めに、再び第一位の軍人國となる事が出來た。否歴史の反覆は唯それのみでなかつた。普魯西の舊軍隊は本と佛蘭西が工風した軍隊組織を採用して、出來得る限り之を發達させたものであつたが、その樣に新軍隊は佛蘭西共和國が始めて案出した市民軍の制度を充分に應用したものであつた然し玆に新舊軍隊制度の間に大切な相違のあることを忘れてはならぬ。即ち舊軍隊制度が軍學上に與へた貢献は之まで已に普魯西をして政治上の大變化をなさしめた所の軍隊制度を一層極端ならしむるものに過ぎなかつたのであるが、今度の新軍隊制度は國步多難の時期に必要に迫まられて一氣呵成で造つた軍隊制度を一變して、正則の軍隊制度としたものである。而して此事は佛蘭西革命が與へた重大なる改革の一を直接に且つ明確に歐洲人の生命の中に吹き込む所以であつた。

第一五七節　普魯西に於ける軍人服役期の短縮

今度は普魯西の軍隊を今までよりは一層大なる基礎の上に置く必要があつたので、軍隊の主權は自然少數の有力なる將校の手に歸する事となつた。是等の將校は丁度スタインが生産事業や通商事業の經濟を一切人民に任せた樣に、一國の防禦の事も同じく人民に任せたいといふ考を抱いて居た。是等の將校の一人にラォン・グナイセナウといふ人があつた。彼は過ぐる頃の戰爭に市民と軍隊とを率ゐてコルベルグの城市を防禦して驍名を轟かした人である。彼は又有名なる兵法學者クラウセウィッツと協力して、シャルンホルストを輔佐し、近世に於ける最大の軍事的改革をなさしめた人である。此シャルンホルストはハノーヴァーの農家の子で、別に之といふ武名を轟かしたことはない。其上グロース・グルシェンの戰に致命傷を受けたので、今度自分が熱心に開始した戰爭の終局をも見ることが出來なかつた。そこで今度の戰爭の月桂冠は猛將ブリュッヘルと其參謀グナイセナウに與へられる事となつたけれどもシャルンホルストは兎に角今回の獨立戰爭を統御した一英雄であつたに相違ない。彼は一國の人民は生れながらにして其國の防禦者たるべきものであるといふ原則を再興した人である。而して之は佛蘭西の徵兵制度を眞似たものでなく(彼自らもさう言つて居る)、たゞ一時空文と成り

果てたフレデリック・ウィリアム一世の勅令に從つたものである。彼は軍隊の服役期を短縮して、滿期後は之を豫備兵に編入した。斯くしてナポレオンの軍隊制限の命令にも矛盾せず、又國家の財源をも超過せずして、能く全國の壯丁に兵式の訓練を施すことが出來た。そこで市民軍は新しい意義を有する事となつたのである。即ち之までの徴兵制度は丁度一七九八年に佛蘭西共和國が國難の爲めに義勇兵となる者が不足を告げた際に始めて勵行したものと同じ事で、市民の中から强迫的に徴發したものである。所が新徴兵制度によれば市民軍なるものは取りも直さず國民全體が武裝したものに外ならぬ。詰り十九世紀の工業的文明が武裝して現れたものと見ることが出來る。而して其樣は曾て人の身分の高下が契約に依らずして、軍職の高下によつて定まつた時代と善く似て居る。

第一五八節　普魯西に於ける新軍隊制度の及ぼせる効果

斯ういふ騷しい世の中に戰術が非常の進歩をするのは勿論のことである。何にしてもナポレオンの樣な實際的戰略家や、カロロ大侯爵の如き兵法學者や、カルノーの如き經世家が歐洲の戰場を支配して居るといふ時代であるから、勢ひ軍事上の學問は進歩せざるを得なかつたのである。のみならず普魯西はこの前ナポレオンの爲めに屢苦い戰爭の經驗をして居るから、今や鋭意周到に軍事上の改良を計つて居る。即ち下は一般兵卒の武裝より、上は最高軍略家の養成に至るまで、又小は斥候、前哨等の勤務より、大は幾十萬の軍隊を操縱する事に至るまで、非常に綿密な改良を計つたのである。そこで此上は今までよりも遙に長距離に向つて精確に射擊し得るやうな銃砲の發明でもあつて、軍事界の革命を起す日の來るまでは最早發達の仕樣がないといふ程度まで達したのである。而して市民軍といへば大概知識の方が進歩して機械的訓練の方が缺けて居る人々から成立つものであるが、さういふ市民軍を以て敵を攻擊するには散兵隊形を造るに限ると云ふ事は早や戰爭の初から氣が附いて居た。この點に於ても慥に戰術上に一大貢献をなしたものといふ事が出來る。

然しながら斯くの如き變化といひ、其他斯くの如き大軍隊を用ふる爲めに生ずる一般の結果といひ、決して普魯西の徴兵制度の最高の結果と稱すべきもので

はなかつた。シャルンホルストの改革案は軍事上の立場から見れば、市民軍によつてなされた戰略上の改革を强固に、且つ永久的になしたものと言ふ事が出來る。又政治上及び社會上の立場から見れば、彼の改革案は社會の中から軍隊を造り出すといふ事を改めて、社會其者を軍隊的にしたのであるから、之が爲めに社會上に及ぼした變化は莫大なものであつた。抑、シャルンホルストの改革案が直ちに採用されたのは一は革命戰爭の壓迫があつたからであるが、一は歐洲諸王國の傳說にもよるのである。例へばピニドモン王國の如きも多年嚴重なる强制的徵兵制度を實行し來つたのである。又露國の近世的獨裁政治も全く徵兵制度の基礎の上に立つて居る。而して佛蘭西の橫暴を拒ぐ爲めに歐洲諸國が其民を擧げて皆兵となすの必要を感じた頃には、何れの國も兎に角法律上では强制的徵兵制度を實行する規定になつて居た。即ち墺地利、普魯西などでは自衛上の必要から徵兵制度を勵行して居た。而して苟くもナポレオンの權力の波及した所では、人民は一方には公平なる法律の恩惠に與ることが出來ると同時に、他方には强迫的徵兵制度の下に筋骨を勞したのである。隨つて獨逸帝國の青年はすでに殘

刻なる血稅に慣れて居たから、一朝合圖の大鼓が響き渡つた時には、全國の壯丁は雲の如く集まることが出來た。餘り多く集まつた爲めに當局者は已むを得ず徵兵制度を實行する上に制限を加へて之を淘汰するに至つたのである。

第一五九節　フォン・ボイエンと軍隊制度

然るに佛蘭西に於てはブルボン王家が人民の利益を謀つてなしたる第一の改善は徵兵制度を廢することであつた。所が其後間もなく志願兵だけでは到底充分の兵數を得ることが出來ないといふ事が解つて來た。そこで今度は手加減をした徵兵制度を採用する事となつたのであるが、それも年を經るに從つて次第に嚴しくなつて來た。但し一度に徵發する人員は一定して居たから、定員以上を徵發する樣な事はなかつた。

之に反し普魯西では大に決心する所があつたから、强制的徵兵制度の充分の價値を認めて何處までも之を勵行した。歐洲開放戰爭以後普魯西國民は依然として正則の軍隊を嫌ひ、却つて訓練の不充分な國民軍の功績を誇大的に賞揚して

居た。終には正則の訓練などゝいふものは畢竟無用の長物であつて、それよりは假令短期間の服役でも國民軍の方が實戰の際には却つて役に立つものであるといふ考が勢力を占める樣になつた。けれども當局者は間もなく國民軍萬能主義の夢から覺めたのである。彼等當局者は國民軍がたゞ愛國心と勇氣だけで一國の存在を保證し得る爲めには、非常に高き價を拂はなければならぬといふ事を悟つた。一八一四年六月フォン・ボイエンは國民の戰爭熱がまだ冷めぬ內に、彼等を烈しい兵役に就かせなければならぬといふ考を抱いて陸軍大臣の職に就いた。而して同年九月彼は一の法令を發布して、普魯西國民は今までは唯各自の利益の爲めに兵役に就くといふ事の味を僅に感じ始めた丈であつたが、之よりは一層深く其味を覺るべき時が來るであらうといふ事を敎へた。而して普魯西國民は五年間常備軍に入隊し得る能力を有し、其內三年間が現役で、二年間が豫備であるといふ事を告示した。五年の兵役が濟めば、後は十四年間國民軍の兵士となることであつた。この國民軍なるものは敵軍が愈國內に侵入して來たといふ國家危急の場合に召集さるべきもので、常備軍の現役にも豫備にも加はつて居

ない所の十七歲乃至五十歲までの凡ての男子を以て組織されたのである。但し軍費を自辨することの出來る敎育ある人々に限り常備軍に現役として僅に一年、國民軍には僅か三年といふことになつたから、それだけ兵力は減ずる譯である。然し大體から言へば此法令は實際嚴刻に屬行されたもので、此點に關しては流石の國民皆兵論者すらも驚嘆せざるを得なかつたのである。墺地利も同じく徵兵制度を保存して居た。けれども墺地利では服役年限の短かつた爲めに兵力の上には非常の損失があつた。

第一六〇節　近世歐洲の市民軍は民主主義の結果なり

斯くの如く歐洲諸强國が競ふて新軍隊の組織に熱中して居た時、獨り舊式の軍隊組織で滿足して居たのは英國である。英國は矢張り志願兵組織に信賴して、社會の下層階級の內から本國及び殖民地を守る軍隊を造り出して居た。幸にも一八〇六年に補充兵の大不足を告げた事があつた爲めに、政府はウィンダム法案を通過させて、在來の終身服役を廢し、平時は七年、戰時は十年の服役といふ事に更

め、且つ中等以上の階級からも兵士を募ることにした。

所が歐洲には荐りに戰亂が起つて來たので、流石の英國民も終に大陸諸國民に倣つて軍事上の改良をなさゞるを得ざるに至つた。そこで始めて義勇兵を募集したのであるが、其數が次第に增加して、終には四十萬の市民軍を組織することになつた。その時までは英國の勇敢なる軍隊といへば唯名譽砲兵隊だけであつたが、今は斯くの如く盛なる軍隊を見るに至つたのである。然しそれは唯一時で、國家の危險の去ると共に再び昔の狀態に復つて仕舞つたけれども兎に角之によつて英國式の義勇兵制度は英國の地利上の勢力と相待つて、大陸諸國の軍隊制度と相拮抗し得るものとなつたことは明かであつた。一八五八年に名譽砲兵隊は再興せられて市民軍に代る事となつた。今日でも國家の一大事といふ時は英國の軍隊制度は優に大陸諸國の軍隊制度と相對抗し得るものである。

斯ういふ事實の上から見れば、近來歐洲諸國が大規模の軍隊を作るに至つた原因を是等の諸國の功名心と嫉妬心とに歸する說は正鵠を得たるものでないといふことが解る。素より今日各國が軍隊を置いて居る理由は何も昔と變つた事

はないけれどもその軍隊があれ程の大規模のものとなつたのは、詰り革命戰爭と市民平等主義との結果である。實に平民の勢力が盛になつた直接の結果、尙武的精神が勃興して、却つて民主主義の發達を妨げた事、並に外國と戰爭する積りで組織した軍隊が却つて國內の不平黨を鎭壓する力となつたといふ事は、最も不思議なる歷史上の顚倒といふべきである。成程一方から見れば是等の軍隊の爲めに人民の負擔が大くなり、それが爲めに反動を起して、革命や民主政治を早める事になつたかも知れぬ。けれどもそれは何も武斷的大君主等が當時の進步的精神に反抗したからではない。何故なればかの軍隊的組織は元來時勢の產物であるから若し之が爲めに由々しき社會上の危機が起るとすれば、それは歐洲に於ける民主政體を盤石の上に置かしめた大革命の直接の結果といふより外に途はないからである。

第一六一節　ナポレオンに對する普魯西の反抗

普魯西が佛蘭西に對し反旗を翻して、征佛の途にある露軍を歡迎することが出

來なかつたのは、色々の事情があつたのであるが、その重もなる理由は普魯西が實際露帝アレキサンドルと隙を生じて居たからである。素より普魯西人が佛國守備隊の屯所を荒した事が一二度ある。けれども普魯西のやうな國では本部から命令が來るまでは決して全體が活動を始める譯には行かなかつたのである。然し何分にも事情が接迫して居たので、ナポレオンの配下にある普魯西軍の司令官ヨークは已むを得ず自ら責任を負ふて露將と條約を結んで、ナポレオンに對する強き服從の關係を犧牲にした。之が爲めに普佛の關係は終に破裂する事となつた。普魯西政府は飽くまで此條約を結んだ事を否認してナポレオンに辨解したのであるが、ナポレオンは頑として之を聞入れなかつたのである。そこでフレデリッキ・ウィリアムは軍事顧問官を伴ふて屢〻アレキサンドルの滯在地に往復した。タウロッゲンの會議の後二ケ月を經て、普王と露帝とは愈〻思ひ切つてカリュシュの條約を結んだ。此條約の目的は普魯西が其失つた土地と同じ廣さの土地を回復するまでは、協力して戰爭を繼續しやうといふ事であつた。

第一六二節　普魯西に於ける一揆

愈〻正式に獨立戰爭が宣言された時、普魯西國民は猛然として立ち上つた。實は之までもなく宰相スタインは國民の熱誠に助けられて、已に東部普魯西に於て國民軍を組織する事が出來たのであるが、今度戰爭の宣言があつた爲めに義勇兵は忽ち全國から集まつて來た。そこで義勇兵だけでも已に人員は餘る程あつたから、それでもまだ徴兵の告示があるのを見た時には人民は殆ど激昂する位であつた。それから政府の財政が豐かでないと聞いた時、人民は何れも喜んで寄附を申込んだ。今日でも普魯西の家族に行つて見れば當時の事を紀念する銀片がある。其銀片は當時の寄附金額が非常の巨額に達して終に剩餘を生じたから、それが寄附者に返却されたものであるといふ事を證明するものである。さて今回の戰爭に一番熱誠を現したのは學生及び敎育ある階級であつた。普魯西軍が激戰の後凱歌を奏してルーブル宮に集まつた時、第一に巴里人を驚かしたのは實に彼等であつた。又今回の戰爭に於ては只面白半分に騷ぎ立てる樣な野卑な人

間は一人もなかつた。又貧乏の爲めに家を棄てゝ戰場に赴くことが出來ぬといふ者もなかつた。中には義勇兵となる爲めに其所有品を殘らず賣拂つて武器を調へた者もある。或貧しい乙女は自分も國家の爲めに少しでも貢献したいといふので、惜しげもなく其美髮を切つて寄附金を拵へたといふ話がある。

斯ういふ國民の熱誠があつたので、シャルンホルストは其計畫通り全國の敢能なる壯丁を以て一大軍隊を組織することが出來た。之が即ちナポレオンが喇つて（ブールジョアジー・ナルヴィー）町人の軍隊と呼んだもので、住民十七人に對する一人の割合で召集されたものである。但し戰時に於ける應援兵の數は全く此計算外である。

第一六三節　一八一三年の同盟

然し最初にナポレオンが普魯西軍と衝突した時は對手はたゞ普魯西軍の先鋒隊だけであつた。モスコーからの退却がまだ終らぬ内にナポレオンは自分だけ急いで巴里に歸つた。そして更に大軍を編制し、之に獨逸にあつた逃亡者や守備兵をも合併した。斯くて彼は優勢なる軍隊と得意の軍略とを以て同盟軍をグロ

ース・ゲルシェン及びバウツェンに擊破したのであるが、折柄騎兵が居なかつた爲めに最後の決戰を試るまでには行かなかつた。そこで兩軍とも休戰して互に兵力を養ふたのである。其内にミュラー將軍は騎兵隊を率ゐてナポレオンに合した。ナポレオンは又伊太利からも軍隊を呼び寄せて墺帝の軍を威壓せむとした。所が同盟軍の方でも援兵が加はつて墺地利を保護せんと努めた。然るに此時已に墺地利の政策は一變して居た。即ち墺地利は普魯西と露西亞とが協同してナポレオンを壓伏する事を好まぬ樣になつた。そこで墺相メッテルニヒはライヘンバハの會合に於て、若しナポレオンが墺國の提出する平和的條件を承諾しなかつた時に、墺地利も同盟軍に加はらうといふ事を約束した。そこで三國の代表者がプラーグ會議を開いて平和條件の事に就て討議した。

所がナポレオンの政策の中には元來讓歩といふことはなかつた。そこでプラーグ會議も無効となり、墺地利の軍隊は普露兩軍と共に戰場に現れることゝなつた。瑞典もまた佛蘭西に對して宣戰の布告をなし、英國は金錢を以て同盟軍に應援した。ナポレオンは非常なる大膽と敏捷とを以て、同盟國がまだ合併しない内

に一つ〳〵之を攻擊した。けれどもナポレオンの軍隊は數に於ても質に於ても到底同盟軍の敵でなかつたので、同盟軍は次第々々にナポレオンを包圍する樣になつた。彼は二回の會戰に敗北した。彼は又非常な損害を被つて僅にドレスデンの本營を維持することが出來たが、而も彼の地位は非常に危險であつたから、その配下のバヴァリア人を始め獨逸分遣隊の多數は相率ゐて同盟軍に降來して仕舞つた。而して十月中頃のライプチヒの戰でナポレオンは愈〻窮地に陷つた。この戰は世に列國戰爭（フェルケルンヨラハト）と稱するもので、ナポレオン一人に對する歐洲諸國民の戰爭であつた。而して佛蘭西の軍隊は多勢に無勢で、終に聯合軍の爲めに破られたのである。

第一六四節　ナポレオン皇帝の廢位

ナポレオンは又もや新軍隊を編制する爲めに巴里に歸つた。同盟諸國は何處までも永遠の平和を確立するまで戰はねばならぬといふので再びその準備に取懸かつた。所が是等諸國の帝王は別に强固な同盟を造つて居る譯ではない。何れ

も思ひ〳〵の利益を謀つて居たのである。只その間に共通の點があつたのは、ナポレオンに其征服地の幾分を返させて歐洲の均勢を保つ樣にしたいといふ希望のあつたことである。運命の寵兒であつたナポレオンは只時機の熟するを待つ爲めに同盟軍の進軍するに委せた。彼が斯くの如く何處までも自分の必勝を信じて居たことは只驚くの外はない。今や獨逸全國はナポレオンの敵となつて居る。丁抹も彼に對して戰爭の布告をした。將軍ミュラーは佛軍が伊太利で敗北した爲めにナポレオンを離れて行つて仕舞つた。ウェリントン將軍は此時佛蘭西の南境を踰えて進軍しつゝあつたナポレオンの最後の軍隊は粉碎されて仕舞つた。斯くの如き事情であつたにも係らずナポレオンは利益ある讓步的平和談判を避けて、危險なる戰爭を撰んだのである。

塡地利がナポレオンを倒すことに反對したことや、或は同盟軍の運動が之が爲めに目的のないものとなつた事などは、素よりナポレオンに取つては好都合であつたに違ない。彼は又獨得の手腕を以て無訓練の新兵を操縱することが出來たのである。又彼が多くの勝利を得た事も事實である。而して同盟國の諸帝王は

今や互に相反目して、頻りにナポレオンに向つて平和を申込むやうになつた。然るに愈同盟軍が巴里を指して驀地に進軍するに當つては、ナポレオンは詮方盡きて如何ともすることが出來なかつた。一八一四年三月三十一日、露國皇帝及び普魯西王は威風堂々として巴里の城門に入つた。ナポレオンは巴里の陷落終に已むなきを見た時、獨りフォンタンブローに退き、帝位を我子に讓らむことを申込んだ。然るに普露兩帝は何處までも無條件の讓位を要求し、且つ彼をエルバ島に流竄する事に極めた。そこでナポレオンは不承々々に己が果敢なき運命に委かせ、エルバ島を己が王國となし、四百人の近衛兵と二百萬法(フラン)の歳入とを有する事となつた。

第一六五節　ブルボン王族の召還

佛蘭西帝國の倒るゝと同時に革命勝利の時代は終を告げたのである。ナポレオンがエルバ島に流された時から、世は反動の時代、妥協の時代、試驗の時代となつた。同盟國は已に佛蘭西帝國を顚覆したのであるが、扨て其代りには如何なる政府を組織すべきやと云ふことが第二の難問であつた。何しろ同盟諸國は今征服者の地位にあるから、この問題に就て佛蘭西の人民に嘴を容れさす譯には行かぬ。又事實に於ても人民の信用を得るに足る人物も黨派もなかつたのである。所が茲にタレーランと稱する一政治家があつた。此人は經歷が惡かつた爲めに人民の代表者たる資格に於ては缺けた所があつたが、何分にも利巧者で策略家で其上に資産家であつた所から可なりの勢力があつた。其上先見の明があつたから、同盟諸國の帝王が巴里に入城した時、彼は直ちに頭を出して、一方には同盟國の帝王の希望を參照し、他方には國民、殊に中等階級の希望を參酌し、又佛蘭西の現狀に鑑みて列國との調停を試みる事となつた。そこで彼はナポレオンの元老院を以て臨時政府を組織し、ナポレオンの廢位を宣言し、ブルボン家の首長を召還して佛蘭西の王とし、國民を代表して新憲法を制定した。タレーランは決してナポレオンの皇后であつたマリー・ルイゼに攝政をさせたり、或はナポレオンの元帥の一人に王冠を與へるやうな愚なことはしなかつた。彼は色々の事情を參考した後、終に王政を復古せしむる事に決したのである。

第一六六節　王政復古の監督者としてのアレキサンドル皇帝

タレーランは國家の重大なる事件は矢張り機敏なる政治家の手によつて解決されなければならぬと云ふ考を持つて居たが、之に反し露帝アレキサンドルは人民の要求に對しては尊敬を表せねばならぬといふ事を強く主張した。兎に角今回の王政復古の監督者は誰かといへば、曾て革命運動に助力した老練なる畫策家であり、又人民の利益の保護者は誰かといへば、露國の獨裁君主であるといふ有樣では、眞の政治上の改革は前途尙遼遠と言はざるを得ない。當時露帝が切に感じたことは佛蘭西國民は何うしても自由主義の政體を要するものであるといふ事であつた。且つ露帝は此問題の解決者としては最も重要の地位にあつたのである。露帝は又新憲法は形式上から言へば素よりルイ十八世を佛蘭西國王として承認する者であることを認めて居たが、之と同時に憲法政治の主義には國王も服從すべきものである事を強く主張した。けれども露帝はブルボン王族をして過去を忘れさすことが出來ず、又新教訓を學ばせることも出來なかつ

た。所で彼は已にブルボン王朝の再興に同意したのであるから、ルイが王權の使用に關して讓歩をした時には、已むを得ず之を滿足したのである。けれどもそれでは王政復古の原則に違反して居るのであるが、其事に就ては人民は深く注意しなかつた。當時人民は彼等に政治上の自由を與へんとする宣言に就て綿密に之を吟味する心はなかつたのである。其頃輿論を支配して居た者は重もに中流階級であつたが、其中流階級の人々は過去に於ける失敗の爲めに今は一定の自信がない樣になつて居り、其上に最近の大慘劇を經驗して居るから一種不安の念を抱いて居るので、今は何んな政府でも善いから多少合法的であつて、少くとも再び革命騷ぎをする樣な憂のない政府でさへあれば、喜んで之を承ける覺悟であつた。そこで彼等は直ちに新王を慕ふて其周圍に集つたのである。斯ういふ風に氣變りの早い處が即ち佛蘭西式といふべきものである。彼等は新王ルイを親切なプロヴァンス伯として記憶して居るばかりで、ルイには勇敢な氣象が缺けて居ることを感心にも忘れて仕舞つて、たゞ溢るゝばかりの熱誠をもつて王の即位を祝ふたのである。而してアレキサンドルの意見に從つて委員等が一の憲

章を草し、ルイが之を人民への賜物として批準した時、中流階級の人々は之を見て、此憲章は前に元老院が造つた憲法よりも餘程王政主義の臭味を帶びて居ることには氣附いたが、而も之に就て兎や角批評するやうなことはなく、却つて之を以てブルボン式で與へられたブルボン王家の約束狀として信賴したのである。

第一六七節　ブルボン王朝の不人望

勝利者の地位に立てる同盟諸國は出來るだけ佛蘭西國民を其新政府に調和さす事に努めた。そこで彼等は決して佛蘭西を敗者として待遇するのでなく、唯專制政治から救ひ出された國として待遇するのであるといふ事を示さむ爲めに凡ゆる手段を盡くしたのである。今回の戰爭に於ても彼等は決して佛蘭西と戰ふのでなく、唯ナポレオンと戰ふので、佛國に對しては從來の國力と國境とを保存したい考であると云ふことを宣言した。第一回巴里平和條約に於て、普魯西が佛國の領土を割いて獨逸國境の安全を計りたいといふ强硬なる要求があつたにも係らず、同盟諸國が斷然この要求を斥け、佛蘭西の國境を一七九二年の狀態に復せしめ、其上に多少の土地さへ加へたのは必竟かの宣言に背かざる爲めであつた。のみならず彼等は佛蘭西政府に賠償金を出させる事を見合はせたのである。そして佛蘭西が二十年間の掠奪によつて集めたものに就ても殆ど問ふ所なかつたのである。お負けに英國の手に落ちたる殖民地の大部分をも佛蘭西に與へたのである。

それにも係らず佛國民がブルボン王族に服從したのは唯外面上の事だけで決して眞心から服從したのではなかつた。何故かといふに第一にブルボン王族は個人としては人を引付けるやうな愛嬌が缺けて居り、第二に團體としては頻りに門閥の高いことを鼻にかけて頗る人の氣に障ることが多く、第三に施政者としては手腕に乏しく、且つ其なす所が公明正大を缺いで居る爲めに大に人の感情を害したからである。素よりルイ十八世はその政府を組織するに當つて王黨の人々以外に帝國主義の人々をも採用して、恰も以前の佛蘭西帝國を尊敬して居る樣に見せかけたのであるが、其實ルイが帝國主義の人々を使つたのは何う

しても彼等でなければ勤まらない地位に限つたので、其他の地位は凡て王黨の人々に與へたのである。而して是等王黨の官吏等は非常に強情であつた爲めに最も國民に嫌はれたのである。それから間もなく國民は憲章を與へた國王の誠意を疑ふに至つた。其譯は第一、一方には議會に於て憲章の朗讀があつたかと思へば、他方には政府は出版自由條例を廢すべき事を議會に要求して遂に其目的を達したからであり、第二、外國に移住して居た貴族等が今度歸つて來たにつけ、幾千の人々が大なる損失を招くをも構はず、前に沒收された土地を再び貴族に返還すべき意向のある事が明かになつたからである。

新政府は殊に軍隊に對して拙劣なる政策を執つた。ナポレオンの配下にあつた老練なる軍人等は肥え太つた憶病者のルイを輕蔑し切つて居たのであるが、今度其軍隊が解散されて仕舞つた爲めに、今迄は軍人として比較的地位の高い所に居た者が、俄に社會上地位の低い所に落ちることになつた。其跡へ王政時代の軍隊が復興せられ、生れてからまだ煙硝の香も嗅いだことのない樣な王黨の青年等が佛國軍隊の精華として飾り立てられたのである。此有樣を見たるナポレ

オン配下の舊軍人等は今や侮辱の念一變して憤慨の情となつたのである。たゞ軍人ばかりでなく、一般人民もルイ王に對して非常な惡感情を有する樣になつた。斯うなつて來れば人心再びエルバ島の流竄者を慕ふやうになるのは自然の勢で、何れも來春彼が再び佛蘭西に歸るの日あらむことを望んで居た。だからナポレオンが愈〻佛蘭西に上陸した時には、軍隊は直ちに彼の周圍に集まり、人民は歡呼して之を迎へ、中流階級の人すら表面上だけでも兎に角彼を歡迎するに至つたのである。ブルボン王族は此有樣を見て蒼皇逃げ隱れたのであるが、唯一人彼等に對し同情を寄する者はなかつた。多くの人々は帝國時代が復興して王黨に對する復讐をなすの日が近けることを豫想して居た。此時に當つて再び戰亂の起るべきことを思ふて心配して居た者は唯富者の階級だけであつた。

第一六八節　百日政治（ハンドレッドデーズ）（一八一五年三月より六月まで）

而もナポレオンに取つては、今は冒險をなすべき時機ではなかつた。ナポレオンは列國が維納會議で互に爭論をして居ることや、或はブルボン王族が不人望に

なつたことなどは知つて居たが、佛國民が戰爭に疲れて居ることには氣が附かなかつた。又列國は假令他の問題に就てこそ互に爭論をしても、ナポレオン一件に關しては、今も尙協同一致の步調を取るものであるといふ事を知らなかつた。若しナポレオンが同盟國の軍隊の數が削減せられ、ナポレオンに對する列國の恐怖の情が鎭まり、又佛國民が最早やブルボン家の失政を忍ぶことの出來ない樣になるまで待つて事を擧げたならば、或は成功する事が出來たかも知れぬが、然しさういふ事はナポレオンの性質上出來ない事であつた。

そこでナポレオンはエルバ嶋に流されてから一年も經たぬ內に數百人の忠兵を率ゐてカーン附近に上陸した。ルイは驚き俄に從前の態度を一變し、人民に對して大なる讓步をなしたのであるが、然し早や時が遲かつたので終に不名譽なる逃亡を企てた。斯くてナポレオンは再び佛蘭西皇帝の位に即くことゝなつた。然し今度はナポレオンも人民が憲法政治を希望して居るといふことを深く心に留め、帝國の憲法に一の條例を追加して、五月會議（シャムプドマイ）を復興した（五月會議とは佛蘭西の帝王が毎年五月に有權者の階級と會合して色々の相談をなす會合をいふ）。之は專制政治の時代は已に過ぎ去つたことを國民に

示す爲めであつた。素よりナポレオンが今となつて斯かる宣言をした所で、誰も之を信ずる者は殆どなかつた。又かの平和的宣言も同樣不成功に終つたのである。列國の帝王はナポレオンの書面を撥ね付けて仕舞つた。彼等は前にはナポレオンが皇帝の稱號を稱へることをさへ承認したのであるが、今は一個の犯罪人たるナポレオン・ボナパートとして彼を排斥したのである。而して彼等は第一にナポレオンを佛蘭西の國賊と見做し、此國賊を鎭壓する爲めにルイに援兵を送るべきことを約束した。

所が其後の樣子を見るとナポレオンは國賊ではなく、人民が撰擧した者であるといふ事を認めざるを得ざるに至り、且つナポレオンは兎に角一時だけでも列國に對し平和を維持せむとする者である事が解つた。然るにナポレオンの將帥であつたミュラーの行動の爲めに列國は何うしてもナポレオンの權力を奪はなければならぬと決心した。と言ふのは當時ネープルス王となつて居たミュラー將軍は曾て佛蘭西帝國の滅亡の爲めに禍が身に及ぶ樣な事があつてはならぬと思ひ、且つ出來る事なら報酬として土地をも得たいといふ欲望をもつて居たか

らその義兄ナポレオンと絶縁したのであるが、その後自分は墺地利から欺されたので、維納會議は將に彼の王位を廢せむとして居るといふことが解つたから、ナポレオンが佛蘭西皇帝の位に復したといふ報知に接するや否や、ナポレオンの命令にも從はず、直ちに墺地利に向つて攻擊的態度を執つた。若し勝つたならば伊太利全半島を平定して、ナポレオンの爲めに素晴らしい手柄を立てる積りであつた。所が戰敗の爲めに其計畫は悉く水泡に歸して仕舞つた。ナポレオンは素より戰爭の避くべからざる事は百も承知して居たが、ミュラーの好意に對しては斷然之を拒絶し、且つ戰爭の終局までミュラーを退隱させて之までの反覆常ならぬ行動や、無分別な擧動の罪を償ふべきことを命じた。

第一六九節　ナポレオンの最後の戰爭

ナポレオンが最後の決戰をなさむとして愈〻帝都を出發するに當つては、その胸中に喜憂交〻往來したのである。彼が喜んだのは、之によつて國內の民主主義や立憲的制度に服從するの義務を免れることが出來ると思つたからである。彼は凱旋の曉には國內の我儘なる連中を從前の權勢の如く自分の下に壓伏しやうと思つたのである。又彼が憂へたのは、自分の軍隊は精銳でこそあれ、列國の聯合軍と戰ふにはその數が餘り少かつたからである。のみならず若し敗戰にでもなれば國內に又一つの革命が起るに極つて居ることを能く知つて居たからである。其上當時のナポレオンには曾て歐洲大陸を征服した時の樣な元氣と決斷力とがなかつたのである。

けれども流石にナポレオンは假令衰へたりと雖、まだ軍隊の多數を以て直ちに壓伏されるやうな者ではなかつた。又彼の機敏なる進軍も決して無成功と稱すべきものではなかつた。現にウェリントンもブリュッヘルも、ナポレオンの神速なる進擊に遇ふて、一時は狼狽した位である。ワーテルローの戰にナポレオンは最近の戰に試みたる大膽不敵の突擊法で大に敵軍を驚かしたのである。また兵數の上から言ふても、普魯西の軍隊が戰場に現れてナポレオンの運命を決するまでは、ナポレオンの軍隊は決して劣勢といふべきものではなかつた。然るにナポレオンは戰爭中常に敵軍の實力を實際よりは輕く見積つて居た。だからブリュッヘルが

リニーの敗戰後直ちに新軍隊を召集して、勇しくもワーブルより進軍して、ウェリントンの應援をしたことは、ナポレオンに取つては全く豫想外のことであつた。若しナポレオンが英軍は佛軍の猛烈なる攻擊に對してもその陣地を固守する決心であつたことを知り、又普魯西の軍隊がブルーキーの兵と衝突することを避けて、直ちにワーテルローに驅け付けるであらうといふ事を豫想することが出來たならば、ナポレオンは其日の正午を待たずにウェリントンを攻擊したに相違ない。今や佛軍は英軍の頑强なる抵抗に遇ふて散々に敗北した。而してナポレオンの軍隊は墺地利や露西亞の援軍がまだ戰地に達せざる內に早くも潰走して、彼が最後の冒險も玆に終を告げる事となつた。

第一七〇節　ブルボン王族再び歸る

ナポレオンが敗れて巴里に歸つた時は、議會を初め前に彼に加擔して居た者までが、ナポレオンに對し反對の態度を執る樣になつたので、彼は再び帝位を辭せざるを得ざるに至つた。而も彼の身邊には危險が逼つて居たので、怨を呑んで一

時退隱して見たが、終に英國の一軍艦に降參する已むなきに至つた。爾來世界の歷史に於ける最大立物は空しく大西洋上の一孤島に幽閉せられて、全く世と絕緣されて居たが、一八二一年五月五日、終に病痾の爲めに苦痛と不滿の生涯を終つたのである。

ナポレオンが位を去つた後、議會は直ちに假政府を組織した。假政府は同盟國が巴里住民の生命財產を尊重すると云ふ條件で、巴里降伏の手續を了し、之によつて最早血を流すことなく戰局を結ぶことが出來た。次に議會は永久的憲法の組織に着手した。ルイ十八世は再び正當の君主として巴里に歸つた。所が彼は政權を己が手に收めて自由主義者の計畫と同盟諸國の企圖とを無効ならしめた爲めに、人民はブルボン王族に對し益〻不快の感情を抱くに至つた。第二の王政復古は第一の王政復古よりもブルボン家に取つて成功であつたといふことは出來ぬ。ルイが今度容易に王冠を取返すことが出來たのは實に警視總監フーシェの力によるのである。フーシェはウェリントン侯と協力して路易を召還したので、丁度タレーランが第一回王政復古の時に演じたやうな役を勤めたのである。之に就て

はフーシェの姦策も與つて力があつたのである。即ちフーシェは假政府の首長といふ資格で、陽にはブルボン家を烈しく罵りながら、陰ではその歸國の運動をした。彼はルイが迅速にさへ行動すれば勿論王の權力を恢復することが出來るといふ事を能く承知して居た。そこで彼は己が野心を滿たさむが爲め、ルイを助けて佛蘭西の王となさむことを決心した。そこで彼はルイが再び主人公となつて同盟諸國の帝王を歡迎するに最も都合の善い時、ルイを巴里に入らす樣に運動した。而してミュラー自らは曾て王を弑した者の一人でありながら、再びルイに用ひられて警視總監となることが出來た。

第一七一節　佛蘭西に於ける反動

ブルボン王族は百日政府の經驗にも鑑みず、依然として無謀の政治を續けた。けれどもルイ十八世が愈〻佛蘭西の王として其地位を確立するまでは、色々の事情の爲めに人は其罪を恕して遣つたのみならず佛蘭西の社會はブルボン家に對して大なる好意を表したのである。新議會――其内の下院は今迄よりも一層與

論を代表する樣になつて居る――の議員の多數は熱心な王黨の人々で、ナポレオン主義や共和主義の區別なく悉く之を撲滅したといふ熱望を有する者共であつた。南部諸州では斯かる主義を抱くものに對して虐殺や迫害が盛に行はれたのみならず斯かる主義を養成した事に就ては新教徒が責任があるといふので、新教徒に對する復讐的迫害さへ始まつた。斯くて極端なる王黨員及び加特力教徒の爲めに新恐怖時代が開始されたのである。而して王の政府は是等の優勢なる黨派の行動を今少し穩ならしめむと努めた。タレーラン及びフーシェはこの方面に向つて少からぬ盡力をしたので、之によつて彼等の從前の罪業を大に償ふ事が出來たのである。けれども今回の復讐的運動の爲めには色々の人が其犧牲となつた。有名なる人物にして流竄或は死刑に處せられた者が少くない。而して之が爲めに免官となり、或は獄に投ぜられた者の數は非常なものである。斯ういふ社會的空氣の中にはタレーランやフーシェの内閣は到底存在する事が出來なかつたのである。其位であつたから第二回巴里條約に署名したのはタレーランでなく、リシェリュー伯であり、又警視總監の役を勤めたものはフーシェでなくデカ

ーズであつた。斯くの如くダレーランやフーシェの內閣が倒れたのは取りも直さず反動の勝利を示すものであつた。此反動は二十五年間に亘る盲目的實驗の結果、民心が半ば從前の君主政治を慕ふに至つた事を示すもので、其中には此多事なる長年月の間に佛國民の心中に深く吹込まれた樣々の要素がある。又此反動は歷史家の目にだけ明かに見える樣な革命の根本的結果に取圍まれて居る。此反動は平和を愛するの念よりも寧ろ戰爭に飽いた爲めに起つたものである。斯ういふ事情の下に起つた反動であるから、其中には樣々の夢想や、破格や、怨恨などもあつたが、善にもあれ惡にもあれ此反動こそは實に近世佛蘭西の基礎を形造るものであつた。

第一七二節　第二回巴里平和條約

今や佛蘭西帝國が瓦解して仕舞つたから、曾てナポレオンの歐州征服によつて造られた政治地理を改造する必要が起つた。所が革命戰爭の爲めに成された數多の改革は何分にも根據が固く、且つ自然の事情に能く適合して居るから、如何

に熱心なる反動家も之を復舊さす事が出來なかつたのである。所へ今列强國が自治權を恢復して見れば昔と變つた事情が澤山あるので、能く之を審査して取るべきものは之を取り、捨つべきものは之を捨つる必要があつた。佛蘭西に關しては是等の問題は第二回巴里平和條約で解決された。而して此條約は第一回の條約と同じく佛蘭西に對しては餘程寬大なものであつた。何故列國が佛蘭西に對し斯かる寬大な處置を執つたかといふに、佛蘭西が從前の通り一の强國として存在することは歐洲權力の平均を保つ上に必要と考へられたからで、かの維納會議の時、列國が普魯西の傲慢なる提言を拒絕したのも同じ理由によるのである。又英國と露國とはこの問題の解決者としては最も重要な地位に立つて居たのであるが、その二國さへ佛蘭西には出來るだけ權力を殘して遣りたいといふ考をもつて居た。何故なれば英國政府は佛國民の心を宥めてブルボン王族に充分なる政權を與へむことを希望し、又露國皇帝はスタインの提言を耳にもかけず、たゞ宗教的熱情の夢に心を奪はれ、クリューデナー夫人（露國の男爵夫人にて宗教に對し預言者的熱心を有せしひとつた）の勢力の下に、武士的寬容の精神を以て行動したのである。クリューデナ

一夫人は今や不幸に沈める佛國民の爲めに大に辯護の勞を執つたのである。けれども同盟諸國はナポレオン叛亂に對しては素より佛蘭西が其責に任ずべき筈であると考へたから、英露兩國の意見に反對して、輕くても善いから何とか處罰の途を講ずる必要があると感じた。そこで同盟國は佛蘭西の北と東の國境にある城砦に占領軍を駐屯させ、且つ償金を出すことを命じた。此償金は相應に多額のものであつたが、然し之をナポレオンが普魯西やその他の諸國に負はせた損害額に比較すれば九牛の一毛であつた。同盟諸國は又ブリュッヘル將軍の提言に從つて、ナポレオンが掠奪した土地を舊所有者が取戻すことを是認した。又普魯西が將來に於ける佛蘭の侵入に對する自國防衛の爲めに何か實質的擔保を得たいといふ切なる要求をなしたにも係らず、列國はその要求を拒絶し、唯佛蘭西をして左の如き割讓をなさしめたのみである。即ちサボイの殘部をサルヂニアに割讓し、フィリップヴィル、マリエンブルグ、ブーヨン侯國等を新ネーデルランド王國に割讓し、ザールルイ、ザールブリュック、ランダウの諸地及び其附屬地普魯西及びバヴァリアに割讓し、ゲックスの一部を瑞西に割讓させたので、此割讓の爲めに佛

蘭西が失ふた人口は約五十萬であつた。

以上の諸條件は當時陰謀や政略の爲めに列國が區々たる問題に就て互に相爭ふて居た時、佛國の移住貴族の一人たるリシェリュー伯の手腕で得ることの出來る條件の中では最も容易なるものであつた。普魯西は素よりこの條件には不滿足であつたが、普魯西の外に之に對して不滿を抱いて居た國は唯佛蘭西けであつた。佛國人は之までナポレオンの戰勝の光榮に與ることにのみ馴れて居たから、今回の屈辱を感ずるの情も一層切であつたけれども、矛盾した事をするのは元來佛蘭西人の特色で、彼等は一方には其條件の中に含まれて居る一切の債務を拒絶しながら、他方には戰敗の苦惱と不正の應報の苦痛を實驗したのである。

第一七三節　維納會議（一八一四年——一八一五年）

佛蘭西を除いて其他の歐洲諸國に關する問題は已に第一回巴里條約で規定されたから、今度は更に進んで其細目を議する必要があつたから、翌年十一月、列國會議は維納に開かれた。此會議は實に華美を盡くした集會であつた、丸で御祭り

の樣であつたといふが、實にさもあるべき事であつた。何にしても空前の大戰爭があつた後に、たゞ一の土耳其を除くの外、歐洲各國の帝王及び全權大使等、何れも歐洲の粹を拔ける大人物が一堂に會合して、全局の平和條件を議定せむとするのであつたから、貴族や富豪等は此平和の回復を祝せむが爲めに、此會議に向つて盛なる歡迎をなしたのである。又此會議は諸國民の安寧幸福といふ事をも極めて壯重なる問題として討議したのである。實に今回ほど列國の君主が共同して其職責を果さむとした事はなかつた。又此時ほど歐洲の社會が可型的であつた事はない。又この時ほど君主及び外交家が文明的政治家としての手腕を現した事はない。然しながら改革が上から來るといふ時代は早や過ぎ去つて居る。今や君主は人民の命令を執行するもの、若くは僅に自分等の王朝を保護する者たるに過ぎなかつた。歐洲の諸君主がまだ革命の恐しさを忘るゝことが出來なかつた時、又ナポレオンの威嚇の聲がなほ彼等の耳に鳴りつゝあつた時、彼等は唯反動の熱に浮かされて自分等の職責には心をも留めず、只管自衛の途に汲々として居たのである。今これ等の諸君主がハプスブルグ家の首都なる維納を會

合の場所と定めたことは誠に適當な時であつた。抑ハプルスブルグ王朝は素と樣々なる民族の間に色々の懸引をして終に歐洲第一流の地位にまで登つたものであるが、今列國の君主は斯かる由緒ある王家の賓客として、佛蘭西帝國の瓦解の跡を調査するに當り、毫も國民の要求又は感情などを念頭に置かずして唯土地の問題のみに就て議論を闘はせたのである。獨逸の史家ゲルヴィヌスが「維納會議には唯統計委員があつただけで、國民的委員は一人もなかつた」と嘆じたのは之が爲めである。けれども斯かる政略の中にも自ら一貫せる主義がないではなかつた即ち多くの君主等は自分等は神の恩惠によつて王冠を戴いて居るのであるといふ主義を楯として王の稱號を辯護して居る。けれどもその實彼等の或る者は神の恩惠ではなく、唯ナポレオンの恩惠によつて王冠を戴いたのである。そこで是等の諸君主はかのタレーランが自分の行動を合法的と認定したのと同じ論法で自分等の主張を辯護したのである。フージェは斯かる新標語が前の「平等」といふ標語のやうに世を騷がせるものでない事を希望して居た。實際討論中或時の如きは此新主義を唱ふる人々によつて今にも歐洲の第二の難題が持

ち上るかと思はれる程であつた幸にも維納會議は無事に此難題を切拔けることが出來た

第一七四節　維納會議の決議(其一)――露西亞及び普魯西

是に於てか佛蘭西革命といふ民主的大運動の結果として一時歐洲の重もなる專制君主の勢力を强める事となつた。露西亞は芬蘭、ベサラビア、及びモルダビアの一部(これは土耳其から取つたものである)を保有したのみならず、ワルソー侯國(但し其西部だけはポーセン大公國として普魯西領となつた)及びクラカウの地を獲ることが出來た(此クラカウの地は他の一小州と共に隣の强國の保護の下に獨立共和國となつたものである)。露西亞が此結果を得ることに就ては、アレキサンドル帝が新に波魯王國を起すといふ計畫を抱いて居た爲めに非常に面倒となつて、やつとの事で其目的を達することが出來たのである。然しながら最も重大なる論爭となりかけたのは普魯西の要求一件であつた。以前に普魯西に對しては其國力を恢復させてチルシット條約以前の狀態に復舊させるといふ約

束が成立つて居たのであるが、今や普魯西は歐洲解放戰爭に於て大功勞があつたといふ所から、かの約束以上に其勢力を增加するのは正當であると考へる樣になつた。歐洲列國は革命戰爭の初から一八一三年の叛亂に至るまでは全く普魯西を輕蔑して居たのである。隨つて普魯西が運善くナポレオンに勝つ事が出來ても、左まで其功勞を認めなかつたのである。然るに普魯西の政治家は斯かる事實あることを忘れて居た。否普魯西の歷史家は今日も尙この事に氣が附かない樣である。さういふ譯であつたから普魯西がサクソニーの全部を要求した時には、忽ちに四方八方から非難攻擊の聲が起つたのである。

抑サクソニーといふ邦はその地位が頗る曖昧であつた。サクソニー王はライプチヒ戰爭の後同盟軍の爲めに捕虜となつた時までは、自分はナポレオンの味方であるといふて居たのであるが、若し獨逸聯邦の一として之を見れば、サクソニーのこの行動は慥に獨逸國民に對する叛逆といふべきものである。けれども他の方面から見れば獨逸國民なる者が當時存在して居たかといふことは一の疑問であつた。サクソニー以外の聯邦の獨立は戰爭の終頃に承認されたのである

が、若しサクソニーも勝手に和戰の問題を決する主權をもつて居たとすれば、サクソニー王たる者が已に戰敗に對する償をなした以上は、他の聯邦と同じく神聖なる君主權を維持することが出來ない理由はない筈である。結局普魯西はサクソニーの半分(面積は比較的に廣いが人口は稀薄な)を獲る事となつた。之にポーセン侯國、瑞典領のポメラニア、エルベ河とライン河との間にある普魯西の舊領地ウェストファリア、ケルン選擧侯國の大部分、アーヘン、ミュンスター、ツリーア、パーデルボルン等の諸市、ディーツ、ジーゲン、ハダマール、ディルレンブルグ、及びモーゼル河畔並にマース河畔の佛領の數區を合併すれば、土地の面積は從前よりも狹いが人口は却つて前よりも多くなつた譯である。そこで普魯西は大小二部に分れる事になつた。而して國境は餘り堅固なものではなかつたが、然し波蘭の最後の分割後よりは遙に確實であつた。其住民は舊教徒四分、新教徒六分といふ割合で相混じては居たが、兎に角全體が殆ど獨逸人であつたといふ事が出來る。

第一七五節　維納會議の決議(其二)——墺地利

若し普魯西は斯くの如くして知らず識らずの間に將來の獨逸帝國の基礎を置いたとすれば、墺地利匈牙利王國は中部歐洲及び伊太利半島に於ける永久的至上權を得たものといふ事が出來るとはメッテルニヒの所信であつた。政略に富める墺相メッテルニヒは一八一三年の戰爭の時、同盟國に加擔する事を承諾する前に、先づ有利な條件を定めて置いたから、墺地利は戰爭の上では一番働の少い國であつたにも係らず、大に其邦土を擴張することが出來、一七九二年の當時に較べて數百萬の人口を增加して、茲にその國勢を挽回することが出來た。即ち維納會議の結果、墺地利は一方には厄介な領地であつた伯耳義と獨逸の西北部の地方を放棄した代りに、他方には曾てナポレオンに奪はれた土地を悉く取返すことが出來たのみならず、舊ヴェネシア諸州(但しイオニア群島を除く)を合併する事が出來た。

伊太利は數區に分割されて、タスカニーは墺帝の弟フェルヂナンド大侯爵に、モデナは墺帝の從弟フランコア大侯爵に、パルマ、ピアセンザ、グアステラ等の地は墺帝の女にしてナポレオンの配偶となりしマリー・ルイゼに與へられた(マリー・ル

イゼは依然として皇后と稱することを許された)羅馬法王はその領土を回復することが出來たが、墺國がフェラ及びコマチオに駐兵するを否認することが出來なかつた。ルカはエトルリアの前女王の領有に歸し、ネープルスはミュラーの沒落後、墺國からブルボン家の王フェルヂナンド四世の手に渡された。斯くの如く伊太利は殆ど墺國の勢力範圍内にあつたのであるが、たゞ例外ともいふべきはサルヂア王が伊太利に歸つて來て、ピードモン、サボイ、ニース、並に前のゼノア共和國を領有するに至つた事である。

第一七六節　維納會の決議(其三)——獨逸

獨逸問題の解決に就てもメッテルニヒの政策は見事に成功した。即ちメッテルニヒは此前の戰爭の時、墺地利が同盟國に加勢する條件として、同盟國が萊因同盟に加入せる聯邦の獨立を尊重すべきことを誓はせたのである(當時同盟諸國はナポレオンに歸服して居た獨逸の諸州を威嚇して、若し直ちに同盟國の味方をせぬ時には悉く其位を黜けて遣ると言ふのである)第一回巴里條約の時獨逸は同

盟によつて互に結合せる數多の諸君主によつて支配さるべきものであると云ふ事が規定された。此規約があつた爲めにサクソニーは殘れる領土を以て一王國の威嚴を維持することが出來、バヴァリアは墺地利に土地を返した代りにウルツブルグ、アシャッフェンブルグ、ライン、ファルツ及びフルダの一部を有することゝなり、ハノーヴァーは普魯西からヒルデシャイム、ゴスラー、東フリースランド、リンゲン等の地を得、その選擧侯は王の稱號を有する事となつた。ヘッセ大侯は地を普魯西に割いた代りとして、マインツ及び其附近の地を得、ワイマール侯、オルデンブルグ侯、メクレンブルグ侯は何れも大侯に昇進し、ナポレオンに立てられて王となつた者は引續き王の稱號を有するの權利を與へられた。結局獨逸の政治的組織は二個の軍隊的君主專制國と、四個の王國と、一の選擧侯國、六個の大侯國、十四の侯國、四個の自由市、即ちブレーメン、ハムブルグ、リューベック、及びフランクフルト・アム・マイン等から成立つ事となつた。

今回の獨逸主權の分賦は之を革命以前の組織に比すれば慥に一大進歩といはねばならぬ。けれども之ではまだ健全な獨逸國家を建設する基礎となることは

出來ない。國が幾つにも分裂して居るから、善く團結した所で是等小國家の微弱なる同盟を造り得る位のものである。所がそれが取りも直さずメッテルニヒの目的には、最も善く叶ふて居たのである。墺地利の外交上から言へば、斯かる小國家を相手にする方が餘程便宜であつた。といふのは墺地利もこれ等の小國家も同じく普魯西の膨脹を懼れて居た。又兩者何れも小君主の獨立を確實にして、普魯西の蠶食政策を喰ひ止めたいといふ考をもつて居た。其上墺地利は歐洲に於ても關係の廣い國であり、又絕對君主政治の國であるといふので、普魯亞を嫉んで居た多數の小君主は何れも墺地利を有難く思つて居たから、墺地利が內心彼等の主權を剝奪せむとして居ることには餘り氣附かなかつたのである。さういふ有樣であつたから神聖羅馬帝國を復興せよと叫ぶ熱狂的反動家が起つた時にその聲は直ちに墺地利及び是等小國の不同意によつて揉み潰されたのである。獨逸諸國の上に最高國民議會なるものを置いて、之によつて獨逸の全體を治める樣にしたら善からうといふスタイン一派の人々の考案も同じ精神で否定されて仕舞つた。ウュルテムブルグ及びバヴァリアの如きは自分等の臣民は到底普魯西の如きものと同化して一國民となることは出來ないとさへ宣言した。

斯くて下らぬ議論に數ヶ月を費した後、メッテルニヒの計畫は愈〻成功した。そこで爾來獨逸の諸侯は自國內では絕對權を有することゝなり、諸侯同士の關係は出來得る限り減少せられ、最早獨逸國民として團結することが出來ぬやうになつた。其代りに獨逸聯邦（ドイチエル、ブンド）なるものが組織された。其目的は一は外敵の侵入に對して獨逸の保全を謀る爲め、一は獨逸內に於ける一つ〳〵の邦國の保全を謀る爲めであつた。獨逸邦には夫れ〴〵人民の代表者があつて、それが一國の政治を處決して行く樣な規定になつては居るが、然しそれは唯外面上の裝飾だけであつて、其裏面に於て政治の實權を有する者は即ちフランクフルト・アム・マインに於ける獨逸國會である。而して獨逸國會の議長は誰かといへば墺地利皇帝の全權であつた。

第一七七節　維納會議の決議（其四）——ネーデルランド、スカンディナヴィア、瑞西

維納會議は佛蘭西の北方に一の障壁を築く必要を感じ、此目的を達する爲めに伯耳義と和蘭とを合して、オレンヂ公の爲めに一王國を造つた。オレンヂ公は此外にルクセムブルグ大侯國を併有する事となつた。之はオレンヂ公の領地であつたナッソーの地が今回普魯西領となつた爲めの代償である。斯くてオレンヂ公は、ネーデルランド王ウィリアム一世といふ稱號を有する事となつた。所が伯耳義と和蘭といふ如き互に毛色の異つた國民を合併すれば、双方共折合の惡いものであるといふことは初から明瞭であつた。だからオレンヂ公の王國は已に其建設の當時から分裂すべき要素を含んで居たのである。

瑞典は丁抹領の那威を讓受けた。之は瑞典領のポメラニア及びリューゲン島が僅にラウエンベルグ及び二百萬ターラーの金で普魯西に與へられた代りである。西班牙、葡萄牙、土耳其等の國境には何等の變更も加へられなかつた。瑞西に關しては世話燒きの墺地利が干渉を試みたる爲めに一時國内に反動が起つて一騷ぎしたのであるが、結局國の組織を變更するにも及ばずして治まつたのである。たゞ之までは十九縣(カントン)であつたものが今度ノイシャテル、ヴリス、ジェネバの三縣を加へて二十二縣となり、之が一種の聯邦の姿となつた丈けである。

第一七八節　大英國の精神上の收益

斯くの如く維納會議によつて近世歐洲の政治地理が定まつたのであるが、英吉利は唯マルタ島、ヘリゴランド、希望峰、ギアナ、マウリチウス、その他二三の征服地を保有することを許され、又イオニア群島共和國の保護(寧ろ一時的領有といふ方が適當であらう)を依託された丈けである。何分島國である爲めに物質的膨脹には都合が惡かつたのであるが、其代り英國人の勇敢なる行動によつて得たる英國の威信及び精神上の影響に至つて頗る大なるものであつた。英國がナポレオン戰爭に參加し始めた當時は前世紀の末頃に於ける不手際(米國獨立戰爭のことなどを指す)の爲めに、其名譽が傷けられて居たが、今や大英國は勇敢なる國民の模範として、大陸諸國の仰ぐ所となつた。爾來永き間英國の一言一行は千斤の重きをなすに至つたのである。

第六章　獨逸、伊太利、及び西班牙の覺醒

歌「モシ〳〵御苦勞だが一寸此冠を私の頭の上に確かり着けて下さるまいか」

（斯く言ひつゝ歌は無恰好な冠を被りたるまゝ、行きつ戻りつして居たが何うした椀（はづみ）か冠が二つに割れて仕舞つた、それを持ちながら跳び廻はり、撥ね廻はりして）

歌「旨い〳〵、これで先づ出來たといふもの。サア之から話すなり、見るなり、唄くなり、詩を作るなり、勝手なことだ。物といふものは自分に取つて成功であり、自分に取つて相應しくさへあれば、それで善いとしなければならぬ。」

……ゲーテ……

第一七九節　ナポレオンと革命との關係

ナポレオンを以て恰も革命の反對者であつたかの如く考へ、專制政府の爲めに復讐したのであるなどゝ思ふのは大なる謬見である。ナポレオンは素より民主政治を嘲弄して、壓勇的專制政治を實行したに相違ないが、而も彼は「人權」といふ

ことを最も善く解釋し、又最も有力に之を實行した人間であつた。假令血と虚僞とは彼の武器であり、自己の至上權は彼の目的であつたにもせよ、彼はたゞ革命の本質上避くべからざることをなしたのみである。即ち彼は人民の政治的自由の爲めにその力を注いだのである。一方には隨分慘酷なる惡事もしたが、他方には法律に重きを置き公正を行はむと努めたのである。又彼は征服したる國民を奴隷の如く待遇したと同時に、人民には平等主義の恩惠を被らしめた。彼は惡しき性質を有しながら、從前よりも一層寛大なる社會的秩序を武力を以て世に傳播せむとしたのである。つまりメフィストフィレスと同じ事で

「心は常に惡に向へど
何時も善きことのみをなすてう
一種の靈の力」

であつた。若しナポレオンが居なかつたならば、佛國民が王政復古前に平等主義や自由主義などいふ革命の二大標語を堅く抱持する事が出來たかといふ事は頗る疑問である。若し又ナポレオンが居なかつたならば、獨逸、伊太利、西班牙等の

諸國民が封建的野蠻主義を脱却するまでには、まだ長い苦痛を經驗しなければならなかつたに相違ない。

第一八〇節　獨逸に於けるナポレオンの影響

歐洲の何れの地に於ても佛蘭西帝國の滅亡の爲めに、一方には同帝國が蒔いた惡い結果がなくなつたと同時に他方には善い結果もなくなつたことは事實である。然し就中ナポレオンが最も價値ある影響を遺した所は萊因同盟に加はつた國々である。是等の國々はナポレオンの御蔭で能く結合され、其勢力を增し、終には歐洲の政治界に重要なる地位を保たむとする大望心を抱くまでに至つたのである。而して是等諸國の君主等は終に封建的貴族を壓服せむと試むるに至つた。斯くて彼等は絶對君主權を振はむと勵みながら、同時に公明正大なる帝國主義の行政に近いて來たのである。中には極小の國でありながら堂々たる帝國の眞似をしたなぞといふ滑稽な事もあつたが、然し大體から言へば其結果は臣民に取つても君主に取つても良好なるものであつた。一方には政府が不活潑で

あつたといふ譬を免れぬであらうが、他方には人民の束縛が取除かれたといふ事實もある。而して中世的制度は殆ど殘らず廢滅に歸して仕舞つた。奴隷制度、特權、壓政、不公平等は大概廢れて、其跡へ法典が出來、公平なる課稅が行はれ、國家に對する同等の權利が打建てられた。而して之が利益を被つたものはたゞ全體としての國民だけでなく、國家の各部分にも其利益が及んだのである。何でも在り來りの事は一も二もなく尊敬するといふ風は佛蘭西の改新主義の爲めに破壞されて仕舞つた。ナポレオンが獨逸國內の選擧侯國や、自由市、監督管區などといふ區別を廢して、之を混和した爲めに、其間に蟠つて居た憎怨、嫉妬の念は多少減却する事が出來、少くとも外國に對しては同國人として互に一致する事が出來る樣になつた。殊に歐洲解放戰爭の如きは共同の目的の爲めに一致團結するの念を養成したのである。若し疑問を明瞭に示すことは已に解答の半に達したものであるといふ事が眞理であるとすれば、ナポレオンが獨逸の至上權を握つたといふ事は、十九世紀に於ける獨逸の政治上の大問題を半ば解釋したものであると言ふ事が出來る。從前の獨逸帝國の形骸がまだ殘つて居る間は、新に建設さる

べき眞の政體は如何なるものたるべきやといふ事は、普通人の眼には見えなかつたのである。所が一朝舊帝國の形骸が破滅して見れば、獨逸には何うしても一個の有力なる指導者が國内に起つて、内輪同士の小競合を已めさせて、全國を打つて一團となす必要があるといふ事が明かになつた。

第一八一節　獨逸諸邦の進歩

さて獨逸に於ける覺醒運動は其州々々によつて其性質も異い、又其固執力も異つて居た。例へばバヴァリアの如きは最も進歩せる改革を斷行したのである。バヴァリアと言へば由來頑迷と無智とで評判の高い所であつたが、今や寛容な精神に富めるツワイブリュッケン家の支配に歸し、且つ新に新教國を加へることゝなつた。バヴァリア王マックス・ヨセフは氣前の善い人物ではあつたが、一向政治的手腕のない人であつた。けれども彼の宰相にモントゲラスといふ偉人物があつた。モントゲラスは佛蘭西の開明思想を熱心に歡迎し、佛蘭西の助によつて、大にバヴァリアの國力を增長したのである。實にこの時代はバヴァリアが斯かる方針を取ることによつて其利益を收むべき時期であつた。モントゲラスは斯くする事によつて單にバヴァリアの邦土を加へたばかりでなく、今少し永久的なる事業を完成したのである。即ち彼は教會の財產を沒收し、騎士の抑壓に着手し、奴隸制度及び階級上の特權を廢し、中央集權の實を擧げたのである。

之に反しヴュルテムベルグ王は極めて自分勝手な遣り方で改革を實行した。之が爲め王は元來手腕の人であり、且つ國内に改革の必要が感せられて居たに係らず、當時の國民はたゞ王の壓制と、佛國より課せらるゝ負擔の重きを感ずるのみで、少しも王の改革を喜ばなかつたのである。

ウェストファリア王ジェローム・ボナパートの臣民はナポレオンの爲めに只ならぬ負擔を課せられ、其上ジェローム・ボナパートは性質が野卑で、物事に不注意で到底王冠を戴くべき人物でなかつたから、斯かる王に支配せられたる臣民こそ氣の毒の至であつた。

バーデンは最も熱心に佛蘭西風を崇拜した所で、其王チャーレス・フレデリックは人民の爲めに非常なる利益を與へんと苦心して居た。

之に反しサクソニーでは王が心から改革が嫌ひであり、又富有なる市民等も之を好まなかつた爲めに、何等の改革をもなす事が出來なかつた、

メクレムブルグは封建的貴族の根據地であつた爲めに、此處では西歐に於ける最古の王族を代表せる君主も當時の社會的潮流を利用する事が出來なかつた。

ハノーヴァー若くはクールヘッセの如き直接に佛蘭西の支配を受けて居た所では、舊領主の歸來と共に斷然ナポレオンの事業を打崩さむとした。然し普魯西はフレデリック大王の法律を使用して居たが、たゞ萊因諸州に於ては、ナポレオン法典を繼續する必要を感じた。

然しながら茲に獨逸全體に通じて佛蘭西の行政の特別の結果として認め得べきものが一つある。それは外ではない、革命的佛蘭西が舊帝國、舊墺地利、舊普魯西を何の苦もなく足下に踏み付けたといふ所から、政府に民主的要素を入れることは決して希望のない事ではないといふ考が何處にも起つた事である、又同一の原因によつて獨逸諸州の君主等は佛蘭西人が其至る所に建設せる民主的制度と相戰はむとするに至つたのである。普魯西の宰相ハルデンベルグが普魯西

王の權勢を國會の下に置いた時に、之を辨解する最良の理由は次の如くであつた。即ち普魯西が今後一國の輿論を定めんとする場合には危險な隣人であるウェストファリアのジェローム・ボナパートだけは算用に入れないといふことであつた。

だから獨逸の君主の多數は歐洲解放戰爭の時、獨逸は佛蘭西から大なる恩を受けて居るといふ事を嚴肅に承認したのである。又それだから有名なる聯邦條例第十三條に於て、凡ての獨逸聯邦は代議政體を採用すべきものであるといふことを規定するに至つたのである。

第一八二節　スタイン伯の召還

斯くの如く一方には獨逸聯邦が段々變體して、獨逸帝國の基礎を造りつゝあつたと同時に、他の一方には聯邦中の一王國が復活して獨逸帝國建設の準備をなして居たのである。普魯西が其惰眠を覺まし、改革に着手し、將來獨逸國の指導者たるべき準備を始めた時は、丁度チルシット條約の出來た後で、佛蘭西の大軍は普魯西に駐屯し、其國民の上に巨額の賠金が課せられつゝあつた時である。普魯西

は今や生存の爲めに死力を盡して戰ふべきの時であつた。此時國の危急を救ふべき大任はスタイン伯に降つたのである。元來スタインは普魯西王とは氣の合はぬ方であつたが、何分にも國家危急の秋であつたから、國王はスタインの精力と勇氣と智力とに依らむが爲めに彼を呼び返したのである。そこでスタイン及び其一味の人々は國家の危機を救ふ爲めに根本的思想から手を着けたのである。即ち國民の道德的、宗教的、愛國的精神を興奮させ、勇氣と自任と犧牲的精神とを鼓吹し、又愈〻獨立の戰爭を始むべき第一の好機會を捉へんとして其時機を窺つて居た。

第一八三節　解放の詔敕(一八〇七年)

スタイン一派の人々は流石にアダム・スミスの學說や英國史に精通して居たので、何れも普魯西國民に適宜の個人的自由を與へることに由つて、普魯西の社會的經濟的狀態を改良せむと努めた。スタインが內閣に入つた時には、すでにハルデンベルグ內閣の委員等の手によつて、解放詔敕の草案は殆ど出來上つて居た。

而して此草案を一の法律となすまでに僅か一週間以內で事足りたのは、實にスタインの功勞であつた。此詔敕が發布さるゝまでは普魯西王國に於ける農民の狀態は即ち奴隸的農民(ゲイレーネージ)制度といふので、其起原を尋ぬれば昔の貸地制度から來て居る。この貸地制度に據れば地主は裁判權及び警察權を有し、小作人には絕對的奴隸の狀態より普通の借地的農民の狀態に至るまで色々の段階があつた。所が解放詔敕は地主と小作人との間に斯かる關係を新に造ることを禁じ、且つ一八一〇年のマルチン祭(十一月十一日)以後は一切奴隸農民制度を廢して、普魯西の地には自由民の外には如何なる人民も居ない樣にするといふことを宣言した。又從前は土地を分割して、貴族市民、農民に割り當て、土地と人間とは離すべからざるものとなつて居た。所が今度の詔敕によれば、何人たるを問はず、自今如何なる種類又は如何なる位置の土地をも所有することが出來、又各貴族は貴族たる資格を失ふことなくして實業に從事することが出來、又市民から農民に、或は農民から市民に轉ずることも出來る樣になつた。遺產として讓受けた土地は其性質の如何を問はず、家族の承諾さへあれば、他人に讓渡しても善いことゝなり、其外土

地交換に關する色々便利なる規定が設けられた。又農民借地制度を全く消滅させない樣にする爲めに之に多少の制限を置く事になつた。之は畢竟スタインが富豪或は敎育ある人々の慾心の深い事を恐れたからであり、又普魯西の樣な國では富よりも戰鬪力の方が必要であり、又賤民の群よりも自由民の方が大切である事をスタインが知つて居たからである。

第一八四節　普魯西の市政改革

要するにかの解放詔敕なるものは普魯西の究屈なる軍隊的施政に伴ふ最要の弊害を除去する爲めに必要なる手段たるに過ぎなかつたのである。それよりは寧ろスタインが有限的地方自治政治を執行して、將來の代議政體の基礎を造つた事の方が一層歩を進めたものであつた。但し地方自治といふてもそれは唯都會の地に限つたのである。昔は獨逸の都市といへば獨立と自由の城砦であつたのであるが、其後戰爭の爲め、或は軍隊的專制主義などの爲めに、獨立自由などいふ健全なる感情は商工業の中心地には最早認めることが出來ぬやうになり、た

だ少數の自由都市にのみ其面影が殘る事となつた。而して多數の市民は政治問題には冷淡になり、當局者の命令に對しては只盲目的に服從するのみとなつた。だから先頃の戰爭で普魯西官僚政治が打破された時の如きは、普魯西の都市はたゞ茫然としてなす所を知らなかつたのである。

そこでスタインは市政を改革して、市民たるものは學校、公共事業、貧民等の爲めに盡すべき責任を有するものたることを規定した。所が元來惰眠を貪つて居た市民等は此新しい責任に對して、何だか極り惡く感じたのであるが、愈〻解放戰爭が始まつて市民悉く大責任を負ふて自ら立たねばならぬといふ時になつて、始めて普魯西市民が一大覺醒をなし、健全なる公共的感情を起すに至つたのである。他の獨逸諸邦の都市も普魯西の例に倣ひ昔の自由制度を復活さす事となつた。

第一八五節　普魯西に於ける中央行政の改革

スタインは更に中央行政の改革を斷行した。即ち行政の上に出來るだけの統一

と精力と活動とを與へ、國家最高の目的を達する爲めに國民の凡ての力を最も自由自在に利用し得る樣にせむと努めた。此目的を達せむが爲めにスタインが發布した訓令の中に次の樣な文句がある。

「各省の樞要の地位に立つべき官吏の數は最少限たるべし。而して之を任免するの方法は單純にして且つ自然なるを要す。是等の官吏は君主と最も密接なる關係を保ち、君主が直接に彼等に與ふる所の命令に從つて各省を指導すべきものとす。斯くの如くして是等の諸官吏は下級機關の行政を支配すべし。下級機關の組織も亦之に倣ふべきものとす。」

素より中央及び地方行政に關する此改革的詔敕はスタインの理想通りには行かなかつた。又一度は理想通りに行つても其後色々の變化に遭遇したものが多かつた。けれども何しろ專制君主政治の爲めに、最も立派なる官僚制度を新に造ることが出來たのは慥にスタインの力であつた。

第一八六節　ハルデンベルグの立法

スタインの改革に對しては貴族の側から烈しい反對があつたが、彼の後繼者もハルデンベルグはボヘミアの國境でスタインと會見した結果、二個の勅令を發布した。此勅令は一は階級的特權に對して戰を宣言したものであり、一は代議政體を起すべきことを約束したものであつた。貴族等はハルデンベルグが宰相となつたならば、屹度スタインの施政を打壞すに相違ないと信じたから喜んで彼の入閣を迎へたのである。所が豈に圖らんや、ハルデンベルグは商工業の上に課せられた束縛を取除いたと同時に、自今各階級に通じて課稅をなすべきことを宣言した。素よりハルデンベルグの改革案の中には隨分餘計な事や詰らないものがあつた。又其中には人民の冷淡と、地主の反對と、彼自身の個人的缺點との爲めに失敗に歸した者もあつた。然し之と同時に永久的價値を有するものもあつたのである。例へば猶太人に自由を與へた事、或は商業組合を廢した事、或は領主と其小作人との關係を規定する勅令を出した事の如きは夫れである。前の解放詔勅ではまだ自由民も土地所有に對する色々の義務を負はなければならなか

つたが、今度は祖先傳來の地を耕す小作人は、その地主に代價を拂ひ、且つ從前の要求（例へば小作人に不幸があつた時には地主に助けてもらふ權利のあつた事、小作人の力が及ばない時は地主が小作人の家を修繕してやり、若くは稅金を拂つてやること等の如き）を放棄した以上は、其土地の絕對的主人公となることが出來る樣になつた。そして小作人と地主とが土地讓渡事件に關して任意の交渉をなし得る爲めに、二年間の猶豫を與へ、其期限が濟んでもまだ交渉が解決しない場合には、國家が手を下して之を解決する筈であつた。扨て土地を讓渡すといふ場合には小作人から地主へ私有所有權の代價として、其價格の三分の一に相當する土地、金錢若くは穀物を差出すのである。

此勅令に次で又第二の勅令が出た。第二の勅令は土地を善く耕作さすことを目的としたもので、之は詰り土地の所有者を變更すれば農業が發達するものであるといふ原則に基いて、土地の自由交換に關する一切の制限を除去するものであつた。

第一八七節　墺地利の退步的政策

普魯西が將來一の文明的勢力となり得る爲めに執つた手段に就ては、當初始ど之に氣附くものがなかつたのである。又維納會議の結果この國は殆ど獨逸人だけで組織される樣になり、一方には蠶食的なる佛蘭西と境を接し、他方には露西亞帝國と隣接するに至つた時、何人も普魯西が將來獨逸帝國を組織せむとするものであるといふ事を了解する事は出來なかつたけれども普魯西に對する嫉妬心の强かつた事は前と變りはなかつたのである。何故といふに第一の理由は普魯西が從前よりも更に重要の地位に立つ樣になつたからで、第二の理由は墺地利が獨逸諸邦の間に此感情を强めさせたからである。當時たゞ少數の空想家を除くの外は、獨逸帝國の中心點はハプスブルグ家の內にあるなどゝいふ考を抱く者はなかつたのであるが、然し幾ら弱くとも兎に角墺地利の如き老大國が普魯西と反對の地位に立つて居る以上は、何うしても普魯西は將來獨逸國民を率ゆる上に必要なる威嚴を缺いで居る、と言はねばならぬ。のみならず當時の墺地利政府の傾向は正統主義を維持して、國民といふ如きものゝ要求を排斥することであつた。だからネーブルスがブルボン家の手に移された場合に、フェルヂナ

ンドは舊王政と兩立しない樣な憲法を造り、又は斯くの如き改革を行ふことはならぬといふ事を秘密條約で極められて居た。今や墺地利にはヨセフ二世の改革に對する反動が起り、且つ皇帝フランシスが頑迷なる保守家であつた爲めに、唯軍隊組織のみを除くの外、革命的臭味を有するものは悉く排斥せられたのである。墺帝は羅馬王と稱する自分の孫（即ちナポレオンの子）がナポレオン帝國の業を嗣がむことを希つて居たのであるから、墺國は歐洲解放戰爭に對する他の列國の熱心にすらも動かされなかつたのである。ナポレオンのモスコー退却の時に佛蘭西を擊つべき事を煽動した者は、墺地利政府の爲めに捕縛追放されて仕舞つた。一八〇九年の戰爭の時には墺地利も隨分勇しく戰つたので、その時墺地利が始めて獨逸國民の獨立といふことを言ひ出したのであるが、而も斯く言つたのは唯佛蘭西を敗北さす目的に外ならなかつたのである。だからワグラム戰爭の後には墺地利は再び從前の感情を有する樣になり、之が爲めに墺國人は一八一三年の戰に功勞ある普魯西の勇士に向つて同情を有することが出來なかつた。又墺地利の敎化の仕方では國內の獨逸民族は何らしても國內の他の民族と精神上の

交通をなすことが出來なかつたのである。又出版物條例は非常に究屈なものであつたから、維納の敎育ある人々は一八〇九年に佛蘭西が獨逸を占領した當時國敵なる佛蘭西人が獨逸の文書を飜刻したお蔭や、又は佛蘭西警察のお蔭で始めて獨逸古典文學に接することが出來たのを有難く思ふた程である。墺國內にある獨逸人は戰爭の負擔や財政上の大恐慌の爲めに元氣沮喪し、自然、快樂や安逸を求める樣になつて居たから、心ならずも佛蘭西の警察や、僧侶や、密輸入者の手を經て與へられる智的供給を受入れたのである。彼等は今少し人心を引立てる樣な精神上の食物を得たいと思つたのでもなく、又今少し寬大なる政治的組織を得たいと渴望したのでもない。而して墺國政府は成るべく諸邦の人民を其主君に服從さす樣に勉め、又是等の主君を人民の色々な希望の爲めに動かされる事のない樣にする事を勉めた。

第一八八節　獨逸人民の政治的態度

して見れば獨逸が革命時代より得た所の利益は莫大なものであつたには相違

ないが、然しその利益たるや只將來に於ける發達の基礎が出來たといふに過ぎないことを忘れてはならぬ。現在の所では政治上の缺點を補ふべき自然的勢力がまだ人民の中に存在しなかつたのである。成程或地方では解放戰爭の記憶もあり、又其時代に出來た國民的憲法的希望もあつて、獨逸民族は將來光榮ある發達をなすべき運命をもつて居るといふ事が感ぜられたに相違ないが、然し公共心や政治思想がまだ極めて幼稚であつたから、一國の運命を增進する爲めに、目に立つ程の事業をなす事は出來なかつた。英國や佛國では、市民の階級は今にも至上權を掌握せむとする勢であつたが、獨逸に於ける市民の階級は假令社會上に於ては自由があり、智力上に於ては覺醒狀態にあり、又商工業の上に於てはかの大陸制度の爲めに大なる活動を加へたにもせよ、まだ有爲の市民たるべき第一の資格が缺けて居た。即ち彼等の精神は戰爭の苦痛や商業復舊後の色々なる困難な事情の爲めに、益〻衰弱を加へたのである。彼等の生活狀態は素より色々の點に於て大に改善されたのであるが、然し彼等の骨折りに對する大なる報酬は彼等の子孫の代になつて始めて與へられたのである。

伊太利でも獨逸と同じことで、ナポレオンの管轄に歸した時から國民的生活が覺醒して來た。又それが成熟するまでに長い年月を要したといふ事も獨逸と能く似て居る。其外にも兩國の間に類似點は少くないが、然し一の重要なる點に於て二者の間に相異がある。といふのは獨逸が永い間分裂の狀態にあつたのは、重もに諸邦が銘々頑强に割據して居たからであるが、伊太利が永く分裂して居たのは國が諸外國の領土となつて居た爲めで、人民の團結心の缺乏といふことは分裂の重もなる原因ではなかつたのである。維納に於て實際獨逸の事を處理して居る者は矢張り獨逸諸邦の君主達であつたが、之に反して伊太利を支配して居るものは外國人によつて開かれた國會であつた。而して伊太利人はこの國會に一人の代議士をも出すことが出來なかつた。彼等が一の獨立國を打建てるまでにはまだ〳〵多くの經驗や知識を積まねばならぬならかつたのである。詰り獨逸に於て最も缺乏して居たものは統一といふ事であり、伊太利に於て最も缺乏

第一八九節　伊太利獨立の必要

して居たものは自治といふ事であつた。獨逸の發展と伊太利の發展との間に大なる相違を生ずるに至つたのは、要するに斯くの如き特色があつたからである。

第一九〇節　伊太利に於けるナポレオンの施政の影響

暗憺たる革命の潮流が歐洲を掩ひつゝあつた時、伊太利文學が勃興して、過去數百年に亘つて伊太利人の精神を卑屈ならしめた所の依賴心を攻擊し始めた。眞面目なる思想界に於ては歐洲にその名を轟かすやうな思想家が現れ、又文學界に於ても人才が現れて、國民に向つて男性的、道德的精神を鼓吹した。パリニ（伊太利の詩人一七二九年—一九九年）は寫實的文學を復興させ、頗る皮肉な諷刺を以て上流社會に行はれつゝあつた罪惡を攻擊した。ゴルドニ（伊太利喜劇作者一七〇七年—一九三年）の喜劇は作者の意匠の面白い事、陽氣なる事、その滑稽的な所などが能く伊太利人の性質や風俗に合致して居るといふので、餘程人の受けが善かつたのであるが、彼は之によつて伊太利の喜劇を一新する事が出來た。次に出たのがアルフィエリ（伊太利の詩人一七四九年—一八〇三年）及びウゴ・フォスコロ（伊太利の詩人にして愛國者一七七八年—一八二七年）で、共に熱心に愛國心と獨立心とを鼓吹した。

だからナポレオンが伊太利にチサルピナ共和國を建設して自由民權の樂しさを感せしめた時に、中には何の意味をも知らずに無暗に革命的文句を呼はつた者もあつたが、中には伊太利國獨立の夢を實現せむとする少數の熱心なる愛國者もあつた。而してナポレオンの勢力が終に伊太利の全半島に擴がり、伊太利とナポレオンとは親類の間柄となり、之まで伊太利の諸邦を支配して居た外國の諸君主は國外に驅逐さるゝに至つて、之まで理想といふ樣な事に餘り心を動かされなかつた地方までが、伊太利の獨立、或は伊太利の統一といふ考を起す樣になつた。そしてナポレオン皇帝の旗の下に伊太利の諸邦から兵士が集り來つて、互に肩を列べて戰爭をなし、歐洲諸國民を相手に戰つて共に勝利を博する事が出來た。伊太利の市民は又ナポレオンの保護の下に同一の法典、同一の行政組織、同一の租稅、同一の敎育を有する事が出來た。そこで今や伊太利人は自信を有するに至つたと同時に、大に中世紀の遺物たる內輪喧嘩を已めることが出來た。彼等は又市民平等の價値を知る事が出來たと同時に、將來の自由を夢想して樂むことが出來た。何は兎もあれ伊太利人の間には已に封建的特權は消滅し、國家の

負擔は公平に割當てられる樣になつたのであるから、彼等に取つては佛蘭西の羈束は左まで苦痛を感ぜられなかつたのである。成程ナポレオンに從つて西班牙に遠征した三萬の伊太利人中、生きて還つたものは僅に九千人足らずであり、又彼に從つてモスコーに攻入つた二萬七千の伊太利人中、無事で歸つたものは僅に一千人を踰えなかつたことは事實である。けれども伊太利人は今や困苦に慣れて來たのである。斯く言ふも斯かる困苦に對して少しの不平もなかつたといふのではないが、然し彼等が新に得たる希望は其不平の爲めに少しも弱められる樣なことはなかつた。

第一九一節　伊太利の獨立

斯ういふ國民的向上心も後には國勢が復古した爲めに排斥さるゝに至つたのであるが、それまでは中々勢の盛なものであつたことは敵も味方も證明する所であつた。ナポレオンがエルバ島から歸つて來た時、ミュラー將軍が冒險をしたことは(素より失敗ではあつたが)取りも直さず斯かる向上心の最初の活動である

といふ事は、或る歷史家が伊太利の獨立史を書くに方つて言ふた所である。ネープルス王即ちミュラー將軍が伊太利國民に向つてその宣言書を發布した時には、北はアルプス山から南はシラ海峽(即ちメシナ海峽)に至るまで何處へ行つても唯、伊太利の獨立といふ叫聲の反響のみ聞えて居たのである。この叫聲は其後一八四八年から九年まで、又一八五九年から六〇年まで、幾百萬の伊太利人を動かし、獨立旗の下に幾千の愛國者を引寄せたのである。ワーテルローの戰爭後、血氣に燥るミュラーはネープルスからブルボン王族を追掃はむとして失敗し、終に其生命を失ふに至つたのであるが、然し彼は伊太利獨立の戰爭を宣言する考と勇氣とを有せし者の第一人として倒れたのである。又ミュラーの敵も遂に彼の叫聲を聞かざるを得なかつたのである。見よ、墺帝はロムバード人に向つて、彼等が伊太利人であることを忘れよと命じ、その墺帝の配下にある伊太利諸州は唯墺帝に對する服從の關係のみによつて團結すべきものであると宣言し、又メッテルニヒは伊太利の軍隊を解散させ、伊太利王國の名稱及び制度を禁止して、公々然と伊太利の自治心及び團結心を抑壓せむとしたるに係らず、墺地利のベレグラ！デ將軍が

ミュラーに威嚇さるゝや、直ちにロムバード人に向つて次の如き宣言をなしたのである。

「墺地利皇帝は殊に伊太利諸州に眷顧を垂れさせ給ひ、今回ロムバード、ベネシア王國を特別の條件にて建設し給ふ事となれり。即ち墺帝陛下の伊太利臣民は之によつて其尊崇せる伊太利の國風を保存するを得べし。」

而して成規の憲法に從つて墺帝の代表者としてこの王國に一人の總督を置く事となつた。斯くの如く前後矛盾したる命令が下つたので、一方の命令は唯ネープルスの軍隊に少しばかりの增援兵を合併して、ローマニアに多少の騷動を引起した丈に止まり、他方の命令は三十二年間、人に忘れられて居た樣な事であつたが、然し此宣言こそ伊太利の歷史に於ける新時期を劃するもので、如何なる列國の決議も此新傾向を止めることは出來なかつたのである。

第一九二節　伊太利の復古

然るに復古したる伊太利の諸政府は國民的希望と異つた方向に進まむとしたのである。共和主義に對する反動が大なる災害を起さずに濟んだ所は唯タスカニーだけであつた。これは重もなる革命前に於ける大公レオポルドの治績が頗るその宜しきを得たるが爲めである。然し羅馬では僧侶等がリパロラ及びパッカなどを主領として凡ゆる佛蘭西的改革に對する復讐的反抗を試みたのである。そこで裁判法警察制度等の如きも凡て舊式のものを再興し、剩へ異端糺問所及びジェスイット教團さへ復活さるゝことゝなり、街燈は廢せられ、凡ゆる政治的書類は禁止せられ、異端者を彈劾すべき法文數百條の制定となり、教會財產の移轉は之に相當すべき代價を拂はぬ以上は凡て無効であると宣言せられ、ナポレオンが廢棄じた千八百の僧庵と六百の尼寺が復興される事となつた。

ピエドモンでは人柄の善い王があつたにも係らず、國內には羅馬と同じく亂暴なる反動が起つたのである。之は王ビクトル・エマヌエルが性來弱い方であり、且つ舊弊な人物であつた上にピエドモンは伊太利諸州の中でも最も忠君の念が厚く、且つ最も封建的傾向をを有する國であつたからであらう。所が王がサルヂニアから歸つて來た時、日頃佛蘭西の政治に對して不平を抱いて居た貴族等は

王を擁して復古的政策を實行した。そこで一七八九年以後になされた改革は凡て抹殺せられ、亂雜なる一七七〇年の法律が復興され、佛國統治の下になつた十六年間に於ける一切の裁判上の判決は無効であると宣言せられ、諸官廳は一七九八年の國家曆を採用すべきことを命ぜられた。ナポレオンがポー河に架けた橋すらも危い加減で破壞を免れたのである。佛蘭西人が植物園に植えた樹木は引き揚げられて仕舞つた。唯ナポレオンの士官だけが早時の免官を免れることが出來たのみである。

モデナの事情も殆どピエドモンと同樣であつた。然しナポレオンの配偶者であつた女王マリー・ルイゼはパルマに於て能く佛蘭西風の秩序を保ち、その臣民からも尊敬を受くることが出來た。ネープルスでは羅馬やピエドモンほど極端な反動はなかつた。之は一には其女王が死んだからでもあり、一には王の性質が物事に無頓着な方であつたからでもある。然し王フェルヂナンドは自分が不幸な時にした約束に背き、墺地利の政策に服從して專制政治を施し、自ら稱して兩シシリー聯合國の王と呼んだ。之は畢竟彼がシシリー島に滯在中自分等夫妻がシシリーの獨立憲法の爲めに少からぬ煩累を受けたから。今同憲法を否認する爲めに斯くしたのである。且つ王は佛蘭西の爲政者に服從した者に對しては誰彼の別なく猜疑と嫌惡の情を抱いたのである。而して墺地利は斯かる反動的暴行を是認したのみならず、寧ろ之を奬勵したのである。唯ロムバードがベネシア王國の臣民に對して兎に角表面上だけも好意の宣言をしたのであるが、その外は惡むべき探偵制度や國風破壞主義によつて、ハプスブルグ家とその伊太利に於ける墺地利の臣民との友誼的關係を破壞して仕舞つたのである。

第一九三節　伊太利の秘密結社

伊太利の現狀に就て墺地利が大に警戒したのは無理からぬことであつた。何故なれば伊太利の復古は丁度火山地の上に築かれた家の樣なものであつたからである。といふのは此時から伊太利の社會組織の中には縱橫無盡に秘密結社が行はれたのである。其中で最も勢力のあつたのがカルボナリ團と稱するものである。此カルボナリ團の由來は至つて不明であるが、然し兎に角十九世紀の初に

ネープルスで騷亂のあつた時に起つた樣である。ボッタといふ人の說に據れば、伊太利が復古した爲めに或ネープルスの共和黨員はアブルッツォーやカラブリアの山中に隱れ、其處で團體を造つて、其地方の人民の重もなる職業即ち炭燒業を以て其團體の名稱としたといふ事である(カルボナリとは炭燒業といふ事)。所が世の事情が變るにつれて、此團體の目的も變つた樣である。佛蘭人たるミュラーがネープルスの王であつた時、カルボナリ團は當時流竄の身であつたネープルス王が歸國の上は人民に憲法を與へる積りであるといふた事を信じて、今まで抱いて居た共和主義の事は忘れて仕舞ひ、表面にはミュラーを尊敬して、內實はフェルヂナンドの爲めに計つた樣である。若し伊太利の復古が賢明な方法で實行されたならば、斯かる秘密結社などは起らなかつたであらうが、復古政府が事茲に出ですして徒らに共和主義者に對し亂暴な行動を執り、又幾千といふ共和主義の士官を免職したために、爲め秘密團體は大に激昂して大々的膨脹をなすに至つたのである。カルボナリ團は今度組織を變更して、團員は銘々武裝をなし、且つ同團の基本金として毎月一リラを納める事となつた。そして一方の手を劍に當て、他方の手を十字架の聖

像に當てながら、自分は何時までも暴君を憎み、自由と平等との爲めには決死の覺悟で戰はむとする者であるといふ誓約を立てる事となつた。又暴君の鮮血を表すべき紅の水を以て洗禮を施され、或は暴君の生首を表す所の頭蓋骨の盃から飲ませられたのである。そして日常は極端なる民主的敎義を繰り返し敎へられることであつた。さてカルボナリ團員が生命を睹して建設せむとする政治的理想は如何なるものであつたかと言へば、二十五州、即ち伊太利全半島、チロール、舊ベニス諸州(ポッカ・ヂ・カタロ河に至るまで)、及び百哩以內にある地中海の諸島を合せて、オーソニア共和國なるものを建設する事であつた。

所が他の方面には斯かる團體に對抗して加特力敎及び法王權を保護するといふ目的で、サンフェヂスチ團及びコンチストリアリ團などが組織せられて法王の認可を得たのである。また反動的保守的傾向を代表して起つた團體がカルデラリ團である。その外にもカルボナリ團と殆ど同主義を以て起つた團體も澤山あつたが、その中の或者は唯名前が殘つて居るだけで、或者は中部及び南部の伊太利を荒らした盜賊隊の仲間として世に知られて居る、斯くの如く伊太利の社會

が退歩した爲めに國内に陰謀が起つて、立派なる國家的理想の實現を妨げむとする專制主義と戰ふに至つたとすれば、伊太利の社會が退歩した事は寧ろ感謝すべきものと言はねばならぬ。

第一九四節　西班牙に於ける革命運動

ナポレオンは獨逸や伊太利に對しては成るべく國を統一する政策を執つたのであるが、西班牙に對しては愚かにも之と反對の政策を執つた。彼は西班牙の王朝を變更せむとした時、國民に向つて新に憲法を與ふべきことを約束したから、今度ブルボン王朝が倒れると間もなく、西班牙の有力家から成り立つ議會を組織した。所がこの議會は凡ゆる議會中の最も不完全なものであつた。その譯は方々に一揆が起つて居るから佛蘭西の軍隊が駐屯して居ない地方では議員の撰擧が出來なかつたから已むを得ず手近な所から議員を集めるといふ始末で、隨つてこの議會は決して西班牙の國民を代表するものでなかつたからである。斯かる不完全な議會に向つてナポレオンは新王と新憲法とを提出した。所が無責

任な議會は同胞の叛亂せる地方から懸け離れて安全な地位にある事ではあり、其上新王たるべきジョーセフ・ボナパートは善い人であるといふ話もあり、又佛蘭西の遣り方にも改革を加へるといふ約束もあり、旁々の理由で新王と新憲法とを受入れることに決した。然るに西班牙の國民は之に對して大不贊成であつた。第一、外國の羈束の下に立つといふ事は西班牙人の自負心が承知しない所であつた。第二、異教徒なる佛蘭西人の手を借つて自國の改善をなすといふ如き事は、由來頑固なる西班牙人が到底忍ぶ能はざる所であつた。幾らジョーセフが政務に奮勵して人民の敵意を和らげる事が出來ても、國民の全體は決して行政上の改革位で承知するものでなかつたのである。それのみならず色々な事情の爲めに、今や西班牙人が自分で國勢を改革せむと努むるに至つた。けれどもそれは比較的少數の人々の事で大多數の人民は一向改革の必要を感じなかつたのである。大多數の西班牙人は唯佛蘭西人さへ逐ひ出して仕舞へば善いと思つた。改革の如きは外國人の提言に據らうが、自國の有志者の意見に出でやうが、そは彼等の關する所ではなかつたのである。

素と西班牙の中央議會(ハンタ)なるものは不規則な團體で、たゞ時局の急なるときに臨機の處決をなす資格がある外には何等の權利もなかつた。然るに今や國家の危機に臨んで中央議會の無能なることが愈〻明瞭となり、又益〻危險となつたので、大に人民の輕蔑を招くやうになり、同時に從前の諸官吏の嫉妬的反對を受くるに至つた。所が中央議會は權力を放棄する事を好まなかつたから、一八〇九年に翌年を以て國會(コルテス)を開くべきことを約束して、一日でも己が壽命を長からしめむとした。然るに中央議會は實際國會召集の準備を等閑に附して居た內に、セヴィールからガヂッに進んで來た佛蘭西軍隊の爲めに逐拂はれて仕舞つた。そして保守黨からも、進步黨からも、暴民からも一樣に排斥されて終に解散の已むなきに至つた。

斯くの如く中央議會が顚覆したことは取りも直さず保守黨の勝利であつた。當時自由黨はまだ幼稚であつて保守黨と比肩する程の地位に達しなかつたから、

兎に角一時は舊西班牙が復活して、民主政府は全く不信用となつて、仕舞つた。中央議會が解散される前に、議員等が其後繼者即ち五人の攝政官に向つて、國會召集の約を履行するやうに希望した時、攝政官は之に答へて、自分等の第一の目的とする所は敵人を國外に放逐して、フェルヂナンド王を其位に復せしめる事であるが、此目的を達する最上の手段は現存せる法律及び習慣を嚴正に守つて行く事であると答へたのである。

第一九六節　西班牙に於ける改革の要求

攝政官等の此政策は一般人民の意に投ずるものであつたが、茲に色々切迫した事情があつた爲めに、保守的態度を持續することが出來ないやうになつた。其譯は當時西班牙の主都となつて居たカヂッは貿易の盛な都會丈けあつて、西班牙の中でも人心が最も進步し、頑迷固陋の風が最も少い所であつた。隨つて革命的傾向も自然その中に存して居たのであるが、唯戰爭の爲めや、或は英國の軍隊が其處に駐屯して居た爲めに一時抑へられた丈けである。所が今や全國の政治家

的抱負を有する者は悉くカヂヅに集まり、又中央議會が曾て宣言した國會召集問題に關して意見を抱ける者が內地の方から集まつて來たものは幾千人といふ程であつた。此都ではナポレオンの侵入よりずつと以前、即ち十八世紀の前半、恰も某教父が始めて歐洲の科學的知識を西班牙人に紹介した頃から、已に智的文明の運動が始まつて居た。前王の治世中二三の文明的理想家が政府に向つて極めて穩當なる要求をなした爲めに政府から虐遇された事がある。中央議會の議員中にも斯かる進步主義の代表者があつたが、その中で最も賢明で、又最も信用の厚かつたのはヅョベラノスであつた。彼は正々堂々の議論を以て大に同黨の意見を辯護し、中央議會中の重鎭であつたが、惜いかな曾て慘酷なる入獄の身となつた事があるので、大に健康を害して居た爲めに充分な働をなす事が出來なかつたのである。自由黨の方では政府が彼等に迫害を加へた事や、又は官吏の腐敗と無能との甚しきを見て大に憤慨して居る。最早病弱なるヅョベラノスの力では之を制御する事が出來なくなつた。其處へ攝政官が已に行はれつゝあつた國會召集の準備を中止した爲めに、激昂の度はます〳〵高まつて、カヂヅ市民の間

にも廣く蔓延するに至つた。

第一九七節　西班牙の攝政官終に國會を召集す

中央議會がまだ頗覆されない時に、同議會が發布した國會召集令によれば、國會は上院下院の二つから成立つものであつた。斯くの如く上下兩院を置くことになつたのは、ヅョベラノスの提案によるので、つまり一院だけにするといふ說と、貴族院僧侶院、衆議院の三つに分けるといふ保守派の說とを折衷したものである。中央議會の命令に隨つて特別委員會は改革案の調製、憲法の原則の說明、國會の地位の決定等に取り懸つた。所が間もなく佛蘭西の軍隊がカヂヅ附近に現れたので攝政官は今にも復讐されるかと思つて戰慄して居た。攝政官の地位は日に日に危險となり、國會を召集せよとの叫びは益〻猛烈となつた。この時に當つてフェルヂナンド王のなしたる行動は徒らに王の味方をして愈〻狼狽せしむるのみであつた。といふのは王は當時ヴァレンセーに幽囚されて居たのであるが、ナポレオンの機嫌を取るのが一番自分の利益であると確信したから、同地からナポレオ

ンに乞ふて、或る皇妃と結婚してナポレオンの養子になりたいといふことを申し出た。そこで佛蘭西の方では得たり賢しとなしてフェルヂナンドの信書を出來るだけ廣く世に發表した。西班牙の人民は之を以て佛蘭西人の拵へ事と思つたから左まで心にも懸けなかつたのであるが、カヂヅにある西班牙政府は能くフェルヂナンドの性質を知つて居たから、この報知に接して非常に驚いた。ナポレオンが西班牙王と親類になつた以上は彼はこの憶病な王を擁して勝手次第な事をするに相違ない。而して其危機は既に目前に逼つて居る。それよりは假令王の權利を侵害しても此危機を避けた方が增しである。斯ういふ考で攝政官は六月十八日を以て國會即時召集の布告を發した。

所が今國會を召集することは西班牙に取つては單に改革たるのみならず、實に革命を起す所以であつた。國會議員中の過激論者は盲目的反對に遇ふて益〻その勢を加へた。又國會を開くに當り豫め充分の注意をして置かなかつた爲め、議場に於て極めて亂暴な事を演ずる樣になつた。才徳兼備のジョベラノスは憂愁に沈んで故山に歸つたが、間もなく死んで仕舞つた。而して國會を一院とする說は遂

に通過されたのである。けれども此事が如何に重大なる結果を起すかといふ事に就ては誰も考ふる者はなかつた。而して一院から成れる此國會の議員は重もにカヂヅ市內の嘩しい連中が撰擧した人々であつた。之は畢竟佛蘭西人の駐屯せる地方では國會議員の撰擧をなすことが出來ないから、已むを得ず是等の地方からカヂヅに逃げ込んだ人々に議員撰擧の事を托したからである。

第一九八節　西班牙國會の處決

斯くて九月二十四日、佛西兩軍が打出す砲聲が殷々としてカヂヅの都に轟きつつあつた時、西班牙の國會は莊嚴なる儀式を以て開會されたのである。國會は人民の多大なる囑望によつて勵まされながら、傳說的規則や君主の命令等に束縛される事なくして、西班牙救濟の大問題を討議した。その熱心と勤勉の點に於て、才幹ある議員の多かりし點に於て、而も斯かる事には至つて無經驗であつた點に於て、又ブルボン王族の施政に不信任であつたといふ點に於て、又議員等の固執したる主義が抽象的であつたといふ點に於て、實に西班牙の新國會は佛蘭西